

ふるさと



慶應義塾大学整形外科同窓会誌

ふろさく

1991

慶應義塾大学整形外科同窓会誌

目次

あゆみ……………矢部裕(36) 4

(別館4階整形外科学教室施設図・写真)……………14

研究施設改修特集

昭和20年、30年代の動物実験研究の回想……………岡田衛生(26) 20

別館研究室……………松尾久男(26) 23

私のティーテルアルバイトのころ……………菅野卓郎(27) 24

研究室の思い出……………森雅文(30) 26

私が入局したころ……………赤坂勁二郎(37) 30

改築前の病理研究室にまつわる思い出……………花岡英弥(37) 31

ティーテル・アルバイトの断片的思い出……………田中守(38特) 34

私の入局時の思い出……………石下峻一郎(40特) 37

研究室、研究生生活のおもいで……………土方貞久(41) 38

アイオワ大学と慶大整形……………若野紘一(47) 42

別館4階バイオメカ研究室……………井口紘一(49) 44

教室改修工事記……………小川清久(50) 45

股関節研究班の現況……………坂巻豊教(50) 48

新米学長の近況と雑感……………平林冽(39) 50

研究副主任を終えて……………内西兼一郎(39特) 50

| | | |
|-------------------------------|------------|----|
| 落第助教授…………… | 富士川 恭輔(43) | 52 |
| 教室幹事退任にあたり…………… | 藤村 祥一(47) | 55 |
| スポーツクリニック開設…………… | 竹田 毅(47) | 56 |
| 医局副幹事、会計、病棟医長に就任して…………… | 堀内 行雄(52) | 59 |
| 医療サービスの質と価値評価…………… | 左奈田 幸夫(13) | 61 |
| ふるさと…………… | 小柴 清定(14) | 63 |
| 回想…………… | 田辺 重信(15) | 64 |
| 矢部教授、慶應義塾大学病院長に就任おめでとうございませう。 | | |
| 今後のご活躍を願う…………… | 浅葉 義一(23) | 65 |
| バレエと整形外科…………… | 小川 正三(29) | 67 |
| ライオンズクラブ・ガバナーになって…………… | 阿部 恒夫(専3) | 69 |
| サンドバッグの思い出…………… | 野口 朝生(34) | 71 |
| 清水市立病院整形外科の歴史…………… | 高橋 惇(40特) | 74 |
| 近況報告…………… | 吉沢 英造(41) | 76 |
| 酵素注入椎間板の生体力学的検討…………… | 小柳 貴裕(59) | 78 |
| 開業して思うこと…………… | 渡辺 邦夫(61特) | 79 |
| 留学便り…………… | 大谷 俊郎(59) | 81 |
| 新入局者紹介…………… | | |
| 教室だより…………… | | |

あゆみ

矢部 裕 (36)

1. 和と伝統と研究

昭和61年8月から教室をまかせられて、5年の歳月が流れました。私の在職期間の約1/2が過ぎたわけでありませぬ。まことにあつという間でありませぬ。慶大整形丸は順調な航海を続けているのでしょうか。

着任の祝賀会の席で述べ、ふるさとの前々号で記した所信、和と伝統と研究の三公約について思い起こしてみませぬ。

和を貴ぶことは、組織の基本と考えませぬ。和は思いやる心から出発ませぬ。結婚式の祝辞で思いやりについて自らの心に聞かせるべく喋って参りました。思いやりとは、相手の身になって考えることであり、夫婦間のみならず、医師として、またすべての対人関係にとって、組織にとってもっとも重要なことませぬ。

外来における患者さんへの接し方、comicalへの思いやり、紹介患者さんへの返信等良い方向へ向っているのでしょうか。慶應であるという思い上った態度は鼻もぢならないものでありませぬ。誇りは内に秘めてほしいと思

います。

慶應の卒業生は頭は良いが、要領は良いが、自らが汗まみれ、泥まみれになって効率の悪い仕事をするに欠けるうらみがあります。これでは真の仕事は実りませぬ。教室には自分の業績にはつながらぬ効率の悪い雑用も

あります。このふるさと作りもその一つでありませぬ。

赴任当初、教室は各研究・診療班に分かれ、班員はその班については努力するが、教室という単位ではあまり物を考えない、そして特に若い人の間における同門という認識は極めて低いものがありました。各班が各々conférenceをもち、各班毎の忘年会、新年会、研究会は盛んであるが、教室という単位ではお義理で出席する。

秋の同窓会は老人クラブの印象すらありました。教室単位のconférenceをもつ、教室単位の新年会を復活するとか、考えてもみませぬが、大きな慶應整形丸には慣性があります。そう進まねばならなかつた歴史的背景と合理性もあります。強制されたものでなく、自然にそうなる環境作りが大切であると、夜遅くまで学問とはあまり関係のない雑用に医局長とともにとりくみませぬ。率先垂範であり、先ずからめ手からの理解協力を仰ぐことにあります。多くの関連病院、特に地方で苦勞されている医長の先生方との話し合いであります。静岡地区、北関

東、神奈川県、三多摩地区の殆どどの病院を訪問いたしました。慶大整形外科学教室の最も誇れるもの、財産は日本一の質と数をもつ有能な人材であり、関連病院であります。この活用と協力が今後の教室の将来を決めるという確信であります。更に開業している先生を含めた同窓のすべての先生方との協調であります。大内前同窓会会長、菅野同窓会会長を始めとするすばらしき、心暖まる先輩方の励ましでありました。

更には、慶大医学部内における他科、他部門との協調、医学部外、日整会等を通しての協調、そしてその輪は医学界を超えて、広く政界、財界に迄延びて行く可能性があります。

勿論、教室内を放置していたわけではありません。また研究・診療班を否定したわけではありません。私は私自身もっともやりたかったこと、手の外科の診療・研究に専念することを断念し、私はすべての班に属する人間であるという信念の下、各班すべてが向上する様に、特に弱小班への支援をより深く心掛けました。各班が壁を作ることなく、教室という絆を通して、互いに競合し、切磋琢磨して成長を続けることへの配慮であります。

5年経って、何時の間にか、教室という絆がより強まっている気配を感じます。私の欲目でしょうか。

伝統は時代とともに歩いて行くものと考えております。研究については、以下項を更めて述べさせていただきます。

2. 新研究制度の設定

研究制度については、歴史的背景から述べる必要があります。

大学紛争、学位制度返上、池田教授の御病気等があり、教室はしばらく実質的学位審査権を持ちませんでした。この為、研究は各班にまかせられ、一部の班の仕事のみが学位に連なっていたようでした。御存知のように教室の研究班は、脊椎・脊髓、手、膝、股（小児整形）、肩、腫瘍、生化学班に分かれ、体の局所で分かれた診療班が大部分を占めます。外傷とか、リウマチとか、骨関節に関する基礎的研究が少ない理由がここにあります。

幸いなことに、私は赴任後4カ月で学位審査権を得ることが出来ました。

先ず52回生以降のアンケート調査をいたしました。立派な研究発表はしたもののペーパーになっていない人への督促、また10年余にわたって研究を続けてはいるが、まとまっていない人への指導を行ないました。ほゞ3年かかり、先ずこのことに終止符をうたせていただきました。

た。

学位に関する研究テーマは、各班が出し、研究費も主に各班でまかなっていた様です。この為、各班で指導体制は大きく異っており、教室員の研究は4年終了時に先ず各臨床・研究班へ入ることから始まっていたようです。卒業臨床教室と研究に関し、教室として統一した制度を作るべく、昭和62年からスタッフで熟っぽい討議を重ね、以下に述べる新制度を制定致しました。

1) 教室の卒業教育訓練期間は6年とする。日整会認定医になることはすべての教室員の義務とする。学位に関する研究は希望者のみが行なう。

2) 学位に関する研究への応募資格は最低一ケの副論文をもつものとする。(但し、平成4年度からは語学試験に合格することを追加)。

3) 毎年12月に研究テーマの募集を行ない、レジデント3年生に対し、説明会を開く。応募希望者はテーマを出した指導者との話し合いを行ない、御見合いが成功したならば、研究主任(教授)がこれを承認、決定する。

原則として3年間で研究を完成する。

4) 研究指導者は、学位を有する教室員とする。教室内の講師以上のスタッフは、毎年1ヶ以上、助手の

スタッフは0・5ヶ以上のテーマを出し、指導にあたる。

関連病院の先生方へも広くテーマを募集し、研究指導者になっていただく。

5) 研究指導者は、論文が完成する迄、指導する。国内発表では研究者が主演者、主著者となるが、シンポジウムや国際学会の発表等では指導者が主演者となりうる。

これで教室としての統一された研究制度が出来上がったわけです。つまり研究指導の責任はテーマを出した指導者個人にあり、研究班にはないこととなります。しかし各研究班の研究の一端を担うテーマが多いので、当然その研究班員となり、またその診療班とのかかわりも出て参ります。入室後6年までは各診療班員たりえない。7年目に始めて、診療班員たりうる。それは属していた研究班と別の診療班へ入りうることも可能であることに参ります。

研究班と診療班との兼ね合いはなお問題が残り、平成2年の研究テーマ選別に際してその弊害が出て参りました。即ち診療、研究班へ入りたいがためにその班の研究テーマにとびつくことです。体の局所に分かれた研究テーマでなく、もっと基礎的な骨関節に関する研究を促

進する為に、今年度からは私が調整をはかることにいたしました。

私は、三種の研究手段、即ち形態学、生化学、生体工学が整形外科にとって最も必要と考えました。形態学については花岡講師を中心とする組織、病理、電顕等も重要ですが、マクロの解剖学、柔らかな御遺体による機能解剖が行える様、目下工作中です。生化学については、中川君を中心として成果をあげております。生体工学については後述するCPMの研究を契機に慶大理工学部堀内、佐藤、山崎、富田先生の御協力を得、井口君の努力で、研究機器の整備も完了致しました。今後が楽しみです。

これらの三手法がドッキングした際、骨、関節の、或いは局所に分かれた各班の研究もその真理が明らかになるものと考えております。

平成元年度から大学院生を募集し、平成2年度と本年度各一名ずつ入学致しました。大学院生には、学位取得を目的として入るのではなく、将来の教室の研究指導者として大きく育ててほしい希望があります。このため、基礎的研究手段を身につけてもらいたく、1年はそれらの研究施設への留学を考えております。入学した2名はいずれも能力があり、私の期待に答えてくれています。

将来が楽しみであります。

3. KKSとCPM

教室として募集し、応募を受け付け、最終的に私が承認した研究に対しては、教室がその研究費と研究施設を提供する責任があります。

一つの研究課題に付、年間最低100万円のランニングコストがかかるのであれば、年15名の応募者、実質研究期間を平均2年とすれば、年300万円の研究費が必要となります。科研費を始めとする各種研究助成への応募、治験に加えて、何とか自動的に入ってくる方法はないものかと頭をしぼりました。協力病院制度はうまく行きませんでした。

人工関節はかなり使われております。しかし外国製であります。教室のオリジナルなものを作りたい希望もありました。国内外の学会では機械展示に注目し、物色致しました。セラミックとチタンが今後人工関節の素材となることに間違いのない。先ず京セラに的をしぼり、井口君に京都蒲生、私は鹿児島国分の京セラ研究所に見学に参りました。国分ではむしろEC回路と人工宝石に目をうばわれました。人工関節の研究への協力、常に改良を加えて行くこと、将来は外国への輸出も考慮すること、

これらの能力を考えると京セラ以外にありませんでした。オステオニクスを使い始めた股関節班坂巻君を説得し、柳本君のCT解析による基礎的データと慶大関連病院の大きさを武器として京セラと協同開発しました。2年近くの股関節班の努力で、bipolarでtotal contactに近いfitting stemをもつ人工股関節(勿論人工骨頭としての使用も可)試作品は出来上がり、KKS (Keio Kyocera Series)と名付けました。その試作品は私の部屋に飾ってありますが、臨床応用の結果は今の所上々です。

1、2年度PRの機会を経て、次第に関連病院でも使っていただけになるようになりました。股関節班のみならず教室全体の研究に大きく寄与するはずであります。

CPM (continuous passive motion) は膝のみならず、各関節に広く応用されております。しかしながら尚種々の問題点があります。

2年余り前だったでしょうか。月ヶ瀬の斉藤正也教授から、損保への研究テーマとして、整形外科と脳外科とでは非adaptする様にとの話があり、井口君と徹夜して作文致しました。CPMの開発に関する研究というテーマで、産学協同、学際的研究とし、東大、東北大、慶應の理工学部、更に東海大、藤田保健衛生大学の整形外科、月ヶ瀬リハセンターと慶大リハ科と協同して、研

究計画を提出いたしました。まさかそのまゝ、通るとは思ってもいなかったことであり、研究内容、研究費配分の事務的処理、研究成果の発表等仕事量は増えましたが、これほど巨額な研究費をいただいたのは始めてであり、この為に御骨折りいただいた斉藤正也教授・植村恭夫常任理事に深謝申し上げます。御陰様で、3次元運動解析装置やテンシロン等の大型研究機器を備えることが出来ました。

4. 別館中央4階への集約

研究費に加えて研究施設の拡充も大問題です。

昭和62年、待望の新棟が開設致しました。新棟へ移転した跡地、つまり2号棟、別館、中央棟等の跡地利用に関して、各科血まなこの合戦が行なわれていたようです。私は教室内の整備に追われ、しばらくは内外漢たるをえませんでした。

臨床各科の教室、スタッフ室、研究室等の面積は、各科の勢力(?)、つまり有給助手数、大学院生数等で割出され、整形外科と精神科は現行面積が広過ぎるので、一部を放出する様にとの命令がありました。整形外科はパラプレジア医学会室(講師、助手室)を返還し、教室を移転する様にとのことでした。しかしながら、中央

4階の整形外科のスペースはX線写真倉庫4室とベランダまでがその面積に組み込まれておりました。跡室利用委員会委員長の斉藤和久教授の所に交渉に行きましたが、既に教授会で決定したことだから、どうにもならないと理路整然と断わられました。同委員会の資料を入手し、計算してみると、私の教授室の移転先は計算されておりません。それは先ずふせて、ともかくX線写真保管室は病院業務に関連することなので、これを整形外科教室の面積に加えることは不当であると執行部と交渉して、厚生女子学院寮階に移転することが出来ました。次いで教授室の移転先を別館3階に確保し、中央棟4階にあった内科感染症の部屋と交換致しました。これにより中央4階は全部整形外科の教室、スタッフ室、研究室となりました。

これらの部屋の整備は、小川清久君の努力で、大変にすばらしいものになりました。改装費用の約1割は慶應から出しましたが、9割方は教室持ちです。この為、藤村教室幹部の号令一下、沢山の治験を行いました。御協力いただいた関連病院の先生方に深く御礼申し上げます。現況の図面を付記致します。生体工学研究室にはCPMの研究で購入した大型研究機器が入っております。

あとは入魂あるのみです。

別館4階に教室が集約されて、歴代の前田和二郎、岩原寅猪、池田亀夫、泉田重雄教授の御写真を医局前のロビーに掲げました。目が光っております。時にはやさしく、時には厳しくみえます。私の部屋も研究室へ行く通路にあります。毎晩11時過ぎまで明かりがついているので、研究室へ行く教室員には眩しいことと恐縮しております。

5. スポーツクリニック

赴任当初、斉藤正也教授から慶應におけるスポーツ医学の話があり、資料もいただきました。その後植村医学部長、石川塾長からの話しもあり、井口君と構想を練り、義塾へ上申致しました。やがて日吉にスポーツ医学研究センターが完成し、山崎元助教授が水を得た魚の様に活動し始めました。

四谷信濃町内にスポーツ医学臨床センターを作る構想を関係者に説きました。特に荻窪病院浅野院長を頭とする慶應スポーツ医学懇話会のメンバーがバックアップしてくれました。

平成元年10月から副院長として執行部へ入り、平成2年新年の塾長の挨拶を契機に具体的活動に入りました。植村常任理事と安田医学部長の御理解御協力を得、ス

ポーツクリニック検討特別委員を作り、医学部として三田本塾へ正式に上申し、以後幾多の屈折はありましたが、本年4月には外来部門設置の許可が下り、スポーツクリニック運営委員会（設立準備）を設けました。以後も一、二の屈折はありましたが、竹田君とともに検討を重ね、平成3年9月2日には慶應スポーツクリニック外来部門の開設式をあげることが出来ました。

伝統のある慶應の中で、新機軸を実現するのは大変なことではありますが、不可能はないことを知った夢の様な感慨です。教室員全員のコンセンサスを得、一丸となったその努力に加えて、運とねばりがないと表現しませんでした。

さらにスポーツクリニックにとって、フィットネス・トレーニング部門の開設が必要です。別館に予定していますが、よろしく御支援のほど御願ひ申し上げます。

6. 第33回日本手の外科学会開催

平成2年5月22・23日、第33回日本手の外科学会を国立教育会館で開催させていただきました。ともかく無事に終わり、ほっと致しました。

昭和63年5月、第31回日本手の外科学会で、次期副会長に選出され、2年後には学会を主催することになりました。

した。当時は慶應へもどって2年弱、教室整備に追われ、また教室に対する気がねや、手の外科班に対する遠慮もありました。自分自身の構想はあっても、自分一人では何も出来ないもどかしさを感じました。内西君をチーフとして手の外科班のみならず教室をあげてのぞむ体制はつくりましたが、内容が伴わず、いろいろな不手際もあり、申し訳なく思っております。しかしながら、Dr. M. Inoueと田島名誉教授による日本手の外科学会のあり方をめぐる特別講演は、10年先の学会のあり方に対する宿題提起として意義のあったことと満足しております。多くの御寄付をいただき、まことに有難うございました。

7. 日本整形外科学会

日整会評議員選挙、理事選挙についても苦労がありました。

昭和62年初頭、早速に評議員選挙があり、経験を積んだ竹田医局長を参謀としてのぞみましたが、結果は大敗でありました。泉田会長あとの選挙であり、借りを返すべきだったのでしょう。平成元年の選挙は評議員選と理事選の両者でのぞまねばなりません。評議員選では教

理事選は、昭和63年の秋から準備を始めました。関東、

中部、北陸を廻りました。やはり関東と中部の地盤は固いものがありました。井口君と北陸を周り、ほゞ勝利を確信しながらも、何故こんなことをしなければならぬのかとの実感もありました。ともかく選挙には勝たねばならない。理屈はない様です。13年余り名古屋で過ごし、中部の方達は暖かく迎えてくれ、励ましてくれ、また協力していただきました。この年の理事選挙は歴史に残る激戦でありました。上位で当選出来たことに慶應の伝統の力を感じました。伝統を保持するのも大変なことです。

理事となり、三浦会長（理事長）、鳥山理事長の采配する理事会に出席致しました。庶務会計担当、社会保険等委員会の担当理事ということです。長年教職にあって、自分と最も関係のない分野での仕事でありました。

担当して間もなく、本郷税務署の立ち入り監査があり、研修会講演料等の源泉徴収をしていないことで、おとがめを受け、追徴金を支払わなければならない羽目となりました。がどうにか切り抜け、既に日整会総会で庶務会計報告をやらせていただきました。

社会保険医療費点数設定の仕組みも良く分からず、厚生省、日医、外保健、保険審査委員会、臨床整形外科学会と日整会の関係等、やっと分かりかけた時は担当の任

期を終えていました。

平成3年度の評議員選挙は話し合いが成立し、理事選も無投票で再選されました。京都における第一回理事会で小野村理事長を選出いたしました。その夜、小野村理事長から副理事長をやってくれまいかという依頼があった時、とまどいました。私より先輩の多い理事の中で、何故私が選ばれたのか分かりませんでした。東京にあり事務局に近いことで留守番役に徹することと小野村理事長の下であれば何とかやれるであろうと考え、御引き受けいたしました。

副理事長のみならず、庶務会計担当、認定医試験委員会委員長という重責を負っております。これだけは教室内にまかせるわけには行かず、自ら日整会事務局の方と相談し、理事長の指導を受けてやっております。幸いなことに、日整会事務局長の樽井氏、会計担当の長谷川さん、試験委員担当の柳沢さん、いずれも有能であり、私は彼等のいう通り動いていれば宜しい環境に恵まれております。

日整会理事会の決定が、日整会の将来を決めるとあらば、その責任は重大であり、日整会の先人達が残してくれた偉大なこの財産を引き継いで、単に学会員のメリックトを守るだけでなく、他学会、諸外国の範たる方向への

歩みを進めるべく、勉強し、努力を重ねねばならないものと考えております。

平成8年の春には日本整形外科学会を主催することになりましょう。先のことのようにですが平成5年春の総会で決ります。よろしく御支援のほど御願ひ申し上げます。

8. 教室人事

伊勢亀助教授は、日本スポーツ治療医学研究会(副)の理事長として、平林助教授は慶應義塾看護短大の学長として転出いたしました。内西・富士川講師が助教授となり、藤村・井口・坂巻・小川君が講師となり、教室も少しは若返りました。

出来るだけ内外の人事の交流をはかりたいと考え、レジデントの1・6年生を全員教室に帰し、10年生前後で2年間サブスタッフ10名を選んで帰し、15年生以上をスタッフ(講師・助教授)として10名教室の指導者となっていただけ教室人事を定めました。現在、レジデントはこの制度にのせることが出来ましたが、教室員は尚数多く関連病院に出張しているため、サブスタッフの数が少なく、また助手のスタッフも2名おります。

少しづつこの形にもって行きたいものと考えております。

関連病院の人事は、一時開業する先生方が多く困りましたが、東京を離れた地方への赴任希望者が少なく、また学位の研究との兼ね合いで医局長は苦勞しております。内外人事の活性化をはかり、きめの細かい公平な人事を心掛けてはおりますが、すべての教室員の希望を満たすわけには行かず申し訳なく思っております。

尚増員希望の関連病院も多く、医師過剰の時代に有難いことと考えております。少し時間をいただきたいと思えます。何とかいたします。

9. 副院長から院長へ

平成元年10月に、小佐野病院長から副院長への指名を受け、安田執行部へ入りました。この10月1日からは、細田新医学部長からの指名を受け、病院長を仰せつかりました。自分にこの重責を全うする能力があるとは思えず、何となくとまどっておりますが、そんな余裕もなく新執行部は新人事にとりか、らねばなりません。幸いに副院長2年の経験があり、細田医学部長、神崎副院長、猿田副院長、金田事務局長、福岡看護部長いずれも有能であり、人柄がすばらしい。この人達と一緒に何とかなるだろうと考えました。

昭和33年、岩原門下に入室し、7年生で手の外科班の

チーフ、9年生で講師、医局長、15年生で助教授、藤田学園の教授、副院長、そして慶應へもどり、また副院長、院長と出世街道を邁進して来たように見えます。しかしいずれの時も不安を感じ、とまどいながら勤めて参りました。幸いに何とかこなせました。だから、今度も重責ではあるが何とかなるだろうと考えております。そして常に周囲の方達の暖かい御支援があった幸運に恵まれて参りました。運も何とかの一つと自分自身に云い聞かせております。

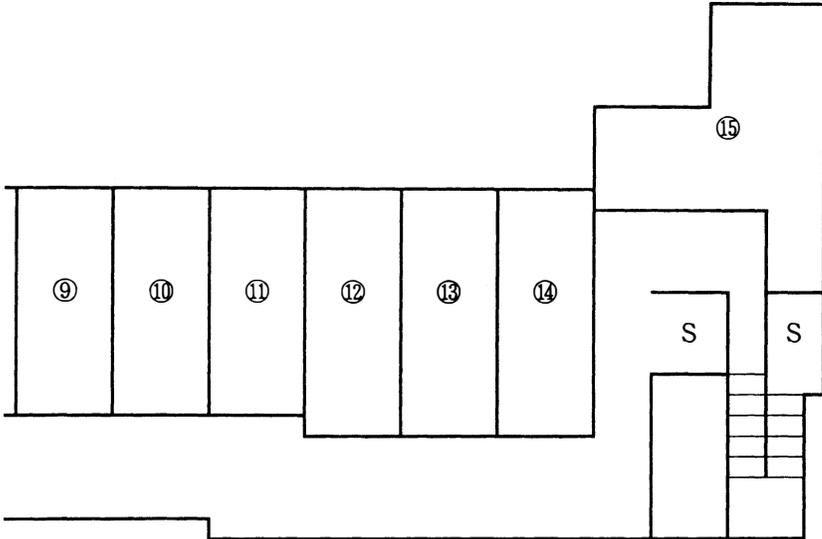
今後、自身健康に留意し、和と伝統を重んじ、教室を慶應医学を発展せしめる様、更に6年間、滅私奉公して参ります。

同窓会の先生方の暖かい御支援があることがどれだけ力強いことでしょう。

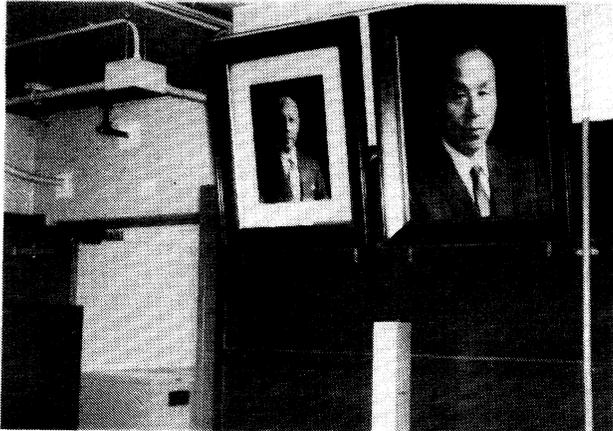
今後ともよろしく御願ひ申し上げます。

追記 教室のあゆみを書く心算が、何となく自叙伝を書いてしまった感が致します。本日一日で一気に完成に書き終えました。感情のほとばしるまゝ、他覚的描写に欠けたことを御許し下さい(平成3年9月30日記)。

・研究室見取図



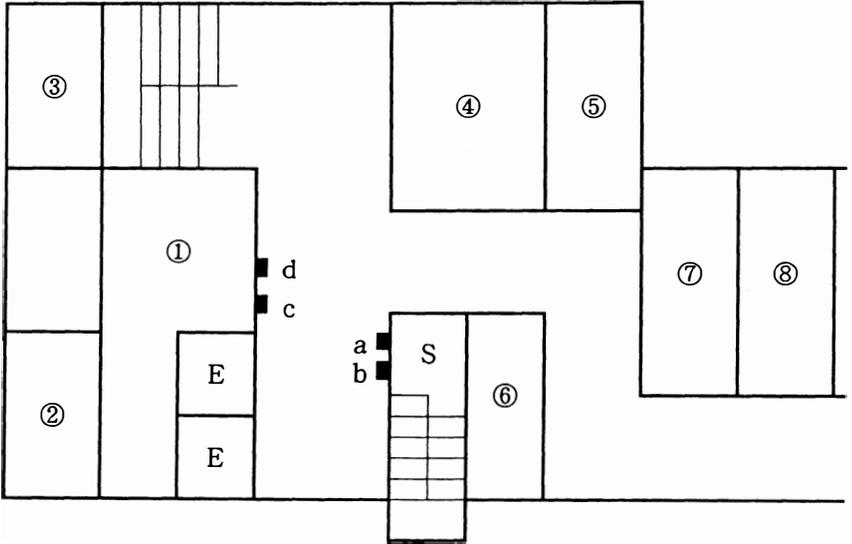
- | | | |
|-------------|-----------|--------|
| ⑦: 研究室 (1) | ⑫: 病理研究室 | S: 物置き |
| ⑧: 研究室 (2) | ⑬: 動物実験室 | |
| ⑨: コンピューター室 | ⑭: 細胞培養室 | |
| ⑩: 計測工学研究室 | ⑮: 生化学研究室 | |
| ⑪: 生体工学研究室 | | |



a: 前田和三郎先生写真

b: 岩原寅猪先生写真

整形外科教室



- | | |
|-----------------------|-----------|
| ①:教 室(医 局) | ④:講 師 室 |
| ②:教 室 幹 事 長 (医 局 長 室) | ⑤:教 授 室 |
| ③:レジデント室 | ⑥:助 教 授 室 |

E:エレベーター

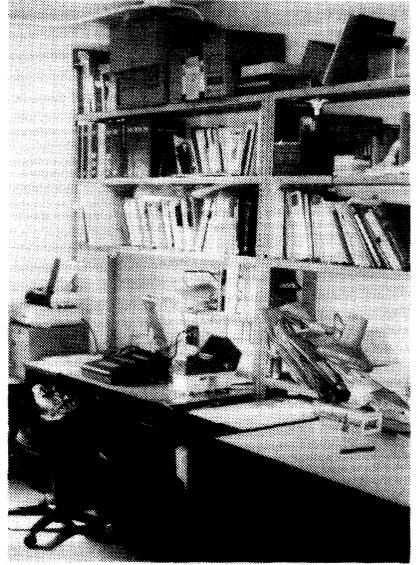


c:池田亀夫先生写真

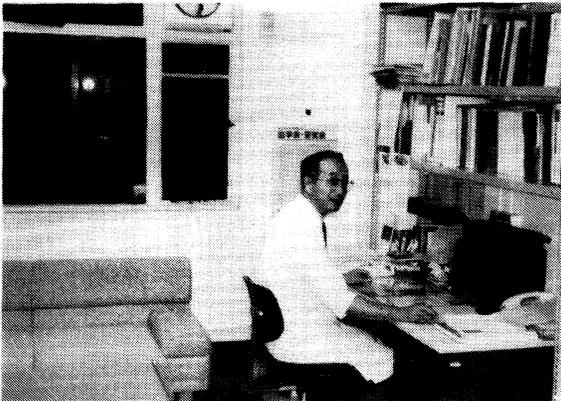
d:泉田重夫先生写真



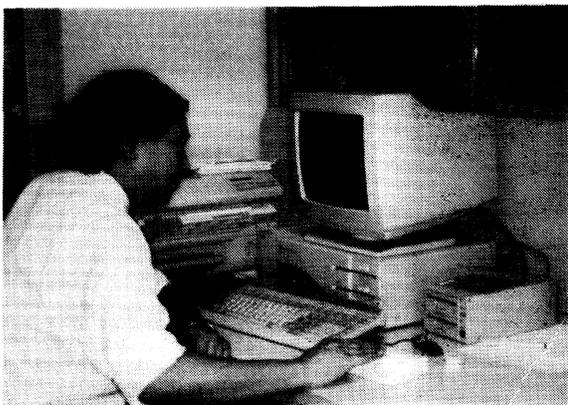
教授室



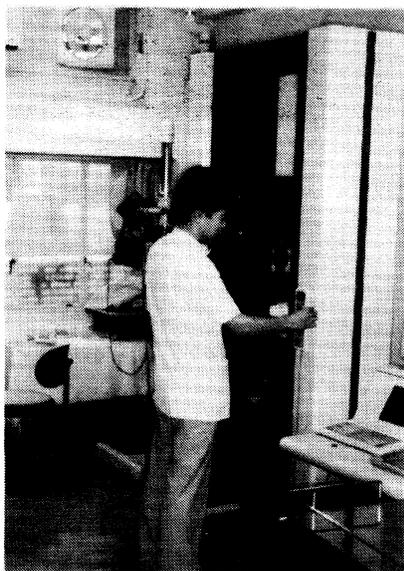
講師室



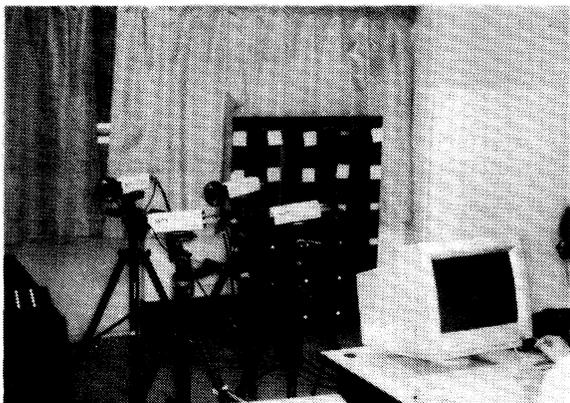
助教授室



コンピューター室



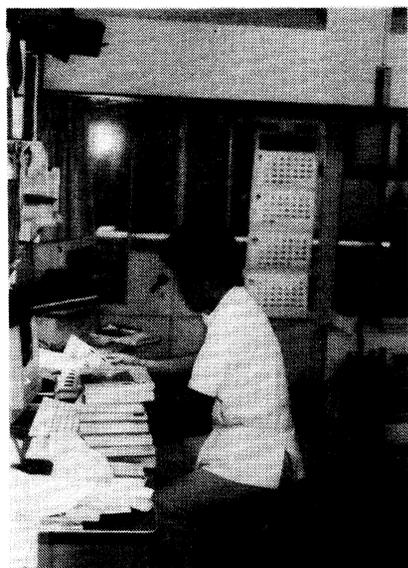
生体工学研究室



計測工学研究室



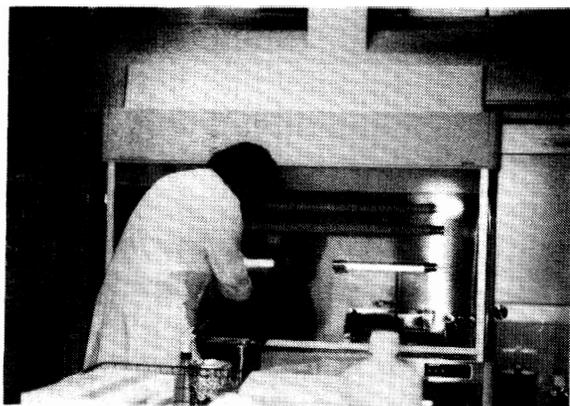
動物研究室



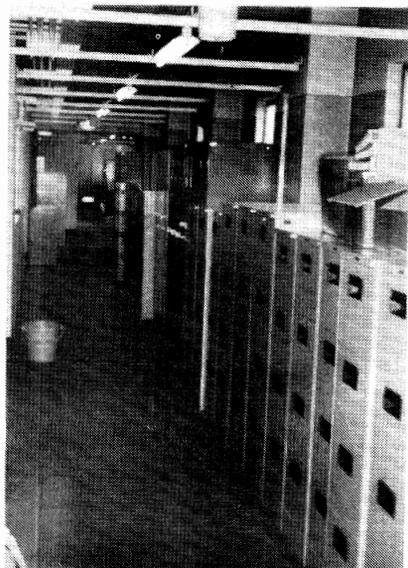
レジデント研究室



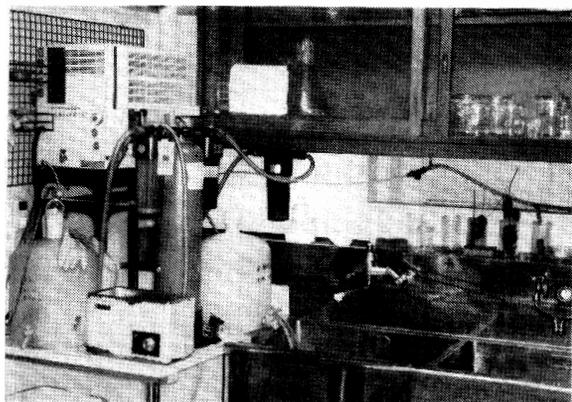
病理研究室



細胞培養室



別館 4 階廊下



生化学研究室

昭和20年代・昭和30年代の 動物実験研究の回想

岡 田 衛 生 (26)

今般「研究にまつわる思い出」の編集号にさいし、別館4階の全フロアーを占める、近代的整形外科施設の完備を見聞し、その成果を期待すると共に、戦後の物資不足の開拓時代の我々の研究施設、研究状況を往時の資料をもとに、若き研究者諸兄姉に報告する次第です。

概況

昭和34年10月4日、「故郷」創刊号が別館玄関正面を表紙にして発刊され、文中の「わが教室のあゆみ」として、創立以来の研究並びに業績が報告された。後段に、脊髄外科、骨関節結核、骨折、骨成長の問題、骨腫瘍、手の外科、頸腕神経痛が採り上げられ、歩一步と確実な地歩を学会に印しつとつあると記録されている。

1. 昭和20年代の思い出

昭和25年4月、岩原寅猪教授の会長のもとに、北里講堂にて第23回日・整・総会が(図1)の如く開催され、

小人数の医局員のこととて、我々助手全員が会場整備に奔走した。

その終了後の医局慰労会にて、第25回日・整・総会を目標に、池田亀夫先生(当時講師)を中心に共同研究「骨折牽引療法の基礎的研究」の課題が、森田(盛)、岡田、柏木、今井(銀)、助手に指令が下った。

私の担当は、動物実験、病理部門の「諸種物理的因子の骨折治癒に及ぼす影響」である。

当時の動物小屋は、現在解体された食研一階の一隅にあり、名ばかりの場所、飼育の一切即ち、餌の徴発やら、管理は各自で担当し、実験成績の向上のために、各病棟の配膳室に貼紙して、高カロリー残飯の確保や、背負籠をしょって夕刻、外苑絵画館裏のくさむらへ草刈りをして乾燥草作りをし、実験家兔の体調維持につとめた。

別館一階北側の研究室にての病理標本作製にさいし、下腿骨折の仮骨形成組織標本作製に専念し、昭和27年4月日・整・総会(大阪市公会堂)の発表にこぎつけた。

その後の共同研究諸兄(小川正三、藤原由利夫、森雅文、木住野善義君)の努力により三年後に、池田亀夫助教(当時)により、日整総会にて「骨折牽引療法の基

基礎的研究」として発表され、研究の完結をみた。

研究の成果夢みて 日も暮れる
連休も通いつめたる 兎小屋

2. 昭和30年代の思い出

昭和31年秋、出張先の立川共済病院にて、月例抄読会を契機に、「種々の発癌物質による実験的骨腫瘍の研究」(表1)が慶大病理、堀江講師、森田(盛) 医長を中心に外科、整形外科協同にて開始された。

私の担当は家兎、ラットに、ベリリウム、ベンツピレインの骨髄内注射法による腫瘍作製である。

当時の立川病院は陸軍病院の名残りで、広大なる敷地の東側はずれに動物小屋、解剖室があり、延約60羽の家兎の飼育は、慶大病院時代と同様に自らの管理による実験成績の向上のため、兎小屋に日参した。(図2)

実験開始11ヶ月目にNo.26号の下腿骨に腫瘍塊を触知し、レ線像にて骨原性の肉腫形成を確認した時は、感激ひとしおであった。

一方外科、牧田君の放射性同位元素P32によるラットの骨原性腫瘍形成も成功し、昭和34年1月より、腫瘍片による移植実験が開始された。

実験成績の集計にも、現在の如き、コピー機、ワープロ等の器具もなく、算盤片手に、手書き原稿に終始し、昭和35年4月、第33回日・整総会にて「実験的骨腫瘍の研究」として発表し、堀江肉腫の成果を意義つけた。継代移植実験は、昭和35年10月私の大田原赤十字病院への転任により同僚に引きつがれた。

感謝の心の糧に明日をみる

以上の当時の経過を総合すると、生理学的病理学的に動物実験研究を担当する際、近代の機器を駆使しても、その動物の育成状態を自身で良好に管理維持する事が大切な条件であると痛感する。

現在私は、第二のふるさとである大田原日赤病院の三十年間の任期を満了して、山根宏夫君(40回)の豊岡第一病院(入間市)で臨床の一部を担当しているが、別館整形外科研究施設の完備の報に、「新しき革袋には新しき酒を」の諺の如く、研究担当諸兄姉が改善された良き研究環境で、近代機器装置を活用して、無駄のない、質的に内容のある且迅速なる研究成果を発表される事を期待しております。

新しき施設の成果夢多く
「ふるさと」に昔を偲び筆をとる

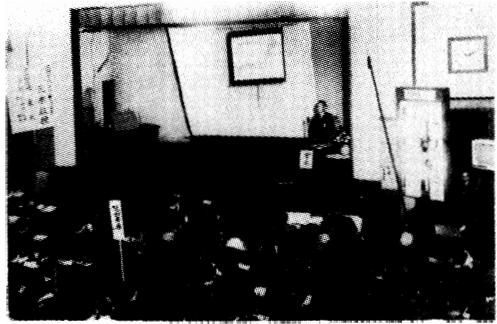
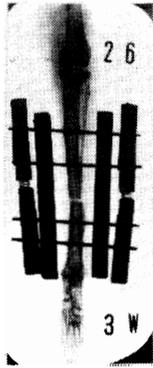


図1 北里講堂にて第35回日整総会



「負荷条件の骨折治癒の実験」

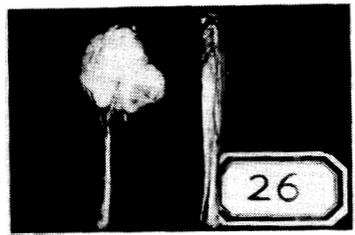
種々なる発癌物質
(P³²、マタコラントレン、ベンゾピレン、ベリリウム)
による 実験的骨腫瘍

国家公務員共済組合連合会 立川病院
整形外科 森田 受田 緑
, 岡田 元健
外科 秋田 江
病 理 塚 江

表1



図2 立川共済病院、兔小屋にて



ベリリウムによる腫瘍形成 (No.26)

別館研究室

松尾久男 (26)

もう四十年前も前のことになりました。別館研究室の窓からは石焼き芋の売り声が淋しくも又ほのぼのと聞こえてくるのでした。

私は犬のラミネクをやり、脊髄前角傷害麻痺を作る仕事に熱中していたのです。この仕事は私の勤めていた病院と囑託をしていた会社の診療所との三カ所で行り、それぞれの所で犬小屋を作っていました。日曜大工よろしく自分で作った犬小屋を大宮から信濃町まで運送屋に運ばせました。それは大和運輸といって、後々黒猫ヤマトになるとは想像も出来ない小さな運送屋でした。木製の手術台に犬を縛りつけラポナルで麻酔して全く一人でやるわけです。大変な作業でした。

術中、亡くなった新田寛太郎君のぞき込んで「俺ならやらないや」と呟きました。自分乍らあんな仕事をよくやったものだと思います。岩原先生が「松尾君は細かいことに器用なようだから」といってこのテーマを下さったのでした。私は自分の将来が開けるかどうかは之にかかっていると信じて取り組んでいたのが新田君の一

言も意に介しませんでした。他に阿部君、藤原君等が研究室で仕事をしていたのではなかったでしょうか。一緒に焼き芋を買って食ったものです。幸い前角傷害にはトリクロール酢酸をオリーブ油に溶かしたものがうまく中し、前角細胞がなくなつて癩痕性になって脊髄前角を、健側ときれいに対比できる標本が見事に出来上がったときの嬉しさは並大抵ではありませんでした。

蟻酸による骨標本の脱灰も漸く上手になりHE染色も綺麗に仕上げることが出来るようになりました。池田先生に標本を次々に見て頂いたときは得意の絶頂にありました。

ところが、池田先生いわく、「やっと君の仕事もその緒についたな」と。もう仕上がったと思つたのに、その緒についたとは。全く気が遠くなる思いでした。しかしそこは若さで最後の仕上げに邁進しました。

私は事情があつてインターン終了後或る外科の病院に勤務しました。生活がかかっていたのです。三年外科の修業をしてから研究生として岩原先生の門を叩いたのです。

殺風景な研究室の雑然とした器具の配置にもそれなりの秩序がありました。

別館研究室は私の医者としての誇りを育ててくれた懐

かしい所です。

私のティーテルアルバイトのころ

菅野 卓郎 (27)

私たちが入局した頃の若い医局員にとって、一人前の臨床医になることはもちろん大切であるが、それにもまして関心のあったことは早く学位論文を提出して博士号をいただくということであった。いわゆるティーテルアルバイトである。大変恐縮だけれども、私個人のその頃を書くことによって当時の様子を少し紹介できるのではないかと考える。

私は入局後半年でフランスに留学し、昭和二十八年秋三年ぶりに帰国した。そのため研究面では、ハウプト（主論文）どころかネーベン（副論文）の一つも書いていなかった。岩原教授は、「まあネーベンを一つ二つやっってください。ハウプトはそれからぼつぼつやればよいでしょう。」と、急いでやりなさいという様子でもない。しかし同年代のなかにはそろそろハウプトもできかけていた人もあり、私は気が気ではなく焦っていた。

それでもやがて症例報告や統計の小論文を発表して、一年あまりたった頃ようやく主論文のテーマをもらった。「末梢神経の圧迫麻痺」を筋電図を使って検討しなさいというものであった。その頃論文のテーマをいただくときは、先生宛にきた封筒を短冊形に切ったその裏に鉛筆書きしたものを手渡されるのが習わしであった。私はそれまで筋電図など無縁であったので大変なことになったと思つた。それでも泉田講師にご指導を仰いだり、岩瀬君（専二）が少し前に筋電図をはじめていたので教わつたりした。生理の林教授の私的研究所である林研究所にも通つた。結局家兎の坐骨神経を定量的に圧迫する器具や筋電図の装置などを準備するのに半年以上もかかったように記憶している。秋葉原で材料を買ひもとめ、配線図をみながら増幅器や刺激装置などの実験装置をすべて手づくりで整えた。途中から木住野君（三一回）が同じ仕事に参加してくれた。お陰でハンダごてが使えるようになり、今でも電気器具の修理などに役立っている。

整形の研究室はその頃別館一階にあつたが、私の方は別館三階の昔の風呂場が実験室に当てられていた。窓は小さく蒸気が漏れるので、衛生環境は極度に悪かった。それでもそれだけのスペースがあつただけ有り難いと思わなければならなかつた。実験は大抵夕方五時か六時頃

からはじめたが、食研地下の動物小屋から兎を籠に入れて南三階まで運んだ。「金水」という中華料理店の出前のお兄さんのもっていた籠が私の兎運搬用のものと同じであったため、院内廊下で患者の付添いさんから「金水さん！」と呼びとめられたことがあった。金水のお兄さんも白衣をきていたのである。

実験はもっぱら独りでやっていたので能率はあがった。手製の装置のためか、長時間ブラウン管をつけっぱなししているとトランスが焼けて焦げ臭くなってくるので、ときどき休んでまたはじめることをくりかえした。いつもではないが、夜遅く実験を終わって兎を殺さなければならぬときは辛かった。その頃研究室ではほとんど兎を使っていたので、私も含めて結婚している仲間は兎唇の子供ができるのではないかと心配した。形成外科がまだない頃で、整形外科で兎唇の手術をさかんにやっていたのでとくに身近に感じたのであろう。いまでは想像もできないが、その実験室は昼間は患者の筋電図検査室になるので、夜のうちにきれいに片づけておかねばならなかった。もちろん器械はすべて動物、人間兼用であった。自分ではわからないが患者さんにはその部屋は動物の匂いがしていたに違いない。

幸い実験の結果は約一年ぐらいで目鼻がついた。本当

はそれを病理組織学的に裏づけなければ完全ではないように思われた。末梢神経終末の染色をやっていた森君（三十回）に相談したが、それにかかりきりでも、一年や二年はかかるということなので諦めることにした。泉田講師から間接的に岩原教授にデーターを説明していただけ結局それでまともなことでよいことになった。昭和三十二年十月岩原教授が会長になられた第十五回日本脳神経外科学会で発表させてもらったが、会場が北里講堂だったので心強かった。当時は脳外科医がまだ少なく我々整形外科医が脳神経外科学会で発表できた時代である。その頃、学位の審査は手書き論文でよかったが、限られた期間内に七、八十枚の原稿を三部書くのは容易ではなかった。複写器などがなかったので、大抵の人は岩原教授用は自筆で他の二部は家族などが代筆した。教授会で論文が通過する当日は教授から予告があるので、夕方医局にビールを用意して教授会の終わるのを待つのが当時習わしになっていた。やがて教授がこれ、医局員全員によって祝っていた。昭和三十二年七月上旬であった。

研究室の思い出

森 雅 文 (30)

「森君はネーベンひとつ書きましたね。この手術が終わったらずぐに私の部屋に来てください」

間もなく別館手術室で始まる岩原先生のラミネクトミーの第三助手をつとめるための手洗いが終わりがけたところに入ってこられた先生は、突然私におっしゃいました。

「ハイ 後ほどお伺い致します」と答えた私は、術後おそるおそる、当時の木造の二階にある教授室に参上いたしました。

「森君にはこれをやっても良かったて来てもらいました。詳しいことは池田君に話してあるから、よく教えてもらいなさい。」

と一枚の紙を差し出されました。

これは先生宛に来た手紙の封筒の裏を利用されたもので、そこには、「筋紡錘体」と先生独特の闊達な文字がありました。

早速池田先生のもとに伺いましたところ、前田和二郎先生以来、わが慶大整形外科の伝統である骨折の牽引療

法について、また基礎的な研究がおこなわれていない。牽引療法を理論的に裏付けするための基礎的資料にするために、お兄さん達にはいろいろな実験をしてもらっているが、君には家兔の下腿骨に皮下骨折をおこし、直接牽引をおこなって、経時的に前脛骨筋と腓腹筋の運動終板と筋紡錘体の神経要素を観察し、その影響を調べ、対照として外固定をおこなったものと比較してほしい。しかし神経の染色は難しいから、早く筋紡錘体の神経染色が出来るようになりなさいという指示をいただきました。このような次第で私の研究室の生活が始まりました。

現在軸索の染色は極めて安定して、初心者にも容易に染色できますが、当時神経染色といえば「非常に面倒でいつ出来上がるかわからないもの」と敬遠されておりましたので、このテーマをもらった私を、「かわいそうに」と慰めてくださった方もありました。

その頃軸索の染色法は大別して2種類の方法でありました。

一つは銀鏡反応を利用したBielshowsky法で、他は蛋白銀を作るCajal法でした。

すでにわが教室では、木城卓二先生がBielshowsky・Grosz・井出軸索鍍銀法で神経染色をされておりました。しかし先生も相当に苦勞されたそうで、その後年月

が経っております。

慶大神経科学教室（精神科）に教えを請うと、慶應義塾大学医学部神経科学教室編纂（1953年8月）の「神経組織標本の作り方」という小冊子をいただきました。

これにはBielschowsky-辻山法が記載されており、

京都大学整形外科では昭和初期よりO.P.B.法を用いて、近藤鋭矢教授はじめ伊藤鐵夫講師（当時）らが論文を発表しておられます。

Bielschowsky法とCajal法の両者を文献上で比較すると、前者は確実性がなく、細いところまで染色できるので、Bielschowskyが有利であるらしいことがわかりました。

文献を頼りにBielschowskyを変法である井出変法、辻山法、瀬戸法を試みましたが、全くそれらしいものは染まりませんでした。

さらに文献を探して、安定性があるという鈴木式鍍銀法を雑誌脳神経領域第5巻第2号にみつけました。早速これを試みますと、腓腹筋の中を走る軸索を染め出すことはできました。しかし運動終板や筋紡錘体は一向に染まりません。

池田先生に経過を報告して、鈴木式鍍銀法を採用したいことと、御本尊の大阪市立医大解剖学教室で鈴木清教

授に直接指導を受けた旨をお願いいたしましたところ、しばらくして岩原先生から鈴木教授のもとに国内留学するようにとの許可をいただきました。昭和29年初夏のことであります。

岩原先生は親交があった水野教授を通じて鈴木教授に依頼してくださいました。

大阪市立医大解剖学教室の研究室は広々として、通風、採光は申し分なく、わが研究室とは全くの別天地でありました。

鈴木教授は後に大阪市立医大の学長になりましたが、非常に温和な方で、まづ自らの染色法は、Bielschowsky変法ではなく、鈴木式鍍銀法だと主張されました。そして聴講者はただ私ひとりだけに染色法の理論を丁寧に講義してください、私を前にして自らミクロトームのナイフを研ぎ、凍結切片を切り、神経染色をされて、鈴木式鍍銀法を直接手をとるようになって、じっくりと教えてくださいました。教室員の方々も、なにかとよく面倒をみてくださいました。

ここで私はただ鈴木式鍍銀法を習っただけではなく、研究者の基本姿勢という非常に大切なことを教わりました。

さて最初に水野教授はご挨拶にあがったとき、毎週月

曜日夕方に整形外科のカンファレンスがあります。きつとあなたの教室とはちがうと思うが出席してみませんか」と勧めてくださいました。

このカンファレンスでは、水野教授は立て板に水、次々に内外の文献をあげて全くの独壇場でありましたので、大学が違えばこのようなものかと驚きました。

水野教授のお宅は阪急電車の沿線でありましたし、私も阪急夙川でしたので、カンファレンスが終わると、度々一緒に帰りましょうとお誘いを受けました。早朝からの研究で疲れているので、内心はのんびりとひとりで電車に乗って帰りたいのですが、お断りするのには失礼になると思っ、度々お供いたしました。

大阪市大のある天王寺から地下鉄に乗り、梅田で降りますと、きまって「暑いから一寸涼んでいきましよう」とさっさと歩いてゆかれる行先は、いつもこじんまりした先生のお馴染みのバーでした。

そこでは綺麗どころを前にして談論風発、世事万端にわたってまことに博学であられまして、お話は面白く、あの学会における勇猛さからは全く想像出来ない水野教授の側面を垣間見ることができたことは、非常な驚きでもありました。そのような事もあってか、その後学会で水野教授がおおいに興奮されたときには、その都度、親

父やっているなというような親愛感がことなく湧いてまいりましたのも不思議なことでございます。

当時はまだ戦後の物資に乏しい時代でしたので、毎日弁当を持って通い続け、またたくあいだに予定の一カ月が過ぎました。しかし神経染色は難しく、結局二カ月間の留学になりましたが、やっと一応の免許皆伝となって教室に帰りました。

この内地留学で私はただ神経染色法を会得しただけでなく、その後の私に大きな影響を与えた、いろいろな面での大層貴重な勉強をさせていただきました。

最近の不評な職場は3Kであるといわれておりますが、当時の整形外科研究室はまことに悲惨でありました。

実験動物は研究室内で飼育しなければならなかったもので、室内は兎の体臭とその排泄物の匂い、フォルマリンなど試薬の匂いが混ざり合って悪臭は鼻をつき、しかも汚く、狭くて窮屈で、照明は不十分で暗くて、4K+でありました。

染色もかなりはかどったある時、岩原先生が私を教室に呼ばれました。

「猪狩忠教授に君の神経染色を見せて上げなさい」

内心 私 えっ？ 猪狩教授を研究室に!! 岩原先生はこの部屋の汚さを御存知ないのかしら？ この有様を

よその教授に見られてよいのかしら？ と躊躇しましたが、ままよとご案内いたしました。猪狩教授は一瞬たじろがれて研究室にお入りになり、私が染色のコースがほぼ終了するまでの約2時間、じっと私の操作を見ておられました。途中硝酸銀液とアンモニア銀に切片を浸しておく時間が併せて1時間少々ありますが、この間に猪狩教授とは鈴木法と瀬戸法について、特にアンモニア銀については、時間をかけて両者の利点、欠点について、お互いに自説を主張いたしました。

染色が鍍金の移ったところで引き揚げられました。よく我慢されたと感心いたしましたけれど、岩原先生にもこの4K+を御存知のうえのことかなと想像すると、なかなか面白いことであります。

家兔の下腿骨を手で骨折させるのは、可哀そうであります。感情を除外してもなかなか難しいものであります。はじめはいくら力を込めても全く折れません。今井銀四郎先生には、骨折させる力の入れ方をはじめ、実験中の家兔を長く生かしておくための飼育法について、豆腐屋からおからを買ったり、籠と草刈り鎌とをもって、神宮外苑から草を刈ってきて与えたり、何も彼も教えていただきました。先生は常々「実験動物には愛情を注がなければ駄目だよ、愛情だよ」と言っておられました。

まさにその通りであります。

柏木先生は私の研究室時代には仙腸関節の研究をなさっておられました。ホルマンリで固定した骨盤を、ギプスに包埋し、それを特別製の刀で薄切りし、トレーシングペーパーにキシロールをかけて透明にしてスケッチしておられました。これまた忘れえぬ香りであります。阿部先生は不可能とも考えられていた脊髄の再生に取り組んでおられました。飄々とした先生のお姿が眼に浮かびます。

いまは亡き仲川富雄君は私と並んで骨髄の神経染色をしておりました。彼は慶應病院の向かいにあった中華料理店の「美華」の通称「美華松」といわれた満面ニキビのオニチャンが運んでくる中華ソバを食べ、かつ当時の銘酒「トリス」を飲みながら、黙々と染色を続けておりました。飲めない私にとってもトリスといえは仲川君を思い出すなつかいしウイスキーです。

われわれ二人は、アンモニアとフォルマリンの芳香を撒き散らしておりました。

研究を離れてから3、4年後でしたか、ふと訪れた研究室は、実験動物も見当たらず、よく整頓され、清潔で見違えるばかりの綺麗さで、私達が研究していたのは何処なのかしらと疑うくらいでありました。

私はそのときそこで整形外科の成長、経済状態の好転などの諸情勢の変化を喜ばしく感じる反面、われわれの時代はもう過ぎてしまったとしみじみとして寂寥の感に包まれました。

此の度教室の研究室が新しく完成したと伺っております。まだ拝見しておりませんが、さぞかし素晴らしいものでありましょう。

ここで研究される諸君は、とても恵まれた方々であると思います。矢部教授をはじめ、この研究室の完成に尽力された方々の、整形外科教室の研究に対するなみなみならぬ熱意を忘れることなく、真摯に、また時には戦後の悪条件下の研究室にも思いを馳せて研究されて、懐かしい思い出を作られることを念じております。

あれこれと思いつくままを書いてまいりましたが、私にとって研究室といえばやはり4K+の研究室が目には浮かびます。時間的な制約、臨床の忙しさなどのため、それぞれがひとりぼっちで、孤独と戦いながら勉強していました。しかしあの研究室で共に過ごした方々には、そこはかたない懐かしさを感じさせる、思い出深い研究室です。

私が入局したころ

赤坂 勁二郎 (37)

私が入局した昭和三四年ごろは、教室の大テーマである骨端線の研究が一段落したこともあったのか、医局では学位をおうけになる先輩達が目白押しで、いわば学位ラッシュともいえる時期でした。

たしか、教授会は月曜日だったように憶えています、その夕方から、ほとんど毎週のように医局ではお祝いがありました。教授会の終りそうな刻限を見はからって、その日の審査にかかる先生は教授室の前で岩原先生のお帰りを待ちます。首尾をうかがってお礼を申し上げ、医局へもどって酒屋とおすし屋に電話をおかけになる。下級生を地下のヨシ公へ走らせるといふ段取りでありました。

自家用車など一台もない時代です。飲むほどに、酔うほどにいろんなお話が出来ます。苦心談、うら話、うわさ話など。ご指導のお礼は、原則として七・五・三になっているというような、ご馳走で酔っぱらっていても、忘れてはいけない大事なお話もこの席でうかがったのでした。

いろんな話題のなかで毎回必ず出て、皆で悲憤慷慨してやむことがなかったのは、研究室がせまくて、設備が悪いということでした。スペースがせまくて、何気なく貴重な標本をおいた所が他人のテリトリーで、何気なく棄てられてしまったというようなトラブルは始終だったのです。私の知る範囲では、当時は産学協同によるまとまった研究費の提供などというものはなく、研究をささえるのは、塾と文部省からの研究費、あとは、おのおの先生方のポケットマネーでした。

昭和三年の後半になって、やっと『もはや、戦後ではない』といわれましたが、高度成長という言葉が使われるのは昭和三五年になってからです。そのはざまにあつて、昭和三年に月給二倍論をとなえた大臣はおりましたが、象牙の塔に世間の風は届きにくく大学病院の若い医者長の長年の只働きはあたり前のことで、学位取得のあとでも在局の先生の大多数は無給で、年末に餅代と称して雀の涙ほどのお金が頂戴出来るにすぎませんでした。もちろん時代が違うのですが、昨今に比べると、みんなふところが不如意で、質素であつたと思います。しかし、医局の雰囲気は和やか、素朴でした。私のように、年経てからふりかえりますと、なんとまあ生意気で、鼻持ちならなかったにちがいない若僧にも、周囲の先生がたは

寛容で、住みやすく、楽しく過ごさせて頂きました。お祝いの主賓は、掲載料のことで頭をいためながらも、二次会に新宿三越裏のキャバレーナポリや、その筋向いの未亡人サロンに連れて行って下さって、大いに英気をやしなわせていただいたものです。

教室の研究室がすばらしく完成したことはうれしい限りです。願わくば、矢部教授が、ご就任の時にモットーとしてあげられた『和』という土俵の中で切磋琢磨していい業績をあげていただきたいものです。たとえばベルテス病におけるコトレルの論文のように、よけて通ることの出来ない、そのテーマを論ずる以上、必ず敬意をもって引用されるような論文が沢山生まれることを心から待望しております。

改装前の病理研究室にまつわる思い出

花岡英弥 (37)

今回の改装によって、整形外科のすべての研究室が明るく、きれいになって、以前の面影を留めなくなつた。私が入局した頃は、整形外科の研究室は今では新棟が

立っている場所にあったハ号棟と現在は外科研究室と
なっている別館一階とにあり、H、E標本作製など病理
的な研究は別館一階の研究室で行われていた。しかし、
何時まで別館一階に研究室があったか記憶にない。

私が病理研究室に関与するようになったのは昭和四十
八年大学へ戻ってきてからである。その頃には、既に病
理研究室や生化学研究室など別館四階にあり、部屋の配
置については今回の改装前の状態にほぼ近かった。

個室の病室であった部屋の柱や付添家族用の小さな次
の間の部分は、一段高くなった床のまゝ残されていた。
さらに、ペンキが所々ひび割れたり、うろこのように
めくれたりしており、お世辞にもきれいとは言えなかつ
たが、食研にあった他科の研究室もあまりきれいでな
かったのでひどく見劣りがするという程ではなかった。

病理研究室は今回の改装後に培養室になった部屋（ト
イレの手前）にあつて光顕標本作製に必要な器具類は一
応設備されていた。電顕関係の設備は全くなかつたが、
電顕の仕事は病理学教室のミュージアムや中央電顕室で
行なつたので、支障はきたさなかつた。

今回の改装後に病理研究室になつた部屋には、小型の
培養器が置いてあつたが、かなり古いものであつた。私
の医局長の時、柴崎君に選定してもらい、大型の培養器

と入れ変えた（後に、中川君らの生化学グループにより
さらに新しいものに買い換えられた）。この部屋に昭和
五十六年頃、電顕用超ミクロトームを入れ、電顕切片が
作れるようにした。そのためもあり、その頃から一時期
腫瘍班の崎原君や矢部啓夫君らと共にこの部屋を根城の
ように使つた。

この二つの部屋で行なつた腫瘍班の研究の中では、矢
部君がやつたうづら胎児軟骨原基を鶏卵漿膜上に移植し
た実験に関する思い出が強い。鶏卵器を病理研究室に設
置し、そこで鶏卵とうづらの卵を孵卵させながら矢部君
は実験を行なつたのであるが、H、E標本ができ上がると、
多くの場合、彼より先に標本を詳細に観察し、次の実験
方法をあれこれ考え彼とディスカスしたものである。望
んだ通りの結果がでると確信はしていたものの、時には
弱気となつたりしたので、予期した通りの結果がでた時
には大いに喜び、興奮し、研究の面白さを身に染みて体
験した。

この研究は大変優れた研究であつた。何しろH、Eが彼
の組織学の教科書に破骨細胞の血液細胞由来説の根拠と
して一頁以上に亘つて引用したKahn & Simmonsの研
究を否定するものであつたからである。しかし、私が英
文で書いてYabe & Hanakakaの連名でClin. Orthop.

へ送った原稿は、Madaraをかばう意識の高いレリーフのコメント付きで何度も書き直しさせられ、四回目だったかにやっとアクセプトになった。コメントの中には、「英文がブアである」というようなものもあった。英国人の女性で日本語も上手で医学論文の翻訳に馴れているというフランススに来てもらって、差して英文原稿を徹底的に直してもらったのもこの研究室であった。

崎原君もこの研究室の一隅で学位論文の電気泳動による実験を行なった。

その後、自分でもマウスの胎児軟骨原基を採取して光顕や電顕的に観察し始めた。H E標本の破骨細胞の光顕写真の一枚は、一九八九年のClin. Orthop. の論文中の図1として使用できた。また、電顕による研究は、伊崎君が後を受けて、酒石酸耐性アルカリ、フォスファターゼ染色による電顕細胞化学的研究へと発展させてくれている。

話はあるが、どこかで記録しておかなければ忘却されてしまいそうな病理検査技師のことについて記したい。

小原（女性）

中村千恵子 昭五十二年頃〜昭五十六年三月

田谷洋一 昭五十六年五月〜昭五十九年三月

金室俊子 昭五十九年四月〜同年七月

関根浩美 昭五十九年九月〜昭六十一年七月

八重樫睦子 昭六十一年九月〜平元年十月

これらの人々は病理検査技師として改装前の研究室で働いた人々である。

病理検査技師を求めるのは何時も大変な苦勞であった。小原さんについては働いていたという程度の記憶しかない。中村さんは慶應の病理学教室の検査技師を多摩美術大学へ行きたいと辞めた後、夜間に週三〜四回パートできていた。途中から私が連絡窓口となった。田谷君は夜間の検査技師学校の学生で、やはり病理学教室の世話で探してもらった。真面目に三年間働いてはくれたが、始めは学生の一年生で経験が全くないため半年間病理学教室へ見習に行かせなくてはならず、また、最後の二〜三ヶ月は卒業試験と国家試験に追われ、や、仕事に力が入らなかつた。それでもClin. Orthop. に載った矢部君の実験のH E標本は彼が作ったものである。

学生の限界を感じたので、ちゃんとした病理検査技師を彼の後任にはほしいと、人を介して経験5〜6年の現役の金室さんにきてもらった。給与もそれまでの手取りとあまり変わらないようにとスタッフ、ミーティングで訴え、田谷君の時の七万円から十二万円まで上げてもらったが、まだ、彼女のそれまでの手取りとの差の三万円が

埋まらない。止むを得ず、病理班の研究費から出すことにした。それでも自分の補償がないという理由で僅か四ヶ月で東京女子医大（正規職員）へ移って行った。次の関根さんと八重樫さんは新聞広告で探した。それぞれ二年弱と三年強してくれたが、身分補償のことや税金のことで問題があり辞めて行った。二人にも教室からの給与との差を病理班で補った。以上の検査技師とは別に電顕切片作製の補手として昭五十三年から三年間、私が個人的に雇った関口君がおり、彼には、ボーナス、交通費込みで年間百万前後かかり、色々な研究費をやりくりしたが、教室からは一切援助を求めなかったので当時としては本当に大変であった。

新しい研究室になってからの人探しは内西助教授が責任者ということになったので、人探しの苦労から開放された。また、五年間、教室からの給与との差を埋めてきたが、その負担からも解放された。

新しい研究室になって内西助教授が探してきた山火さんも十ヶ月余りで辞めた。身分補償がなくて、ちゃんとした技術を持つ技師を探すのは本当に大変である。今度の中堅技師達が数人で交代しながら、夜パートでできくれることとなり、既に研究室で実習中である。うまく行くことを念じている。

ティーテル・アルバイトの 断片的思い出

田 中 守 (38 特)

大学院二年の暮れ、亡くなられた岩原寅猪教授に、何をやりますかと一応尋ねられた。

先生がすでにテーマを考えておられるのは、一緒に呼び出しを受けた同級の池田彬君への問いが同じである。ここからも推察された。

先生はいつものように御自分あての便箋の裏に、独特の突っ張った文字で、博士論文のテーマを書いておられ、可愛い子に旅をさせるような仕種で、その紙片をそれぞれに手渡された。いよいよ試合開始である。大袈裟に言えば苦難の道になりかねない。昭和36年であった。

テーマは関節滑膜の活動期の特徴を、池田君は生化学の面から、私は電子顕微鏡の見地から吟味せよということである。

実験方法は、兔に大腿筋膜による前十字靭帯成形術を行い、経時的な滑膜の変化をみることにした。一羽の兔から得られた滑膜を二人で分けるのである。器用な池田君との共同作業は苦にならなかった。慣れてくると、

兎さんとも友達となり、ヘイ・グロブス法の手術時間は圧倒的に早くなり、二人で手術時間を競い合うこともはしばしばで、20分以内が常識になっていた。

当時も、研究生活といっても特別優遇されるわけではなく、外来、手術、病棟の合間や夜間が与えられた研究時間である。先輩諸先生から色々な対処の仕方を伝授された。すなわち、兎の死亡率は動物小屋のおじさんへの賄賂の多寡が左右するとか、薬物や手術器具の無料調達方法とかが主な、しかも最も大事なアドバイスであった。そこで手術室は器具調達の宝庫であったが、无影灯、手術台それに看護婦さんだけは頂く訳にはいかなかった。

当時、別館1階右の整形外科研究室を使っておられたのは、2年先輩の小林進先生、故米谷晴夫先生、1年先輩の伊勢亀富士朗先生で、確かその頃やっど骨端線のテーマの実験を終えられ、成果に大分不満足であったのかいつもぶつぶつ不平を言われていたのが2年先輩の矢部裕先生である。岩原教授年来のテーマが骨端線・骨長径成長であり、矢部先生の実験結果に多大の期待をされておられたと思う。

別館の研究室は暗くて、汚くて、臭くて今風に言えば3Kであった。同僚の池田君だけがせっせと掃除をしていたのが印象的で、私を含めあとの先生の掃除姿は見た

ことがない。研究室で飲み食いした記憶もない。多分あの環境では無理だったのだろう。

しかしこの環境でも、われわれ4〜5人の研究室同居人はなるべく助け合って、最小の努力で最大の効果をおげようと誓い合った。

それには訳がある。先輩はほとんどが雀鬼で、寸暇を惜しんでマージャンと研究を両立させようと企み、優れたチームワークの成果は結果的には達せられた。

しかしなんといっても研究室は汚かったし臭かった。

白状すれば、この研究室を臭く、汚くした犯人は、もとはと言え、この私と1年先輩の赤坂勤二郎先生、それに当時教育担当の立場にあった今井望先生（現東海大学教授）である。

犯人を多くすれば、一人あたりの非難の負担が少なくなるので、畏れ多いが今井先生にも片棒担いで頂こう。

今井先生のライフワークである膝グループになんとなく赤坂先生と私が居た。私は入局以来今井先生のネーバムンで（あれから30年たった今でも先生は私をフレッシュマンと思われている節がある）、出来れば膝をライフワークにしたいと考えていたので今井先生には公私ともに私淑していたが、赤坂先生はアルト口班のメンバーとして私とともに今井グループに属していた。

日整会誌35巻11号（昭和37年）1161頁に本邦初公

開の膝関節二重造影法を、今井望著・赤坂勤二郎モデル
・田中守挿絵で発表したのもこの頃である。「膝半月板
の造影所見と手術所見」の論文がその後の膝関節外科に
大きく貢献したことは周知の事実であり、現在までその
評価は変わらない。

その論文の中で柄もののパンツ一枚で患者風に横た
わっているのが赤坂大人である。見栄えの良いモデルで
あった。

その今井先生が大学院の指導のために膝の屍体解剖を
研究室でやるから、君たちは膝を屍体プールから鋸で挽
いて来たまえとの命令であった。赤坂先生は臨床研究の
ライフワークを「肩」しようかなどと決めかねていたが、
よい機会ということと一緒に屍体プールから肩関節を鋸
で挽いて研究室に運んだ。

しーんと静まりかえっている深夜、解剖教室の屍体
プールで、下に沈んでいる適当な屍体を竹竿で引き上げ、
それから鋸でゴシゴシと膝や肩を挽く時は、相手の顔は
絶対に見なかつたし見れなかつた。まわりの一寸した音
にも脅えながら作業を続けた。

肩、膝それぞれ十数関節が研究室のプラスチックの箱
に収められたが、ホルマリン・プラスチックのその

臭さは結構酷かった。

しかしながら、屍体解剖も今井先生の公職が忙しくて
さっぱり行われず、赤坂先生の肩の研究もいつのまにか
尻つぼみとなって、ほとんどプラスチックの箱が開かれ
たことがなかった。

そのような状態の中で、岩原先生と兎さんの夢にうな
されながら、われわれ実験部隊は頑張った。

2年後、実験論文がどうやらまとまりかけた時、医局
長の「デカ松チャン」こと松井明先生の厳命で、臭い源
泉物体の全部を私が荷車で屍体プールまで返却に出掛け、
解剖学教室のオジサンの目を盗んでなんとか元の置き場
で成仏してもらい、数年来の研究室の1Kが解決した。

その後、研究室で集会や検討会を開いた記憶があるの
で、少しは明るくきれいになってひどい匂いも解消され
たと思う。

いまから思えば、研究室の居心地が悪かったのも、同
居人諸先生の実験が早く終わってめでたく念願の博士に
なれた一因であろう。

私の入局時の思いで

石下峻一郎（40特）

私が入局した昭和37年は岩原寅猪先生の全盛時代でした。助教教授に池田亀夫先生、講師に泉田重雄先生がおられ矢部先生（現教授）が大学院の5年生の時代で、それは活発な教室員でした。岩原先生のことは、現在の若い教室員の方々にはすでに幻の様な存在でありましようが、教室員には厳しく、岩原天皇として内外に鳴り響いておりました。しかし、唯厳しいだけでなく、時にはフレッシュマンでも教授室に呼んで、先生自ら玉露を入れて下さり大変恐縮した教室員は多いことと存じます。

教授の外来診察は独特のものでした。6年生が1・2・3診にカルテを分配するのですが、1診の教授の所へは紹介患者の他に若い女性を何人か回しております。そうすると教授の機嫌が良いのだそうです。4年生位がムンテラ係で、3年生がベシユライバーです。フレッシュマンは予診係と教授の診察を見学することです。この見学が何も知らないフレッシュマンにとってどんな役にたったことでしょう。先生独特の云い回しで、脊椎疾患や小児の診察、股・膝等の下肢についても順序よく述べてゆ

かれます。これを覚えるだけで、フレッシュマンでも初診の患者をまがりなりにも診察が出来るようになります。現在のフレッシュマンはコンピュータ係で診察の技術を覚える暇がないと聞きますが、卒訓担当も一考を要するのではないですか。

診察が済むと、先生愛用の万年筆で独特の太い筆跡で必ず診断名を記入されておりました。

毎週土曜日には別館3階の医局で教授以下医局員全員が集まって昼食会です。弁当持参の者、出前をとる人と色々でしたが、学問の事から日常の事は出張に出ている医局員の事など話題は豊富で、医局員の方は不承不承のようでしたが、先生は大変楽しみにしておられたようです。部屋が狭いのでフレッシュマンは座ることも出来ず辛い2時間でした。

教授回診は怖いものと医局員はオドオドしております。当たり前のことですが、やるべきことが抜けていれば、患者の前であろうと雷が落ちててもやむをえません。

先生が執刀された翌日には必ずあの独特の筆跡での手術記録を頂きました。その描写は微に入り細を穿ち、必ず何かに譬えた表現を用いており大変感銘を受けました。毎年フレッシュマンをご自宅に集め、又正月元旦には医局員を集めての新年会を烏山の自宅で行いました。高

千夫人の采配で沢山の御馳走を頂いたものです。殊に鯉のたたきは今でも忘れられません。この席での先生には何時もの厳しさはなく、もっぱら医局員へのサービスに務め、興に乗ればきれいな声で民謡を一曲歌われました。

想えば、懐かしい昔のことです。

4月に入局して、オーベルアルツトの許で修練が行われ、12月には皆それぞれの関連病院へ出張に出ていったものです。1年間の出張で又教室へ帰される訳ですが、この期間は一人前の医師として扱われるのですが、医師として正に知らなければならぬことばかりで、随分と医長さんに迷惑を掛けたことと恥じ入るばかりです。

兎もかくこの時代はネーベンを書き上げた3年生には教授からハウプトのテーマを頂きました。今、矢部教授がこの点も一生懸命に努力されていますことに頭が下がります。話が変わりますが、池田先生が教授になられた時の抱負に教室の研究は関連病院を含めれば約2000床あるのだから、これを巧くまとめれば何処にも負けない大きな事ができると話された事を思い出します。その後、先生が病に倒れこの話は日の目を見ておりません。大変まとまりのないことを書きましたが、お許し下さい。矢部教授の許に和と団結を以て教室が益々発展することを祈念します。

「研究室、研究生活のおもいで」

土方 貞久 (41)

私共41回生の入局は昭和38年の4月であり、当時の教室は岩原教授以下、池田助教、泉田、木住野講師、松井医局長と云う時代であった。

その頃の医局は、現在では想像もつかないような岩原先生の絶対君主制とも云える体制であったように思える。先生のお考えで、研究班というようなものは作らず、各人がひとりひとりでネーベンやハウプトを与えられ、苦勞していたが、それなりにお互いに励まし合い、助け合ってきたためか楽しい思い出も多い。

今回、研究生活のおもいでなどを書くようにとのことであるので、思い出すままに書いてみたい。

昭和38年、フレッシュマンの頃には、別館一階の隅にあった研究室で、小林進(36回)、池田彬(38回)先生らがウサギを用いて実験をしていらした。ともかくきたない研究室であり、大掃除を手伝わされたりしていたが、先生方は愚痴を言い合いながらも、何かたのしそうでもあった。

特に印象に残っているのは、この年の日整会の講演会

での出来事であり、病理標本の出来が悪いとの岩原先生の叱声に、池田彬先生が敢然として、「自分で作った標本です」と答えておられたことと、米谷先生(36回)が、「これが前角細胞です」と、よく判らない標本を、自信満々に指されていた光景である。

独立祭も終り、12月になる頃、岩原先生からはじめてのネーベンをいただいた。

「いわゆるKantentabtrennungのSchmorlの発生説を指示する臨床手術例」と言うものであったが、おもえばこれが現在にいたる私のテーマを方向づけたものであった。

当時医局は、論文に、schmorl, Eisberg, 岩原の3人の名を引用すれば大丈夫との話しもあり、まずは安心したが、schmorlの1930年頃の原著をはじめ、多くのものがドイツ語であり、大変苦勞した。

幸い、病理学者である彼の論文には多くの病理像の写真があり、病理に入局した同級の亀谷先生の好意で、新生児から老人まで、何件かの解剖例からの椎間板の組織標本を作製してもらい、岩原先生の御命令通り、翌年3月の集談会での発表にこぎつけ、4月からの水戸のひばり学園、塩原の温泉病院への出張に出発することができた。

ひばり学園では、いしもち釣りなどに夢中になっていたが、ある日、松井医局長からのお電話で、岩原先生がお呼びとのこと、おそるおそる先生のお部屋にでかけると、前回のものを至急論文にすることと、もう一度、「シュモール軟骨結節とKantentabtrennung」の題で、統計的にしらべ直すようにとのことであった。

すでに柴垣先生(38回)の統計的報告があるが椎間板の造影や病理も含めて検討せよとのことであったため、休日には慶應病院の、当時整形外来の奥にあったカルテ棚とレントゲンめくりをする一方、先生方にお願ひして、これらの椎間板障害の椎間板造影と、手術例での標本、椎間板を一塊とした摘出をしていただいた。

39年12月、帰局と同時に岩原先生のお部屋で、主論文として、「椎間板損傷の治癒機転に関する実験的研究」なるテーマを頂戴し、いよいよハウプトと取り組むこととなった。当時、岩原先生は、脊椎脊椎外科、骨端線などからふたたび脊椎に回帰されていたと後年お聞きしたが、私の上下、4〜5年くらいの先生方に脊椎、特に椎間板に関する仕事と、膝についてのものが多かったと思われる。

当時すでに研究室は号下に移っており、この研究室で吉岡、末安(39回)先生らが、膝のテーマで、病理標本

を作っておられ、ミクロトームの使い方や染色の実際などを教えていただいた。

また一方、当時の東電病院の山口義臣先生も、岩原先生の信任が厚く、特にサルを用いての脊椎の実験的研究や、今で云うバイオメカクスのテーマで多くの先生方が仕事をしておられた。前者には浜野（39回）、横井（39回）、花岡（37回）先生がおられ、動物実験につきものの苦労の数々を教えてください。

ハウプトの発表まで来る3年の間、曲折はあったが、何とかまとめることができたのは、前記の先生方や、私のあとに研究室にいられた先生達との、苦しくも、楽しい生活があったからと断言できるが、なかでも、岩原先生から池田教授にバトンタッチされた頃は忘れられない。

池田教授は、私達の岩原先生からのテーマの進捗状況をひとりひとりたずねられ、あるものにはつづけるように、またあるものにはあたらしいテーマを与えられた。

また、研究グループとも言えるシステムも導入された。生化学、骨腫瘍、手の外科などはこのときからスタートしたように感ずる。

私のテーマに関して、岩原先生は教室の西（15回）の業績があり、手術せずに椎間板損傷を作ることをすすめ

られたが、これは一定の損傷を一定の部位に作ることで、必ず断念せざるを得なかった。また小林利昭（39回）先生がムチうちの実験で、立川の航空自衛隊の研究所に行かれていたので数回お供したが、この方法でも同様に不可能であり、池田教授にお話して、手術浸襲を加えてもよいが従来の文献にない結果を出すように云われた。

この間、病理標本の作成と鏡検などについては、当時先天奇形の実験に熱中されていた山根、加藤（40回）の両先生の指導をされていた現病理学教授の細田先生にお教えた。また、42年の日整会では、前記の二番目の副論文を発表することとなったが、会場の「只今の演題……」と云うスポットで、土方貞久ほかと、岩原先生の名前が省略されたことは、当時の医局の感覚では珍しく、恐縮した。

4年生が終り、台東病院に出張したが、有馬（42回）先生とともに、ほとんど毎日号下の研究室通いをつづけることとなった。

この頃には津布久、小林（43回）先生のコンビをはじめ、福田（40回）、浅井、佐々木、樋口（42回）先生らも順次研究をはじめられ、号下の研究室は活況を呈していた。

当時、池田教授が夜間突然研究室に顔を出されたこと

は脅威でもあったがはげみにもなった。また、同級の石井先生も芳賀日赤に出張中であつたが、暖房のない車で、足に毛布を巻いて研究室に通つていた。そしてある日、細川（37回）先生のされた椎間板造影で、大きな骨棘のある椎間板の造影像ではぼ正常な髓核像を示しているものを持参し、どう思うかとたずねられたが、これこそ、私の実験で注目していた点であり、その後、変形性脊椎症の椎間板造影像を集める動機ともなり、昭和47年、金沢での日整会のシンポジウムで報告し、のちに藤村（47回）先生の努力で論文となつた。

43年4月、岡山での日整会でやっとハウプトの発表をすませ、5月から一年間、高岡市民病院に出張となつたが、ここでは、持参したブロックの標本作りと、論文の準備にかかり、昭和44年3月、学位記を頂戴した。

御報告と御礼に岩原先生のお宅にうかがつたが、先生としてはまだ不足がおありのようだったものの、「これはこれでいいが、今後枝葉の出る仕事をつづけなさい」とおっしゃり、奥様の手料理で激励して下さつた。

この間、池田先生が教授となられてからしばらく医局の抄読会をつづけた時期があり、たまたま私に側弯の病因についての論文があつた。そして受持の側弯患者に当時千葉大学で盛んであつたハリントン法を行つてみた

いと考へ、泉田先生の許可をえて、井上教授に慶應病院にいらしていただき手術していただいた。そしてこの夜、やはり同級の吉沢先生から、「こうなつたら側弯を勉強しなければ駄目だぞ」と言われたことも忘れられない。

47年9月、泉田教授の命で東電病院に出張、48年1月、東邦大学の助教授で転出された山口先生の後任として科長となつたが、このさい山口先生から「ヒーさん後をたのむよ」との言葉をいただき、現在に至つてゐる。

この後、多くの先生方が私のところに來られたが、東電病院の研究室では、はじめは従來の延長で若野（47回）先生に高血圧流を用いての脊椎老化の実験を、ついで中山（46回）先生にはラットで実験側弯症のテーマをしていただいた。両先生と二度ずつの学会発表までしていただいたが、論文とならなかつたことは私の責任であり、申し訳けなく思つてゐる。

昭和50年には経皮的髓核摘出の第1例を51年に自然発症側弯ウズラの系統を確立し、東電病院の研究室では、「脊椎の変性、変形、奇形に関する研究」をプロジェクトとし、市原（47回）、中井、鶴飼（52回）、持田、戸山（54回）、白石（56回）先生らが実験側弯症の仕事をして現在塩田（61回）、千葉（62回）、依光（66回）先生らが椎間板の基礎的研究、木原、西川（55回）先生

が同じく臨床的研究をつづけている。

以上、昭和38年から現在までの私共の研究室あるいは研究生生活のおもいでを、おもいつくままに書いてみた。

記憶ちがいもあり、また洩れもあると思われるが、いまあらためてふりかえると、入局直後の岩原先生の指示と、その後の教室の伝統とも言える自由の雰囲気、これまでの私共の勝手気ままな仕事を許して下さったことが明らかであり、感謝の気持ちでいっぱいである。

また、研究生生活を通じて、学内に限らず、故井上教授をはじめとする多くの他学の先生の知己を得ることができたことは、日常の臨床とは異なった喜びでもあった。

私共もそろそろ世代交代の時期となって来たが、教室の伝統でもある「追いつき追い越せ」の精神で、多くの後輩の先生方が活躍されることを願ってこの小文を了えたいが、兎角苦しいと思われがちなことでも、「研究生生活は医者青春である」が私の信条であり、今は大先生となった方達の若き日のおもいでを記し若い方達の励みにもなればとのおもいで文章とした。

最後に、いつものことながら切りをすぎ、一気に書きおろしたため、また紙面の制約もありここに引用できなかつたおもいでや先生方も多いことをお許しねがいたい。

アイオワ大と慶大整形

若野 紘 一 (47)

小生が米国の中西部アイオワ州にあるアイオワ大へ留学してから早いもので10年以上経ちました。同大と慶大整形外科の浅からぬ関係を後輩諸君に紹介しましょう。

現在米国在住の水口先生(43回)がレジデントとして在籍されたことのあるアイオワ大整形外科へ、現杏林大教授の石井良章先生(41回)が股関節外科の大御所ポンセッチー教授の元へ訪問教授の資格で行かれたのが1977年でした。小生入局時の最初のオーベンでもある石井先生の御尽力で1979年にアイオワ大工学部の当時の副学部長Prof. Kwan Pih先生及び生体工学担当のProf. King Liuの教室へリサーチ・フェローとして留学が決まりました。

辞書でアイオワ人(Iowan)とは百姓と同義語とされているようなアイオワでの生活は素晴らしいものでした。広大な大自然、家族中心の生活環境、ゆとりある研究環境どれをとっても日本との差を感じました。そこでは容易に使用できる人体標本を使用して試験器上での種々の条件での挙動を測定する日が続きました。しかし、初め

は勝手が違い言葉の障害もあって研究が思うようには進展しなくて悶々とすることも少なくありません。そんなある日、故岩原名誉教授から御手紙を頂きました。勉強はともかく、この機会に遠い外国で夫婦が肩を寄せあって生活することは貴い経験であって云々の励ましの文面に救われる思いをしました。研究の内容はともかく、米国流研究システムには多くの学ぶべき点もあるようです。具体的にはテーマの立て方、他施設のスタッフによる研究の進展のチェックやアドバイスを受ける仕組み、第三者機関によるスタッフの評価など豊かさの中の厳しさには驚かされました。そのような日々であって、いつも念頭に置いたことは小生の次に慶應から来る後輩のために自分はいっかりしなければならぬと言ったことでした。少額とはいえ有給のポストは貴重ですし、これまでに先輩が築かれた信用は大切だからです。

一年余のアイオワでの家族ぐるみの生活を終えて、残りの半年をメイヨー・クリニックのバイオメカ・ラボで研究させて頂きました。指導者のProf. ChaoはProf. Rimの元教え子ですから紹介して頂きました。そこからはミネソタ大のProf. Bradfordに又紹介され彼のチームの一員としてchymopapainの研究に参加しました。後日、この研究に対して国際腰椎学会からポルボ賞を与

えられたことは望外の幸せでした。ここでは、日曜返上でスタッフの研究することも珍しくなく、猛烈主義は何か日本の専売特許では無いことを知りました。短期の滞在でしたが帰国に際してChao先生から今後メイヨーで勉強する希望者がいたら、君の推薦なら信用するからと言われたときは何よりの鼻向けの言葉に感じたものです。

以後、アイオワ大へは高畑君(56回)、西山君(55回)、大熊君(56回)、などが又、隣の南ダコタ州のProf. Drakeの元へは渡辺良君(54回相当)が留学され、それぞれベストを尽くされた結果、今ではアイオワに慶應の定席があるとまで言われる提携関係が確立されました。これには、何度もアイオワへ足を運ばれて根回しされた、平林先生の御努力もあります。やはり慶應の諸君のスマートで品のある言動が現地での信用となって人の輪を広げていると思われまます。

後輩諸君、世界は狭くなった昨今、なにも苦勞して外国へ行く必要は無いと考えるかも知れませんが、まだまだ学ぶ点は多いのです。塾祖福沢先生の気概は今も引き継がれております。健闘を祈ります。

別館4階バイオメカ研究室

井口 傑 (49)

別館の4階でエレベーターを降り、教授室の前を右に曲がり、助手室の前を通り過ぎると、新設されたバイオメカの研究室が3部屋並んでいる。手前から、コンピュータ室、計測工学室、生体工学室と並んでいる。前2部屋はレントゲンの倉庫、後の1部屋はかつての医局長室である。

改装で最も気使ったのは電源である。工務課でも、どの配電盤から配線されているか、ヒューズがとんでみないと解からないと言う建物であり、従来のままでは、いつ電源がとんでデータが駄目になるか知れないと言う物騒な状態であった。そのため、研究室全体の電源を配電盤から引き直す大工事となった。しかし、老婆の厚化粧に近い改造であったが、電源だけは当分もちそうである。

コンピュータ室には、現在、東芝3300、東芝3100GT、NEC9801F2のパーソナルコンピュータとエプソンのページプリンター、透過型デジタイザーがある。今年中には、PC-ATコンパチ

の高速コンピュータが入るはずであり、主にスライド、プレパラート、X線フィルム、CT、MRIなどのデジタイジングと画像処理が可能となる。また、計測されたデータ処理もここで行われる。

計測工学室にはイタリア製のエリートシステムが入った。これは、赤外線ストロボからの赤外線が、被検者に付けられたマーカーに反射したCDカメラで捉えた赤外線像を、高速並列画像処理ボードを多数備えたシステムで処理し、マーカー以外の反射物、床や壁からの反射を自動的に除外し、マーカーのみの2次元空間を計算する。この処理を4台のCDカメラと30数個のマーカーに対して同時にを行う。マーカーを他の反射と区別するために、単なる輝度だけでなく、形も区別する。この情報をオリベッティのPC-ATコンパチのコンピュータで処理し、個々のマーカーの3次元空間における座標を計算し、各点の位置、速度、加速度、3点間の角度、角速度、角加速度を計算し、グラフ表示する。現在は計測空間が限られるため、1メートル立方がやっとであり、足や手の計測が主であるが、距離がとればゴルフのスイングから、新体操まで計測対象は選ばない。計測速度も30箇所計測で100Hzであり、従来の同様なシステムに比べて10倍以上の計測速度である。本装置は、損害保険協

会の研究費により、CPM装置の研究開発の為に導入されたものであるが、その応用には多くの分野が考えられるので、運動力学、動作学、スポーツ医学、歩行分析、その他種々の生体の運動計画が必要な研究者に利用して頂きたい。

同様に、月ヶ瀬リハビリセンターの斉藤所長のおかげで損害保険協会から提供されたアニマ製の圧分布測定装置がある。大きさや、測定圧の範囲から足底圧分布の測定に使われているが、工夫しだいでは他にも応用可能であり、操作は簡単である。

機械工作室には、島津製の荷重試験機と、共和電業製のストレインゲージ用オートバランスアンプ、多チャンネルデータレコーダーがあり、それぞれA-D変換器とコントローラーをもち、コンピュータで計測操作とデータ計測がデジタルで可能である。荷重試験機に関しては、最大荷重が10噸で、従来の曲げ、引っ張り試験だけでなく、捻りも可能である。ストレインゲージは従来、2台、3台とバラバラに購入されていたものをまとめ、12チャンネルが同時計測、同時記録、同時A-D変換が可能となっている。荷重負荷試験機もストレインゲージ測定装置も、測定条件をコンピュータに記録する事により、各研究者が測定条件を一度決定すれば、2

度目からはコンピュータが自動的に条件を設定してくれる。また、この両システムは同時に使用が可能であり、荷重を掛けながらストレインゲージで歪みを測定する事を目指しているので、生体工学における強度の測定には最善のシステムと考える。この荷重試験機もCPM装置の研究開発のために損害保険協会から提供されたものであるが、他の生体工学における多くの分野で応用が可能であり、ぜひ利用してもらいたい。

教室改修工事記

小川 清久 (50)

跡地利用委員会によって、従来レントゲン保管室として使用していた別館中央棟4Fの9401〜9404室の計4室を、整形外科教室の占有面積と決定されたことから、今回の教室大改修の話が始まった。すなわちこの決定により、整形外科教室の占有面積が他教室に比べ著しく広いこととなり、3Fにあったパラプレジア医学会事務室（主に有給助手の研究室として利用）を明け渡さねばならないこととなった。当時の状況のままパ

ラブレジア医学会事務室を明け渡し、有給助手を4Fに収容すると、研究用面積がほとんど無いに等しくなる。

この為staff meetingで討議したが、整形外科の臨床研究資料として最も大切なレントゲンを極力保存する一方、研究スペースを拡大し、さらに4Fの人員収容スペースも確保すると言う。至極当然ではあるが、相矛盾する虫の良い三つの目的を達成することが、教室の方針として決定した。

「とりあえず」付きで帰局していた筆者がなぜ、またどのような過程でか、本人にも判然としないままこの工事現場主任に指名され、この虫の良い目的を達成するための苦闘が始まった。最初に与えられた仕事は、上記の目的に沿って基本計画を立案することであったが、研究室が臨床・研究班毎の縦割状態下に置かれており、将来の教室基礎研究の方向付けが明確に示されていないことから、立案は困難であった。この為、これらの事項の討議と方針決定を求めたが、明確な方向付けのないまま時間切れとなり、内西研究副主任、藤村教室幹事と井口副幹事に御意見を伺いながら平成2年2月に「とりあえず」基本計画と予想される計画実施上の問題点をまとめて、staff meetingに提出した。この作業と併行して矢部教授から病院当局に直接交渉して頂き、旧厚生女子学院寮

地下に予定されていたレントゲン保管予定地に整形外科として2室を借用する交渉を進め、医学部当局から承認を得た。

約1カ月間にわたり基本計画に対し討議を重ねて頂いたが、教室全体の研究計画を明確に打ち出すには至らず、再び時間切れとなり「とりあえず」の改修実施計画第一案を3月上旬に提出した。この作業と併行して、別館中央棟4Fに整形外科以外に唯一残った内科感染研究室と別館中央棟3Fに移転予定の整形外科教授室の交換を、内科学教室及び河井講師にお願いし承諾を得た。このことにより別館中央棟4Fに教室の全機能を集中させることが可能となった。この交換成立と第一案の検討結果から実施計画第二案を3月末に提出し、4月上旬に承諾を得た。

ここまでの計画立案中にも時間的制約が厳しい為、未だ決定を見ない計画に添い68回生を中心とした若手教室員によるレントゲン保管室からのレントゲンの搬出と整理が毎日の如く行なわれた。約20年間積もったホコリの中で、重い荷を黙々と運び、研究後に整理もされず投げ込まれていたレントゲンを整理しきったこれら教室員には、感謝しても仕切れぬものがある。

4月から5月中旬までは、工務、用度、設備、電気課

と工事実施に関する詳細な打ち合わせを行なうと共に、工事費用の概算算出を行なった。これと併行して整理されたレントゲンを旧厚生女子学院寮地下へ搬出し、すぐ利用し得るように整理した。しかしスペースが必ずしも充分ではなく、昭和49年以前のレントゲンを廃棄せざるを得なくなつたことは残念であつた。

5月中旬に、工事概算が7000万（この内医学部負担300万）と算出された。しかし、この中には他教室の整備にも不可欠な新しい電源確保に関する費用3800万円が含まれており、矢部教授から医学部当局へ粘り強い交渉を行なつて頂いた結果、この費用を医学部当局負担とすることを得た。さらに、改修期間中に教室員及び研究機器を収容しておくスペースとして別館2Fにあつた腎センター跡室を借りることが出来、5月21日までに外科学教室へ引き渡さねばならないパラプレジア医学会事務室の移動を五月中旬に完了した。

6月〜7月にかけて、教室の西側半分（9405、9408室とバイオメカ実験室）の機器と助教授室を教室の東側半分と腎センター跡室へ移動し、この部分のみ7月20日に着工した。8月に入り、工事自体の費用が当初の2400万から3300万へ増大することが明らかとなつた。西側部分の工事は、この費用増大

と併行して当然当初計画より複雑なものとなり、計画より1ヶ月遅れの10月上旬に完成した。

10月中旬より東側半分と腎センター跡室に収容していた機器を完成した西側半分に移動すると共に、助教授・講師室を2F腎センター跡室へ移動し、東側半分に着工した。この部分は、主に人員を収容する部分となる為、工期は短く11月下旬に完成した。中旬には腎センター跡室に収容していた機器と人員の4Fへの移動を完了した。その後12月いっぱいには、実験室及び重量のある材料の搬入、移動、及び4度にわたる掃除が行なわれ、平成3年頭初より正常な教室機能の回復が実現した。

工事費用及び備品に要した総計は、約4500万となり、教室研究費が払底してしまつた。工事担当者として誠に申し訳なく感じている。これが原■となつているのか、現在に至つても9時以後に活動している研究室が少ないことは少々残念である。

最後になりましたが数回の移転に対して心良く協力し、肉體労働を下さつた平成1年及び2年入局者を中心とする若手医局員の皆さんに感謝致します。

股関節研究班の現況

坂 卷 豊 教 (50)

近年どこの大学でも同様ですが股関節疾患の内容は以前の先天股脱中心から明らかに変化してまいりました。私が入室して数年間の印象では泉田教授の外来は乳幼児を連れた母親が圧倒的に多い時代でした。それが現在では外来でリーメンビュゲルを装着する患児は月に2名程度で、完全脱臼については年に4〜5名といった程度になりました。この変化がわずか15年位であったわけで、あらためて疾患構造の変化が大きいことを知らされております。学生のクルズスも以前は病棟に行つて入院患者の牽引のようすなどを話すことで行う機会が多かったのですが、現在はスライドで話をすすめるのみにになりました。泉田教授が退職されてから私は流れの始まっていたセメントレス人工股関節のことに目を向けました。セメントレスTHRは慈恵大が以前から行っている以外はいずれも外国製品で、股関節脱臼にもとづく変形性股関節症が圧倒的に多いわが国の患者には髓腔の形状の点で良い適合性が得られないことがしばしばであることに気がついておりましたので、柳本君、福君らにまずこの

説明をしてもらいました。CTで得られた画像をコンピュータグラフィック技法により日本人特有の形状を明らかにしました。亜脱臼性股関節症に対する手術に際して臼蓋の形、位置などを正確にとらえておく必要があること、またセメントレス臼蓋ソケットの開発の準備とするためCT像から臼蓋の形を立体的に明らかにすることを石橋君、吉田(宏)君にお願いしました。人工股関節は現在数多くの種類のものが用いられていますが、私達は従来よりカップ関節形成術を行ってきたこと、Bone Stockを温存できること、完全なるセメントレス臼蓋ソケットがまだないこと、などの点よりBipolar人工骨頭を臼蓋リーミングを行うことにより応用するDual Bearing式人工股関節を主流として行ってきました。症例数も300例を越えました現在、詳細な評価を行い今後の方針をあらためて考えていきたいと思っております。このDual Bearing式人工股関節の妥当性を証明するための動物実験を井上、山下、馬場君にお願いをし、そろそろ結論を出す時期に来ております。人工股関節にとつて欠かせないバイオメカニクスに関しては下村、本間、千葉君らにCT像からの検索では出来ない点の証明を起点としてやってみよう予定でいます。泉田良一先生は三次元表面再構成法より各手術のシュミレーションや股関

節の適合などの解明で数々の業績を出し、この分野ではわが国のリード役となっております。

研究班の役割として諸先輩から受け継がれた財産を後輩に伝えていくことが最も重要なことは言うまでもありません。たくさんの症例の蓄積とそこから生まれた知見は何にも代え難い大切なものです。これを現在の、またこれからの臨床に生かしていくことが慶應という世帯にとって最も重要であると信じています。先ほど述べました若い先生達のグループはそれぞれが大きな柱となつて強固なものができるようにとの私の願いです。それぞれのグループから沢山の研究成果の発表が出るように場を整えるつもりでおりますが、これまで諸先輩から受け継がれた財産を若い先生方に理解してもらつたことにも大きな努力をしていきたいと思っております。

本年4月より専任講師にして頂きました。股関節グループとしては先ほど申し上げましたように大きな柱が何本か強化なものになるよう努力したいと思ひます。またグループのことと同等に教室の発展のためにも努力しなければならぬと考えております。慶應というところはどうしてもその中で安心してしまい、hungry精神、他大学の意見をきくことなどに欠けるきらいがあります。他大学のひととの交流、関連分野の技術者との交流などを

積極的にすすめていきたいと考えております。

新米学長の近況と雑感

慶應義塾看護短期大学学長

平林 洌 (39)

新米の学長として漸く6カ月が過ぎようとしています。全くの新天地とはいっても家庭でも3人の娘と古女房に囲まれてきましたので、女の城の住み心地にはそれ程の異和感はありません。その上、整形外科の診療もほぼ従来通りにやらせて貰っていますので、2足のわらじを適宜履き分けているといった所です。助産婦、保健婦の専攻科の増設や、さらに4年制への移行達成の前には幾多の難問が待ちうけており、これからが正念場と自戒し、覚悟を新たにしている所です。

教室の方も、小生らの古株が抜けて徐々に世代交代を早目つつあることは同慶の至りです。又、レントゲン保管用としてのスペース確保に始まる15年来の悲願であった別館4階の研究室も新装なり、多くの先輩達の文字通り、汗と涙の結晶がここに陽の目を見たことも誠に慶賀の極みです。

この上は、機器も完備した立派なハードをフルに活用できるソフト、つまり研究体制を再構築し、多くの有為

な人材が効率的に仕事を遂行でき、国内のみならず、国際的にも脚光を浴びる業績をあげられることを期待しています。

大学審議会の答申にもある通り、大学院制度のあり方、国内や海外留学のあり方や学位論文とグループ研究の關係など再検討を要する問題もあるかもしれませんが、要は若い学究のやる気の問題だと思えます。

ソ連の結末を見るまでもなく、フェアな競争の原理こそ、人をして、又、グループをして活性化させる正道であることを銘記しつつ、今日も「短大の自己評価」の問題に取り組んでいます。

研究副主任を終えて

内西 兼一郎 (39特)

平成三年四月、藤村祥一講師から井口傑講師に教室幹事すなわち医局長の交代が行なわれ、それに伴い研究副主任が私から藤村講師に担当替えとなった。昭和六十一年に矢部裕先生が慶應に整形外科教授として赴任されてからむしろ志願して四年十か月やらせていただいた研究

のマネージャーの仕事がまだ十分に結果が出せないうちに交代して申し訳なく思っている。

主論文のための研究は、学位につながるため、研究そのものは是非積極的に遂行されるべきものであるが、学位取得反対の運動はこの二十年間にわたる学園紛争の主たる原因の一つであった。さらに運の悪いことに、整形外科教室では、昭和五十四年に池田亀夫教授が病に倒られて以降、大学院教授が不在となり、泉田重雄教授を中心としてスタッフが懸命に努力したにも関わらず、その後十二年間は主査不在であった。医学部長のご好意で、影山、阿部両教授が優先的に主査の代行をしてくださったが、何分お忙しいお二人であり、学位の取得は決して円滑にいったとはいえなかった。

しかし矢部教授の就任以降は、論文内容に厳しく、かつきわめて懇切、丁寧に校閲してくださる先生の指導で、大変スムーズに学位審査が行なわれるようになった。したがって研究者は何ら雑事に惑うことなく、ひたすら立派な研究をして、論文を書き上げればよいわけで、研究副主任の仕事は、研究者が何らの憂いなく研究を行ない、立派な成果を上げられるような態勢を作ることである。しかし何分、研究費の不足、研究する場所のないこと、設備の劣悪さ、研究助手、主として生化学、病理の払底

など問題が山積しており、頭の痛い毎日であった。

幸い平成二年に別館四階中央列すべてが整形外科教室のテリトリーとなり、関係者の努力により、研究室の整備が従来になく広範に行なわれたことは、特筆すべきことである。これにより各方面でより高次の研究計画が立てられると思われる。

矢部教授は研究の始まりを五年生からとし、四年の終りに、一編以上の論文を書き上げていて、研究を希望するものにテーマを与えるという方針を示された。そのために従来よりも一年早くテーマの賦与がされるので、最初の二、三年は八か月に一度ずつテーマをだすことになり、各指導者には大変に忙しくご迷惑をかけた。最初の学年は六十二回生で六十七回までの七学年の九十二名が対象となり、そのうち七十数名が研究活動を開始した。諸般の事情で数名が中止し、現在は、約六十名が研究中である。

第六回日本整形外科学会基礎学術集会は本年八月二十九、三十日と島根大広谷教授のお世話で京都国際会館で開催された。なかでも第一日第一会場は学会奨励賞候補の応募演題三十五題の中から選ばれた八題が口演された。最終的に四題が受賞したが、いずれも力作ばかりで大変興味深く拝聴した。今回は残念ながら教室からの応募は

なかったが、この次は是非応募して、賞を獲得したいものと思った。

教室の基礎的研究は、各臨床班のテーマが中心であったため、当然のことながら、臨床に立脚したテーマが多く、そのため研究成果がすぐに臨床に反映する長所はあるものの、整形外科学の基礎である、骨、軟骨、関節、神経、筋肉などの基礎的研究が少ないうらみがある。これが今回応募演題がなかった理由である。この点について、矢部教授とお話したが、全く同感とのこと、今後、臨床に関する基礎的研究とならんで、純基礎的研究も行う必要がある、その対策を検討した。これからは藤村新研究副主任の緻密で計画的な力をかりて、教室の研究体制が確立し、整形外科学各分野にて一層発展することを切望するものである。

「落第助教授」

富士川 恭 輔 (43)

平成三年二月某日に矢部教授より「少し話があるから教授室に来るように」と指示があった。今迄教授室に呼

ばれる時はあまりよいことはありませんでした。

昭和四十年、大学院学生として整形外科教授室に所属した時ののはじめての指導医は現教授の矢部先生でした。カルテに何を記載するか、手術記事はどのように記録するか、勉強の方法、診察の仕方など基本的なことを中心に手とり足とり指導を受けました。その声は今以上に大きかったと覚えています。以来、勉強の仕方、診察の仕方はいささか自己流になりましたが、カルテの書き方、手術記事の書き方は二十有余年その教えを守っています。何故か *freshman* 時代のことか頭をよぎりつつ教授室へ入りました。

「マアそこへ坐れ」と椅子をさしつつ教授も席に着きました。

「これは色々考え、大変迷った末に決めたことだが、今度君を助教授に推薦しようと思うから引き受けて貰いたい。」例によって重みのあるよく響く声でした。

ここ数年来耳に入る情報は人事刷新で助教授の話は突然であったので大変びっくりしました。慶大整形外科の助教授は歴代大物で、その大物の先輩の諸先生の顔を思いうかべるだけでも仲々大変そうでした。ひよっとすると小世帯の教授より大変かも知れないと思いました。

矢部教授の日常生活は異常です。朝早くから夜遅く迄

毎日教授室の灯りが消えることがあります。大勢の優秀な教室員をかかえ、研究と教育の指導、研究費の確保、学生教育、約五十の関連病院と円滑な協力関係を維持すること、日本整形外科学会副理事長、慶應義塾大学病院副院長として病院運営のトップに立たねばなりません。この間に容赦なくい込んでくる会議……。この教授を補佐する役……。これはやめた方がよい。自分はこんな大世帯の教室の助教授として勤める能力はない。世にいう「器ではない」のだろう。それにそろそろ後進に道を譲るべきだという sense も耳をかすめる今日この頃です。

「教授、大変失礼ですが私はどうも助教授に適さないように思います。せいぜい講師がよい所です。学問の面からも教室運営の面からも、もう少し若い将来性のある人材が沢山いると思います。私はそれに応じて配転して頂いて結構です。」

「オイ富士川」教授の声はこの失礼な言葉に対して意外におだやかでした。

「お前はまだ自分の勉強だけしていたんだらう。」
「しかしそれは私が教室に入った時の先生のお教えですから。」

「バカヤロ、お前もいい年をして何を寝ぼけたことをいってるんだ。もう少し考えてみる。この人事には随分

時間を費やして考えたんだ。色々迷った点も少なくない。助手のうちは一生涯自分の勉強だけしていればよい。講師になったら自分の診療班の面倒と自分の研究テーマの指導をしていけばいい。自分の勉強をする時間も十分あるだろう。しかし助教授は、六十%は教室全体のこと、三十%は自分の診療班のことを考えてやるんだ。自分のことにさける時間は十%以下だ。そして教授は自分の時間はない。」

そして声を一段おとして、

「富士川、本当はオレだって自分の勉強がしたい。」
たしかに自分のグループの面倒だけを見て、自分の机に向い自分の勉強だけをしているなんてこんな楽な生活はないわけです。

教授の最後の一言は確実に私の心臓に突き刺さりました。もう返す言葉もなくなつた頭が前にガクッと落ちました。これを教授は私が大きくうなずいたと思われたのだと思います。本当は今考えるところとまったく大きな意味を含んでいたと思います。

「ヨシッすっかり頼むよ。」

「ハイ」声になったかどうか分りませんでした。

教室は今多くの問題点をかかえています。急増する患

者さんにどうように対応し、患者さんのみならず自分達自身も満足できる治療を行うにはどうしたらよいか、出席率が10%に満たない医学部学生をどのように指導し、学問に興味をいだかせ、意欲的に学問に立ち向う姿勢をもたせるか、臨床的研究は他大学にヒケをとらないが、大きく立ち遅れている基礎的研究態勢をどのように立て直し基盤を作るか、どうしたら勉強、研究しやすい環境を作れるか、数多くの研究に必要な膨大な研究費をどう算段するか、どのようにして関連病院と協力し、関連病院を含めた教室全体としての和をはかっていけるか等々……。

今教室では、教授を中心にこれらの問題点を一つ一つ解決しようと努力しています。

私も今後は、今まで自分自身及び自分の所属する膝関節グループの発展のために費やしてきた時間をもう少し視野を広め教室のために費やしたいと思います。

しかしこれらの問題点の中でも、どうしたら若い教室院を立派に育てられるか、即ちどうしたら勉強しやすい、研究しやすい環境を与えられるかということについて顔が向いてしまいます。何故なら優秀な人材が育っていくことが教室の基盤となるからです。それには勿論机をふやすこと、研究室を充実させること、そして最新の研

究機器をそろえることが不可欠であることはいう迄もありません。しかし、もっともっと大切なことは、若い人たちと一緒に時間を費やして勉強し、研究する時間をふやすことではないかと思えます。

「コノヤロー、あれだけしっかり勉強してこいといったのに、昨夜女の子とデートしたんじゃないのか。そこにいいという迄立っている。」

「これらの論文をしっかりと読んで、俺を成程といわせるような答をもってくる迄、昼メシも、夕メシもそしてあしたの朝メシも、昼メシも食ってはいけない。寝てもいけない。」

「フザケンナ。この論文はまさか自分の幼稚園に通っているムスコに書かせたんじゃネーだろうな。」

毎日こんな風に若い人達を怒鳴りつけたいと思います。これだけ怒鳴るには自分も彼らのために彼らの二倍も三倍も勉強しなければならぬのです。そしてこれだけ怒鳴ればきつと若い人たちも喰ってかってくるにちがいない。

「何をいってるんですか。頭がぼけてきたんではないですか。老眼鏡のレンズをよくふいて下さい。」

そして何年か後には、今度は彼らが彼らの後輩に向って同じように怒鳴るのが眼に見えるようです。

「お前、あれだけ言ったのにこの文献読んでこなかったのか。読み終えるまでメシ食っちゃいけない。寝ちゃいけない。」

「あれだけ言ったのに、まだ富士川の奴、俺の言ったことが分らねえのか。」という矢部教授の声が聞えるようです。

教室幹事退任にあたり

藤村 祥一 (47)

深夜、電話のベルに受話器を持つと、〇〇病院の〇〇ですが、御不幸をお知らせします。……!!”時計は平成三年四月一日、午前〇時を少し廻っていた。”今日からは教室幹事は交替になるので……。”私が教室幹事を終えた瞬間であった。教室幹事を拝命したのは、昭和の終り、昭和六十四年一月であった。その後の二年三か月はまさしく“光陰矢の如し”瞬く間に過ぎ去り、自分なりの理念をもち望んだ教室幹事ではあったが、矢部教授の示された基本方針の達成にはほど遠いものであり、

自分の無力さを痛感した。教室幹事を終えた機会に日頃感じてきた教室員の権利と義務について私見を述べ、退任の弁にかえたい。教室には規則はないが、一つの社会単位である以上、そこに属する教室員には暗黙の了解として一定の決りがあるのは当然である。まず教室費であるが、毎年請求しているにもかかわらず、何年間も滞納して無しのつぶての教室員も少なくない。教室員からの当直費の前借りは莫大な額にのぼる。是非、滞納者は支払ってもらいたい。教室人事についても、五十以上の関連病院があり、教室員個々の尺度が異なる以上、平等は不可能で、あり得ない。人事を執行する側は出来るだけ公平を期すべきであるが、そこには医師としての能力適性などが加味されるのは当然である。権利を主張するからには、指導する者と教わる者の立場の違いこそあれ、それにふさわしい成果が要求され、教室の方針に合致したものでなければならぬ。研究についても、慶應義塾で学位取得を目的とする以上、研究開始前に語学試験に合格しておくことは最低限の義務である。出張人事での配慮、教室研究費や指導者の負担などを考えれば、研究完成まで遂行することは当然であり、途中でうやむやにするとは許されない。とくに出張中においては、研究続行のための多少の犠牲は当然であり、医長の配慮によ

る研究日を無駄にすることは厳に慎むべきで、研究する資格などない。また教室の行事は可能な限り考慮すべきである。教室員の協力こそが成功に導くからである。

以上、教室員の権利と義務について考えつくまま私見を述べたが、かくも大世帯となった教室を円滑ならしめるためには、いずれ規則の導入も考えざるを得ない。教室員にとって些か苛酷な面もあるが、かくあってこそ、慶大整形外科学教室が前進するものと確信する。

スポーツクリニック開設

竹田 毅 (47)

平成三年九月一日、慶應義塾大学病院の新たな診療施設として「スポーツクリニック・外来部門」が開設され、矢部教授が部長に就任されました。

また、はからずも不肖小生が実務を担当するよう命ぜられました。小生にとってこの役目が荷が重すぎることは十分に自覚しておりますが、ともかくスポーツクリニックの発展のために渾身の力を尽す覚悟だけは出来ております。もとよりすべての面で力不足でございます。

で御指導御後援の程なにとぞよろしくお願い申し上げます。

さてそこで、今回開設されたスポーツクリニック(以下スポクリ)について、その概要を紹介したいと思います。

平成三年九月二十九日付日本経済新聞社会面の「スポーツ施設で成人病を退治——厚生省、中高年千人対象にモデル事業」という記事にも見られるように今やスポーツ医学は、スポーツ選手のみを対象とした治療医学からすべての人を対象とした「予防医学」、「健康づくりのための医学」としてその重要性が認識されてきました。ちなみに「スポーツクリニック内規」の中から、その目的の項を抜粋してみます。

「スポーツクリニックはスポーツ選手のみならず健康人から有疾病者、若年者から高齢者まですべての人々を対象に、スポーツ外傷や疾病の診療はもとより競技能力の向上、疾病や老化に対する予防、健康増進のためのメディカルチェックや運動指導を行うと共にスポーツ医学に関する教育、研究を通じてスポーツの振興とスポーツ医学の発展に寄与することを目的とする。」

すなわちスポクリの業務内容はスポーツ外来とスポーツドックに大別されます。スポーツ外来は、スポーツに

よる障害や外傷の治療、有疾病者（たとえば高血圧、糖尿、心疾患、肥満など）のための諸検査、運動処方を含めた健康管理などが診療対象となります。スポーツドックは健康状態のチェック（一次検査）および体力、運動能力の検定（二次検査）などが対象となります。

さて私事で恐縮ですが、なんと小生が「有疾病者のための健康管理」のモデル患者第一号になってしまったのであります。即ち開設にともなう機器のチェックのために小生が実験台になってスポーツドックの予行練習を行った所、「肥満」「高血圧」さらには病的と断定できないが「運動負荷により心電図の乱れあり」との御託宣のもとに、運動処方と栄養指導を受け、毎日自転車をかがされるはめになっております。小生の結果に、スポクリの名誉がかかっているとのことで、食べたいものも食べられず、はなはだ閉口しております。

飽食の時代を反映するものか、世上ではフィットネスが花ざかりで、各地にフィットネス施設が次から次と出現しております。皆様の中にもこれを利用していらっしゃるものと思えます。また健康のためジョギングをしている方もおいでかと思えますが、御自分の体力の状態や、どの程度の運動が適度なのかを科学的に診断されている方はほとんどおられないのではないでしょう

か？スポーツには健康増進のため大きな効用があります。が危険もあります。ぜひ一度スポーツドックをお受けになられることを、小生の経験に基づいて、またスポクリの宣伝も兼ねてお勧めしておきます。

—— 閑話休題 ——

スポクリ外来部門の診療は内科系と外科系に分けて行っておりますが内科系からは呼吸循環、腎内代、老年科、小児科、リハビリテーション科、スポーツ医学研究センター（日吉）、外科系からは脳外科と整形外科が参画しております。診療担当医は現在別表の通りとなっております。また設備としては運動負荷トレッドミル、運動負荷心電計、筋力評価訓練システム（サイベックスII）をはじめ多くの機器を揃えております。また日吉のスポーツ医学研究センターと機能を補充しあうことにより、スポーツにまつわる様々な問題に対応出来る充分な態勢を整えております。

なお今回開設されたのは、スポクリの外来部門ですが、この外来部門の実績を見た上で近い将来、フィットネストレーニング部門が別館に開設される予定になっており、すでに用地は確保されております。

以上がスポクリの概要でございます。

慶應義塾は、すでに日吉にスポーツ医学研究センターがあります。病院内に「スポーツ医学の臨床の場を設立する」との構想は矢部教授はじめ整形外科教室全体の積年に亘る夢でありました。

かつて整形外科からは形成外科、リハビリテーション科が独立してまいりました。スポクリもその究極の目標として真のスポーツ医学の育成を掲げており、将来は独立した科へと発展していくことが期待されます。しかしスポーツ外傷や障害の予防や治療がスポーツ医学の重要な柱の一つである以上、機能的に整形外科と緊密な連携を要する分野があります。同様のことはその他の関連科についても言える所であり、この意味で形成やリハビリとは若干の相異があるように思っております。いずれにしてもこのスポーツクリニックが今後大きく飛躍できますよう絶大の御支援をお願い申し上げます。

スポーツクリニック外来担当表

| 内科系 | AM | PM |
|-----|-------------------------|-------------------------------|
| 月 | 森川 (小児) 勝川 (腎内代) | 千野 (リハビリ) |
| 火 | 山崎 (スポ研) | |
| 水 | 半田 (呼循) 大西 (スポ研) | |
| 木 | 金沢 (呼循) 辻 (スポ研) | |
| 金 | 石田 (老年科) | |
| 外来系 | | PM |
| 月 | 増本 (一般) 富士川 (膝) | 井口 (足) 大平 (脳外) <隔週> 内西 (手) |
| 火 | 竹田 (一般) 小川 (肩) | |
| 水 | 若野/高畑 (一般、脊髄) <隔週交替> | |
| 木 | 竹田 (一般) | |
| 金 | 増本 (一般) | |

* () 内は所属または専門分野を示します。

*この表は内定であり一部変更の可能性があります。

*当面土曜日は通常診療を行いません。

* スポ研=スポーツ医学研究センター (日吉)

* 栄養指導は月曜日午後に行う予定です。

医局副幹事、会計、 病棟医長に就任して

堀内 行雄 (52)

平成三年四月からまた教室に戻りました。三年九カ月の間、東京専売病院の整形外科兼リハビリテーション科の部長として私なりに一生懸命努力し、ようやく軌道になっておりました。しかし、矢部教授、内西助教授の熱心な御推挙と後任に里見講師がこられると聞き、私が勤めているより専売病院にとって多くの利点があると考え、転勤を決意致しました。

しかしながら、帰宅した早々医局副幹事と会計を矢部教授から命ぜられ、いままで諸先輩から教えられ学んでまいりました整形外科の学問とは全く違ったことを始めることになりました。頼りになる井口医局長や藤村元医局長に手取り足取り教わりながら「Fresh man」と同じ様な気持ちで頑張っております。

またこの度、教授にまたまた平成三年九月一日より病棟医長を兼任するように仰せつかりました。病棟医長と言えばここ数年間名医長と言われた竹田講師がなさって

おられました。しかし、九月二日よりスポーツクリニックが院内に開設されたため、竹田先生はそちらの専属になり病棟医長が継続できなくなってしまいました。病棟医長も私としてはとても荷が重いと思いましたが、とにかく自分の出来る範囲で一生懸命頑張ってみるつもりでお引受け致しました。こちらも宜しくご指導・ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

就任の挨拶の代わりにこの紙面をお借りいたしました。各々の役職について現在思っていることを簡単に述べさせていただきます。

医局副幹事という役職は、教室員が年々数を増し、医局運営が医局幹事一人では多忙を極めるためそれを補佐する役目であると理解しております。その役職を引き受けるにあたり、激増している教室員の一人一人が満足し慶應義塾大学医学部整形外科教室に入局して良かったと本人がいい、また慶應の整形外科の先生はみんな立派な先生で頭も良いし腕も良いと患者に言わせるような医者になって欲しいと考え、血の通った人事などが行えるよう井口医局長の補佐をして行きたいと考えております。

しかし、前者については我々が努力することで解決の道に近づいて行けますが、後者については私を含め個人の益々の努力がありません。

入局して間もない頃私は、医局は私に何かをしてくれるのが当然であると考えておりました。医局に入ったというだけで、他にはないすばらしい出張病院に出張できるし、現地の医長さんはじめ上の先生たちは手取り足取り親切にも教えてくださる——至上の幸せと考えるべきではないかと思えます。我々、医局員および同窓会員は、今度は医局に自分が出来るかを考えていただき、みんながこの医局並びに同窓会を益々すばらしいものにして行くよう努力して行かなければならないのではないかと考えます。

会計につきましては、医局費滞納者の多かった昔に比べ、滞納している人は、ごくわずかとなり、前任者の井口先生のご苦労がうかがわれます。医局費は明朗会計になっておりますが、無駄使いなど浪費の無いようチェックし、財布の紐を充分しめて行きたいと考えております。病棟医長に關しましては、前任の竹田講師のように上手に出来るとは、思っておりませんが、こちらは前二者とは違い臨床のことなので今までのことが少しは役立ちそうに思っています。早くシステムをおぼえ、落度の無いよう頑張りたいと考えております。

以上、三つの役職につきましては、かなり力不足ではございますが、ベストを尽くして取り組みたいと考えて

おりますので、ご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆さまのご協力を得て慶應義塾大学医学部整形外科教室並びに同窓会がますます発展するように努力して生きたいと考えております。

医療サービスの質と価値評価 その医療経済学的医術の適用分析

Quality and Valuation of medical care service; its applicable analysis for medical technology assessment.

佐奈田 幸 夫 (13)

一、医療の価値分析と費用分析

科学としての医学が技術に統合された医療として社会に健康投資されるのは人間資本の快適なウェルネスを求めめる医療学の目的である。

国民の健康感や文化の進展と国の経済成長、科学技術の進歩は保健医療サービスの質の向上を促進し技術適応範囲を拡大しその恩恵を享受する時代になってきた。その結果、国民はニーズを超えたあらゆる便益を求める満足を欲求し、有限な医療資源としての経済財の公正な配分を困難にするようになった。

現代の医療サービスは、まずその質と効率化が求められ、それを医療経済的視野からその構造、機能、結果というケアシステムプログラムを評価し、その価値とコストの妥当な価値付けを判断する方法論を検討し、理論的

学際的に解明して社会的合意を得んとした。

このための価値分析は、まずケアプログラムに現在の技術の組合せによるセット、*package*、中の多くの対価に相当する支払われない無形の技術即ち不可測のミスにも評定した効用や便益管理などを全適用した医療経済学的分析を行ない、資源の再配分を考える必要がある。

米国ビジネス界は、サービスとはコストと質であるといった。医療の質と価値とは同義語であり、それにはコストも費用として含まれる。一般に品質（性能）は原価との比で表わし、分母の原価が一定なら分子の品質と機能が向上すれば価値は高くなり、逆に分子が一定なら分母の原価は小さい程価値は高くなる。換言すれば、利用者に必要なサービスや成果が最少の資源と費用で達成されれば高い価値が生れるので評価分析には、費用より機能の品質即ち価値が尊重される。

この医療技術評価には分析手法が使われるが、価値分析は品質の向上が目的であり、費用分析は主にコストダウンを目的とする特性がある。価値分析とは機能評価のことであるが、利用者の要求したサービスを満足させる能力は機能によって便益の目標を達成することができるので、それに相応する対価を評定すればよいことになる。

医療サービスには利用効用と人間尊重という貴重価値

があり、医療人の倫理的行動価値には、個々人の偏差によって評価が難しいが質的分析には必要条件である。

二、医療の評価分析法特に費用効用分析

医療技術の医療経済学的分析法の主な方法には、費用効果分析 (CEA)、費用便益分析 (CBA)、費用効用分析 (CUA) がある。Cはコスト、Eは効果、Uは効用、Aは分析の頭文字をとっている。

この中の効用分析 "Utility analysis" について概説して凡その方向を説明する。効用とは、健康実態の水準或いは改善に関する評価をいう。これには、効果、結果、健康の水準に効用値があり、これを評価して現れる価値 (値段) をみるのである。

これを例示すれば、青年双生児があるとして、兄弟共右上腕骨外傷を受け、同じ治療を受けて同程度の治癒が得られたと仮定すると、この三つの水準は同じであっても、一方は大工であり、一方が文筆家であれば、生活の質 Quality of Life (QOL) には較差が生れる。これを効用値の点から比較できる。これは費用と結果とを比較するためには、共通の分母が提供されるからである。

一般にこの共通分母は "健康日" とか "質調整の生存年数" で表わす。この指標は、健康成果によって影響を受けた生活時間の長さを到達した健康水準の効用値 (〇

〜一の目盛り) によって得られる。

ケアプログラムの結果は価値分析や方法によっても評価されるが、この方が一層有用だといわれる。検査や治療の効用値とは、有病率や事前の健康確率 (〇〜一) の域値内にある時、何もしない方がいいか直ちに治療するかという〇〜一まで確率線上の意思決定によって方針が決る。

結果の価値の基準には、死亡率や生存率、疾病期間、費用効用値などを目的に応じて利用する。その前に、まず医療が適切に機能する可能性につき、その行為が効能と結果 "efficacy" があることを評価して予測してみる必要がある。次に医療環境に適切に合致した条件下で、それが受療者に効果的で能率的 "effectiveness" であるかを予測する。

最後に受療者に効果と便益を伴う役立つ有用性 "availability" として高い効用値をもつ医療が最適な医療といふことができる。

「ふるさと」

小柴 清定 (14)

私が、加納保之、富田忠良、西平賀健の三君と一緒に入局したのが昭和十一年四月である。当時の教室の様子は既に「ふるさと」に何回も投稿したので、茲には省略する。

当時の前田和三郎教授、岩原寅猪助教授、講師の畠中卓助、野崎寛三先生も既に故人になられ、五十五年の歳月が今更想い出される。

教授以下僅か十一名、実動八名で、一丸となって「脊髄外科」研究に、日夜努力されていた。そこに十三回生佐奈田幸夫先生と、吾々四名が加入した。教室の新戦力などと云われたが、所詮「ふんどしかつぎ」又は「幕下」で何のお役にたてなかった。富田忠良君は、入局翌年、短期現役の軍医として教室を離れ、西平賀健君と私は、三年目に応召となり、教室の空席員となった。幸い私の応召先が、現在の小田急相模原に出来た「臨時東京第三陸軍病院」だったので、少尉任官で通勤となった昭和十四年十月頃からは、夕方には軍服で教室に顔を出すことも出来た。この陸軍病院は、戦傷軍人のリハビリテーション

ンと、恩給診断を主目的とした臨時の病院で、小山急相模原駅（当時は広い原野に、ポツンと在る小さな駅で、駅の近くに数軒の家があるだけ）から北に約二キロ位の原野にバラック建ての兵舎のような病院であった。整形外科関係の人が多数集められ、伊藤原先生が、リハビリ科に居られた外、東大の水町、児玉、渡辺先生も同院勤務だったので、心強かった。少尉任官までの見習士官の時、幸運にも、慶大の神経科の小沼十寸穂先生と同室で、先生の御指導で、「戦傷による副神経単独損傷」に、論文掲載することが出来た。

前田教授は、横綱審議委員でもあられ、高砂部屋と近い方であった。「左田峰」から「前田山」が誕生したことは人口に膾炙した。相撲のテレビを見ると、当時前田先生のお伴で、高砂部屋の千秋楽に顔を出したり、当時の関脇高登関が入院した時、主治医が私だった。治療の外、相撲界の裏話、等々が浮ぶ。

当時は東京で整形外科講座があったのが、慶大、東大、慈大のみであった。集談会に集る人数も三十余名に過ぎなかったと記憶している。当番校で慶應病院の旧階段教室（戦災で焼失した）に集まったが、前から三段位まで、全員が着席出来たのが、想い出される。

私は応召で約七年余ブランクはあったが、教室生活は、

今になって五十五年の昔の想出が懐かしい。

各自それぞれ異なる教室生活を、永く心の「ふるさと」として留めておくようにと、命名された故前田和二郎教授が考えられたのではなからうか。

平成三年八月 記。

「回想」

田 辺 重 信 (15)

昭和十二年卒業生の中、五名が整形外科教室へ入った。遠山一郎、大沼良雄、渡辺重男、西新助それに私の五名でした。

八十才に近く、目下生き永らえて居るのは西君と私だけ。

右の五名の中で大変な勉強家有一名、大変な遊び人一名でした。勉強家的一名は西君で、遊び人は即ち私。

当時、軍国時代で、私はいきなり兵隊に取られ、大尉になる迄の数年間をご奉公してしまったので、除隊して教室へ戻った時には兵隊に取られなかった後輩が、何んな手術でも出来ると云う。大変に偉くなっていて、先輩

と呼ばれるものの、私は糸も結べぬと云う仕末。

それでいて、先輩、先輩と呼ばれるのは辛いことこの上ないので、内科へ転向してしまいましたが、私は自らを律儀者?と信じているので、整形外科教室を抜けずに今日に到って居ます。

糸も結べぬ整形外科医とはこれいかに、です。

前述の様に西君は秀才であったので、その後、東邦大学の教授となり、目下は日大の名誉教授と云うことです。前記の様に私は大の「遊び人」で、その仲間は同級の合原君、岩元君、それに、山登りで有名な今井さんのおやじに当る今井君。

外科の講義は本の棒読みで大したことはないから、と話し合っては、四人して新宿へ遊びに出掛けたものでした。

今は無いが、伊勢丹の前にあった帝都座へ映画を見にいったり、新宿駅の南口にあったムーラン・ルージュの席を温ためにいったりして遊んでばかり居たものです。

四年生の時、各地の病院へ見習いにいったものですが、私は右の悪友合原君と語らって横浜の警察病院に見学にいったのですが、行く先き先きで事件です。

好きになると云うことは不思議なもので、頗に痣のある看護婦に合原君が惚れてしまい、毎日、山下公園へ二

人連れて散歩と云うことだったのだ。主任の三辺先生が大いに心配され、合原君の実習はハイそれ迄と解除されてしまった。合原君だけではカドが立つと云うので、私が巻き脇えで一緒に止めさせられてしまった。

合原君だけ楽しい思いをして、私は面白いこと何一つなくて首と云うことでした。

怪しい方面では、合原君とは実によく気が合って居たので、伊勢崎町通りの裏通りの曙町へ夜な夜なお出掛けと云うことで、小窓の中に座る好みの美人を漁っては、今夜はこの美人と一と休みという具合でした。

こんな楽しい思い出も、もはや半世紀も以前のことになつてしまいました。合原君も今は亡し。私も八十才に近しとあっては、こんな楽しさも求めて得られず、時の流れの何と儚いことよ。

矢部教授、慶應義塾大学病院長に就任
お目出度うございます。今後の
ご活躍を願う。

浅葉 義一 (23)

本年発行のふるさとはに予め「高齢化社会における国立塩原温泉病院の役割」と題して投稿しようと準備していたのですが、その後矢部裕整形外科学教授が次期医学部長に選出された細田泰弘病理学教授の指名を受けて平成三年十月一日から二年間慶應義塾大学病院（以下大学病院と略す）院長に就任されましたので、敢えて表記の題に変えさせていただきました。思えば整形外科学教室としては故岩原寅猪名誉教授が昭和三十五年から一年間大学病院長をなされておりますので久し振りの快挙であり慶ばしく同窓同門の皆様と共に心からお祝いを申し上げると共に矢部新病院長が整形外科学教室の立場を止揚されて大学病院の発展のためにますますご活躍下さるようにお願ひ申し上げ次第です。

大学病院は大学医学部とは学生の医学教育や医学・医療の研究に関しては常に表裏一体の相互協力関係にあると共に広く慶應医学にとってもその統合的シンボルとも

いうべき存在であると存じます。従つてさきに大学病院新棟が慶應義塾百二十五周年の最大記念事業として全塾・全社中の総意に基づいて昭和六十一年十二月に完成されたことはいろいろの意味においてその完成の意義は大きく、我々卒業生一同にとつても随分と長い間その実現を夢みて来たので長年の懇願がようやくにして具現化したことになり、また大学紛争後長期にわたり立ち遅れて停滞しつづけていた慶應医学全体にとつても実に起死回生ともいふべき貴重な端緒にもなったのである。

大学病院・大学医学部の教職員の皆様は新棟建設の初期の段階から現在に至るまで長期間終始その総力を傾注されて、どうしたら新棟が大学病院との関連においてその持てるすべての機能を遺憾無く發揮出来るようになるかについて苦勞され努力されて参りました。その結果はまず長年の懸案であつた大学病院の赤字経営が昨年度においてすでに黒字経営へと改善されたばかりでなく、更に大学病院における診療・研究・教育の各部門についても新棟完成に引きつづいて順調に充實されて向上の一途を歩んでおりますことはまことにご同慶の至でございます。しかし大学病院の現状をいろいろと考えてみますと、これからが将来にわたつていよいよ本当の勝負どころにさしかかるのではないかと痛感されます。矢部新病院長

のリーダーシップ・本領が二年間（私は短いのではないかと判断しています）の在職中にどのように發揮されて、大学病院がどのように展開され發展するかを楽しみに見守つて参りたいと存じます。

私はここでご存知とは思いますが、大学医学部・大学病院の初期における歴史について少しく触れてみたいと思ひます。

大正六年（一九一七）慶應義塾は六十周年記念事業として大学部に医学科を新設することに当り、福沢先生から門下生以上の恩顧を受けられました世界的細菌学者北里柴三郎先生を初代医学部長に選任いたしました。この選択は慶應医学にとつてもまた慶應医学部にとつてもまことに天與の幸運であつたといわざるを得ません。北里医学部長は大正九年（一九二〇）に大学病院を開院されました、同年十一月六日の大学医学部の開校並びに開院式において次のように述べておられます。

「我が大学は医界の宿弊たる各科治療上の分立を防ぎ、基礎医学と臨床医学との懸隔を努めて接近せしむる方針である。学部は恰も一大家族の如く、教授も講師も助手も一致協力して衷心斯学の研鑽に努力する考えて、これが我が大学の特色であると信ずる。」

実に現在においても全くそのまま通用する素晴らしい

卓見であると存じます。

矢部教授には健康に充分留意されて思う存分頑張つて
大学病院を發展させて下さい。

バレエと整形外科

小川 正三 (29)

整形外科にとってスポーツ医学との関係については最近その関心がたかまり、認定医の問題などかまびすしい限りである。その日本の整形外科にとってまだあまり注目されていない分野にバレエに関する医学がある。戦前ごく一部の愛好者の間で育まれていたバレエが、前後次第に衣食足りて芸術心が目覚めだしてから音楽と共に我が国で發展して来た経緯には眼をみはるものがある。音楽に関心のある方なら現在我が国の音楽水準の高さは私に解説するまでもないことで、サイトウキネンオーケストラが欧米の人に圧倒的な感動を与えた一つをとつても全体の活動がわかると思う。バレエに関しては音楽程には知られてないが、現在吾が国のバレエは音楽のそれに着実に追従してきている。音楽なりバレエなりそれが脚

光を浴びるのはそれを舞台上演ずる芸術家であるが、それを支える数多くの縁の下の支えがなければ出来るものではない。その一つに欠かせないのが整形外科の協力である。スポーツ選手が多くの整形外科医の努力で故障から復帰し、またその指導によって成功しているのと同等異なるものではない。

日本ではダンスというとなく軟弱で婦女子の遊技の如く考えられがちであるが、実際に之に接してみると決してそんな生やさしいものではない。クラシックバレエに関して言えば少年期から始め毎日数時間の基礎練習を積み重ね、約二千時間の正規の教程を終了し始めて舞台生活が始まる程である。一口にダンス(洋舞)といつてもクラシックバレエ、モダンバレエ、ジャズダンス、民族舞踊からエアロビックス、社交ダンス等その範囲は広いが、その基本をなすものはクラシックバレエである。若しどれかのジャンルで大成することを志すならば一般的にいってクラシックバレエで基本をみっちり覚えることが近道である。新体操やアイスダンスなどもクラシックバレエの手法が多く取り入れられている。

私がバレエの医学に関心をもつたのは昭和三十七年秋のあるエピソードからであるが、整形外科医として衝撃的なインパクトを与えられたのはその第二中足骨のレ線

写真をみせられたときであった。機能の要請に応じてそれに耐えうる骨格が作りあげられていくのを見て深い感動をうけた。そうしてそれらの骨格や筋肉が形成される過程で起り得る数々の医学的問題を体験し、それに正しく対応出来る医師が皆無に等しいことを知った。手始めとしてバレエを学ぶ人二百六十名にアンケートをとりその愁訴を調べた結果、身体的愁訴に対し受診したのはマッサージ、はり、カイロプラクティック等の非医師が大部分で医師を訪れたのは一割にすぎず、而も医師を訪れた者の大部分が「バレエをやめればよい」という言葉に非医師の処に走っていたことを知り愕然とした。その昔から欧米の大きなバレエ団には夫々専属又は兼任の整形外科医があり、その指導の下にマッサージ士がおり、又数多くのダンサー向けの医学書が整形外科医その他によって書かれていた。私は人生の後半の一つの仕事としてこれに取組むべく、多忙な日常診療の傍らでも一年一研究なら可能と考え昭和五十七年より毎年一つ以上の研究発表を続け、最近になって漸く学会（足の外科学会）でも注目され、バレエに対する理解と関心を喚起するに至っている。然し外国のそれに較べるとそのギャップはあまりにも大きい。

今年の九月末に第一回MEDART国際学会がロッテ

ルダムで行われる。この学会は芸術と医学に関する学会であるが、その約三分の一はダンスメデイシンであり、私を招聘してくれた会長はオランダバレエ団の医師でもある。次の学会には我が国からも多数の演題を出したいものである。国際学会で活動するには年をとりすぎ、また荷が重すぎる。若手医師の台頭を望むや切なるものがある。

バレエという是誰でも白鳥の湖を思い出すであろうがそれだけがバレエではない。今や日本人が創作し、日本人が作曲し、日本人が振付し、日本のバレエ団が公演してバレエの本場であるレニングラードやモスクワで絶賛され、欧州で何回ものカーテンコールを受け、森下洋子の公演には外国で入場券が手に入りやすくプレミアムのつく時代である。過日惜しまれながら世を去った英国の名花マーゴット・フォンテンや、現在世界屈指のダンサーであるマリシア・ハイデをして遠からず日本がバレエの中心になるであろうと言わしめている。

ダンサー達は医師の協力を渴望している。昨年私が翻訳した英国の教科書的なバレエ医学の本でさえ出版一年で第五版まで増版されていることでもおわかり戴けると思う。こういった整形外科の分野のあることを紹介して筆をおく。

ライオンズクラブ・ガバナーになって

阿部 恒夫 (専3)

ライオンズクラブ国際協会は一九一七年シカゴ市で誕生した。創立者はメルビン・ジョーンズである。集まりが単なる商売上あるいは社交上のそれに止まらず、社会のためになにか有益な団体となれないであろうかという夢をいだき、指導的立場にある人々との談合により、ライオンズクラブの誕生をみた。人々の心をとりえる何かがあったのであろう。次第に国境を超え、尚発展しつづけ、百七十一ものライオンズ国またはその領域迄拡大の一途とたどっている。今や世界のクラブ数四〇、一九八。会員数一、八八二、九八二と拡大し続けている(一九九一年六月)。

日本ライオンズクラブは三十一地区、八複合(三三三〇から三三七迄)地区に分割されている。会員数一六四、三三三。クラブ数二、九八五。地区の頂点に立たねばならぬ三十一名のガバナー(任期一年)が日本の各地区の頂点に立って職務をまっとうしている。

創始者メルビン・ジョーンズの名を借りて、千ドル献金会員を、メルビン・ジョーンズ・フェローと名付け、

現在三万人余のそれを国際協会では六年後で七万五千人に増す目標を立てている。百ドル献金等もあり、これらの利子で、世界規模の諸奉仕事業が行われている。

一九九〇七月から一九九一年六月迄(任期一年間)、ライオンズクラブ国際協会三三二E地区(山形、秋田県約四四名)のガバナーとして職務遂行に総力を挙げてきた。地区幹事、会計その他約三〇数名に及ぶ地区役員の強力な協力を得てである。この前期、一九八九年七月から一九九〇年六月迄はルラナントがガバナーとして過す制度になっている。云わばガバナー見習いである。一九九〇年五月の第三十七回三三二E地区大会(約千七百余名参加)でガバナーエレクトに任命され、同七月セントルイス(アメリカ)の地でガバナーエレクトセミナーを実施、ガバナーたる総ての教育を受け、総ての教養を自分のもにし、第七十四回国際大会に於て、新国際会長からガバナー就任を受けたものである。

ライオンズクラブ国際協会の目的は、一、世界の人の間に相互理解の精神をつちかい発見させる。二、よい施政とよい公民の原則を高揚する。三、地域社会の生活、文化、福祉および公德心の向上に積極的関心を示す。四、友情、親善、相互理解のきずなによってクラブ間の融和をはかる。五、一般に関心のあるすべての問題を自

由に討論できる場を設ける。ただし、政党、党派の問題をクラブ会員は討論してはならない。六、奉仕の心を持つ人びとが個人の経済的報酬なしに社会に奉仕するようはげまし、また商業、専門職業、公共事業、個人事業の能率化をはかり、道徳的水準をさらに高める。

スローガンは、自由を守り、知性を重んじ、われわれの国の安全をはかる。

モットーは (We Serve) われわれは奉仕する。

ライオンズの誓いは、われわれは知性を高め、友愛と相互理解の精神を養い、平和と自由を守り、社会奉仕に精進する。

一九九一〜九二年国際会長テーマは、われわれは奉仕する。(私のテーマは、つきせぬ奉仕社会に生きて) (私のスローガンは夢、愛、世界をつつまん)である。

ライオンズ道徳綱領は、一、職業に対する不断の努力が正しく賞賛されるよう心がけ、自己の職業の尊さを確信すること。二、事業を成功させて、適正な報酬や利益は受けるべきであるが、自己の立場を不当に利用したり、人に疑われる行ないをして自尊心を傷つけてまで利益や成功を求めないこと。三、事業を遂行するに当っては、他人の事業を妨害しないよう心がけ、顧客や取引先に誠実であり、自己にも忠実であること。四、他人に対する

自己の立場や行いに疑いが生じたときは、他人の立場に立って解決にあたること。五、真の友情は損得の上に築かれるものでなく、心と心のふれ合いによるものであることを自覚し、手段としてではなく目的として友情を持つこと。六、国家および地域社会に対する公民の義務を忘れずに、かわらぬ忠誠を言動にあらわし、すすんで時間と労力と資力をささげること。七、不幸な人には同情を、弱い人には助力を、貧しい人には私財を惜しまぬこと。八、批評は謙虚に、賞賛は惜しみなく、建設を旨として破壊をさげること。

私のガバナーの時の国際会長、ウイリヤム・エル・ビルビックスの数ある中で主な方針は、一、視力第一(失明と戦うライオンズ)、即ち発展途上国を主にして約三千万人の失明者がある。その約八十%は助かる見込みのあるものだから(世界の学者、識者、多数の研究結果による)、このために約一億ドルの予算をおいて、一九九〇〜九六年迄の継続奉仕事業とした。この中には糖尿病からの失明もあるので、糖尿病更に薬物乱用防止対策も含まれている。これと併行して血液バンク、腎バンク等にも関与している。二、新クラブ結成、会員増強、退会者防止もその一つとなっている。

人の心を捕えずにいけない何かがあれば大きくならな

ないだろう。それが共産圏に及ぶライオンズ迄発展した。ソ連、ハンガリー、ポーランドその他多数のライオンズクラブが誕生している。近来、世界東西の雪解け現象がおき、待ち望むや久しかった世界平和への足がかりを、ライオンズクラブでも築き上げることが出来る布石作りに成功しつつあるとみてよいであろう。

政治・行政の及ばない、及ぼそうとしない闇が意外と多く死角を形成している。多くの為政者は見て見ぬふりをして居ることが常識化してしまっている。この谷間を何とかすることが出来ないものだろうか。虚構の中で大金が飛びかかって日本を世界を害していても、それを何故善用しようとしないのであるか。こうゆう者がぬくぬくと栄え続ける限り、真の先進国とは云えまい。こうゆうことに意を向け、認識してゆくのがライオンズクラブであるうし、又ライオンズクラブでないといけないのかもしれない。私は任期中の各クラブ公式訪問に際し、これ等も含めて話し合ってきたが、もりあがる何かの力源、実践源ともなればと願っている。

ライオンとよばれる人。

一、事業を成功に導き、善良な生活を楽しみ、常に微笑をたたえ、人類を愛し、知識人の尊敬を集め、幼児たち

二、その地位にふさわしく、かつ精力的な仕事ぶりにより、一輪の花と心うつ詩と、そして、うるわしさを秘めた魂とによって、よりよき社会をもたらす人。

三、人生の中の美の輝きを感じ、その賛美の言葉を忘れず、友の美点をつねに見守り、自らの良きところをまた友に贈る、その人生こそ偉大なる感激そのもの。

サンドバッグの思い出

野口朝生 (34)

いつまでも若いつもりで、何となく毎日仕事に明けられているが、ふと考えて見たら、医学部を卒業してもう満三十六年半にもなる。昔の記憶もそろそろ風化しつつあるような所へ、ふるさとへの投稿を依頼されたので、はるか昔の出来事を思い出しながら、筆をとることにした。

岩原教授と僕との出会いは、医学部一年の時から始まるのだが、もう四十年前になる。当時、僕達のグループは、その指導教授を病理学の小林忠義教授に御願いする事になり、ハウプトとして僕が、小林教授のもとに参上

した。今でいえばゼミナールである。その折、小林教授が「そうだ。それではグループで見学旅行をしようや。岩原君の所に行こう。」とおっしゃって、昭和二十六年の夏、国立箱根療養所長をされていた岩原教授の所に押しかけた。朝鮮戦争の翌年の事であるから、それ以前と比較して、ずい分物資がふえて来たといっても、まだ食物の不足が目立っていた時代である。それなのに岩原先生は、奥様と共に、御自身が畑で丹精こめて作られた野菜、果物、小田原港でとれた新鮮な魚貝類などで僕達を歓待して下さった。その時、御燗番をなさっていたのは、野町昭三郎先生であった。野町先生にはその後、僕がフレッシュマンで最初に出張した国立塩原温泉病院で、院長として御教えをいただいた。

おもてなしを受けている時、僕がじゃが芋をもくもくと食べているのを見て、岩原先生が「野口君はじゃが芋が好きだね。」とおっしゃり、僕が「はい。家の者にじゃが芋あんちゃんと呼ばれています。」と御答えたのが、二人の間の最初の会話である。その時、先生は浴衣がけで、末の御子さんをあぐらの上に乗せておられたのをはっきりと記憶している。何故ならば、その瞬間、僕は整形外科学教室に入る決心をしたからである。

縁とは不思議なものである。どうしてそう思ったのか

は、自分自身で今でもわからない。でもある種のひらめきがあった事はたしかで、その時の岩原先生のまなざしが僕に強い刺激をあたえ続けている。

おそくまで御馳走になり、帰路についた時に、僕は小林教授に、整形外科に入りたいと申し上げた。先生は僕をじつとごらんになり、「うん、野口君は向いているかもしれないね。」とおっしゃった。

臨床に多少ともかわりが出来る三年生から、勿論指導教授は岩原先生に御願ひした。そして、それから何回も、御宅におじゃましたし、或いは見学旅行にも、御忙しい中をつれて行っていただいた。

インターンの時にも、そう感じていたのだが、入局して岩原教授の回診について見て、先輩達が、怒られるのがいやで、逃げまわっているように思えたので、そっと或る先輩にその事をたずねて見た。すると、岩原先生の回診の時には怒られ役がいるといんだとの事。そして別の先輩の名をあげ、彼がいた時はよかつたんだがとおっしゃった。その役目がサンドバッグなのである。

国立塩原温泉病院の出張を無事終え、帰局の御挨拶に僕が教授室に参上すると、岩原先生は御苦勞でしたと申された後、おもむろに僕に切り出した御言葉に、僕は仰天した。なんと女房（勿論、当時は僕のガールフレンド

の一人であったのだが、が单身岩原先生をおとづれて、僕と結婚したいといったのである。当時女房は指導司祭の「モッキンポット神父」のすすめで修道院を見学中であったが、良く考えたら、僕と結婚するべきだと決心したのだという。そして岩原先生は五回生で、七回生の大塚範吾君は良く知っているから、わしが仲人をしてやるからタカ子さんと結婚しなさい。いったい君はイカレポンチなのは良くわかつているが、彼女にいったい何をしたのだと詰問された。僕は「先生、冗談ではありません。手を握った事ありません。」と答えたら、ニヤニヤ笑って、「それは彼女から聞いて知っている。君をからかって見たかったのだ。」と大笑いなされた。そして僕が口をとがらせて怒ると又笑われた。かくして、岩原先生は勿論、頼まれ仲人では何回もそれ迄なさっていたのだが、実力仲人第一号として、僕は結婚した。丁度熊本で学会があったので、新婚旅行はそれに出席したが九州にした。余談であるが、新婚旅行で学会に出席したのは僕だけではなからうか。熊本から鹿児島に行く列車で、僕は先生御夫妻と又いっしょになった。岩原先生も僕達に刺激されて、旧婚旅行中であつたのである。同級生の三宅詢先生の御父君が、その頃鹿児島で開業されており、岩原先生御夫妻をおもてなしたのであ

るが、僕達もどうぞと御誘いを受けて、厚かましくも、鹿児島、桜島と御相伴にあづかった。三宅先生、本当にありがとうございました。霧島では又、岩原先生と同じ宿で、夜御招待をうけて、御馳走になってしまった。本当に楽しかった。

こんな事情もあって、僕が医局にいる間は、僕が岩原先生のサンドバッグをつとめる羽目になってしまった。もっとも僕の性格が野放図で、何をいわれても馬耳東風で、絶対にくよくよしないので、岩原先生も怒りやすかったのだらうと思う。しかし、いくらイカレポンチでも、時には腹にすえかねる事だつてあつた。或る時一週間に五十回以上怒られたのが三週間続いた事があつた。この時僕は一人で教授室に行き、岩原先生に、いくら間接的にであつても、怒られると萎縮する人間だつているんだからと、もう一寸言い方を考えておっしゃっていただきたい。第一先生の血圧があがるんだからと直言した。岩原先生じつと僕の言葉を聞いていらっしやつたが、最後に「わかつた。今後気をつける。」とおっしゃって下さつた。その時僕は心の底から、岩原先生を師匠と仰いで来た事を誇りに思つた。最後に岩原先生御夫妻の御冥福を心から御祈り申し上げます。合掌。

清水市立病院整形外科の歴史

高橋 惇 (40特)

清水市立清水総合病院整形外科は、今からおよそ三三年前に開設され初代医長として森雅文先生が慶應義塾大学医学部岩原教授(名誉教授・昭:六十三・三:十四逝去)の命を受け着任した。昭和三十六年十月のことである(尤もそれ以前、高橋(昭)、中村(洗)両先生が静岡赤十字病院勤務時代パート勤務され整形外科の礎を築かれていたのである)。

旧病院本館病棟が建築されたばかりの頃で新しい建物に新たに整形外科が開設され、新たな人材が派遣されたのである。

慶大整形外科の関連病院とはいえ森先生は、初年度は一人医長として孤軍奮闘外来診療に当たり、外科の応援を得て手術を行った。病室は産婦人科と混合であった。

昭和四十年になると、宮本君、翌年は大場君と教室員の若手医師が出張勤務し、昭和四十二年には別館改装工事が完成した。以後真崎、千野(現慶大リハビリ診療部長)、高江州、北村君らが森先生の指導を受け整形外科の二人勤務時代となる。

昭和四十三年森先生は東京歯科大に迎えられるべく当院を去った。続いて沖永先生が第二代医長として大宮社会保険病院から着任した。沖永先生の許には宗近、大場、田辺、細谷、三笠、山屋、小池の諸君が、昭和四十七年より三人勤務となつてからは中西、岡、水口、淵上、市川、鈴木の諸君等多くの若手医局員が交代勤務につきそれぞれ伸び盛りの一時期を過ごした。

沖永医長の東京都立清瀬小児病院への栄転の後、昭和五十年四月より泉田教授の命を受け高橋(惇)が担当することになった。鈴木、崎原、片田、宮川、渡辺、湯沢、田村、斉藤(秀)、西山、塚原、三上、井上、磯崎、小林(龍)、伊佐治、小林(保)、手塚、石橋、吹本、大熊、関等々の諸君が、昭和六十年からは藤田学園保健衛生大学整形外科矢部教授(現教授)のご好意により早川、蜂谷、鶴飼、岡本が派遣され四人勤務となり、平成元年には鶴田(藤田学園)、渡辺(雅)、大平、平成二年より外川、森田(藤田学園)、平成三年になって直長、西、中村、藤原(藤田学園)の諸君が勤務し現在に至っている。知識豊富な中堅と新進気鋭の若手が常に新たな息吹を吹き込んでいる。

昭和五十九年頃から、陳旧化した病院の改築案が具体化し、各種委員会が発足して活動を始めた。加えて昭和

六十一年二月には小山新院長を迎え、新改築案は微にいり細にわたり検討された結果、幾多の困難を排し昭和六十二年着工した。

県立病院の統合により移転した県立富士見病院の跡地に計画された新病院の工事は、順調に進み、地下掘削に続いて次第に地上にその威容を現わし、ついに平成元年四月完成した。

『健康と笑顔を結ぶ市民の病院』をモットーに患者中心の医療の確立、当清水地区の基幹病院としての機能の充実、経営基盤の確立をテーマに新病院がその名も清水市立清水総合病院から清水市立病院となつて誕生したのである。

平成元年四月十五日の竣工式に続き五月一日旧病院からの引越し大作戦を無事終了して、当院は名実共にその活動の場を新病院に移した。

北に清水港を隔てて霊峰富士を仰ぎ、東に駿河湾と伊豆の山々を望む清水市最大の建造物となつた新病院は、初年度七病棟を開き、三百五十床の稼働病床を擁して開院した。

数々の新システムや新鋭機器の導入により患者本位の病院になるべく始動したのである。

五月六日の開院日には大変な混雑であつた。

来院する患者も、迎える職員も慣れないためにいろいろ不都合が生じたことはやむを得ないところである。しかし、一ヶ月、二ヶ月と経過し少し落ちついてみると先ず患者数の増加に眼を見張らざるを得ない。

一般的に新病院になると外来患者数は約三十%増加すると言われているが、当院の場合はそれをはるかに上回る増え方である。外来患者が増えればそれにもない検査、投薬も増える。コンピューターが画像を作り出し、検査データを送り、処方の手助けをする。

診断は迅速、適確さを増し入院治療を要する患者が増える。病床の増加をはるかに上回る患者増加の状態であるので入院予約がたまる。

救急部門は二十四時間体制で臨み、来院する外科系患者の半数以上は当科に関連するもので、この部門からの要入院患者も多い。一般外来患者予約を飛び越して救急患者が入院し、その結果病床不足に拍車をかけることになる。

入院患者が増えればそれにもない手術件数も増えると言った具合である。平成元年には旧病院時代に比して八十件の増加があり、平成二年には更に二百件の増加を数えた。

平成2年度より2棟が開棟、平成3年度には、最後の

1病棟が開棟し、500床full openとなった。

平成3年になって骨塩定量測定も可能となり、MRIも稼働を始めた。これら数々の新鋭機器の真価はこれらを我々がいかに駆使活用するかによって発揮されるものと確信している。新病院開院以来2年余り経った現在、私共勤務者一同は更に努力と研鑽を重ね、地域医療の一端を担いたいと思っている。同窓会の諸氏諸君の当院へのお立ち寄りを歓迎する次第である。

近況報告

吉 沢 英 造 (41)

矢部教授が名古屋に去られてから、既に五年が経ちましたので近況を報告します。

まず、難航しておりました関恒夫君の教授昇任が平成二年八月二十一日付けでやっと承認され、十月二十六日名鉄ニューグランドホテルで内々の祝賀会を開きました。矢部教授をはじめ同門の先生方にもご足労頂き、祝って頂きましたことをあらためてお礼申し上げます。関教授にはこれまで第二教育病院(ばんだね)整形外科の責任

者として長年頑張ってもらいましたが、以後独立した講座の長として活躍してもらうことになりました。第二教育病院には既に新棟が完成しており、旧棟の改装工事が完了しますと五百床に増床され、関講座は約五十床を受け持つこととなります。関教授の下には現在早川克彦病院講師(本学S五十八年卒)のほか、二名の応援を派遣しています。徐々にスタッフの充実を計り、立派な講座に育ててくれるものと期待しております。どうか同門の先生方の温かいご支援をお願い致します。

平成元年七月に彦坂一雄講師が光ヶ丘総合病院に転任されてからは、武田丘病院講師(本学S五十八年卒、慶應同門武田智先生の長男で、矢部教授のもとで切斷指の仕事をし、彦坂講師のもとで手の外科の臨床を学びました)が、矢部・彦坂流の手の外科を継承し奮闘しています。

安藤謙一講師が、本年七月初めから約一年間の予定で英国Oswestry (Robert Jones & Agens Hunt Orthopaedic Hospital) に留学中です。Children's Orthopaedic Unit, Dr. Evansのところで英語をマスターすると同時にひと仕事してもらい、帰国後の飛躍を期待しています。

なお、安藤講師の不在中の股関節・小児整形は蜂谷裕道客員講師(本学S五十九年卒)に何とか頑張ってもらっ

ています。

中川研二助教授は着実に本学のリウマチ・膝関節外科を發展させており、充実期に入っております。

また、増加する外傷例に対処すべく数年前に外傷班を新たに設け、現在は岩田啓史病院講師（本学S五十六年卒）がそのリーダーを努めています。

脊椎外科には中井定明講師（平成三年四月に講師昇任）がおり心強い限りです。

また、釘持和彦君が平成二年七月から助手として加わっております。

第一教育病院の整形外科には、百五十〜百六十床の入院があり、年間手術件数も一〇〇〇例に達しております。医師の数は私を含めて一八〜一九人ですので非常に忙しい毎日です。外来は毎日初診を含めて六ヶ所〜七ヶ所で診察していますが、看護婦は二人しか配属されず、私を含めた各診療医は患者の呼び込みからはじまり何から何まで全て一人でやっています。外来診療、手術、病棟処置（点滴・注射・病棟コンピュータ入力）が毎日並行して行われているために医者が足りず、Beschreiberも数年前から廃止したために、診察中は患者の話を聞きながら保険請求のためのコンピュータ入力もしなければなりません。まるで駅の緑の窓口に座っているようで大

へん疲れます。

手術も件数が多くなってしまっただため整形外科は月曜から金曜まで毎日朝から晩まで予定手術がびっしりと組み込まれ、その上に外傷が入ってきますので二本〜三本並列で手術が行われています。

研究面は外傷班所属の小林茂病院講師（本学S五十八年卒）に責任を持ってもらっています。研究室といっても一部屋の半分を年間契約で共利研から借りているもので大へん狭苦しく、最近の実験用器材で埋まってしまう足の踏み場もないくらいで、山口大学や福島医大また最近ではSweden Coteborgから見学に見えた時は恥ずかしい思いをしました。さぞかし驚かれたことと思えます。それでも幸い本学技術短大の女性が秘書の形で研究室の面倒をみてくれるようになり、以前よりは少しく整理されるようになりました。深夜に研究室を覗き、小林君達と夢を語るのが私の楽しみの一つでしたが、最近はず事に負われてそれも出来にくくなっております。

この先どうなっていくか全く見当が付きませんが、教室の進むべき道を誤らせぬよう可能な限り頑張ってみるつもりです。

同窓の先生方のご支援をお願い致します。

（平成三年八月三十一日 記）

酵素注入椎間板の生体力学的検討

(日整会誌 63, 549-561, 1989)

小柳 貴裕 (59)

この度矢部教授のご高配に預かり岩原賞受賞の栄誉に浴することができ、恐縮申し上げると共にお世話になった諸先生に厚く感謝申し上げます。論文の内容に触れる前に先ず、実験の初期の思い出を述べてみたいと思います。力学に関しては、シミュレーションに多少興味があった程度の私でしたが、なんとなく若野先生の門を款いたのは、自分が裏日本の僻地の小学校以来の後輩という運命的なものに加え、何かと我が儘も云い易いだろうと考えたからでしょう。しかしバイオメカなんぞコーヒークを飲みながらパソコンのキーを叩いていればなんとかなると思っていたのはとんでもない誤りでした。パイナッフルか何かからとれると云う魔法の薬を使つての苦手な動物実験。いつも撞着する上不遜な弟子に師から愛の激し屈ばかりこねとらんと早よ動かんかい。頑ばらんと〇〇大に先を越されるぞー。漸く始まったものの動物の扱いの難しさ、不慮の出来事など計画は遅々として進まず、正に亡羊の嘆の毎日でした。追い打ちを掛けるように、

実験を始めて半年も立たぬうちに整形外科基礎を語る会(現、基礎学会)で、その〇〇大から同じ薬を使った綺麗な病理が発表され呆然。これは応えました。流石に二番煎じは絶対御免とプロトコルをより深奥なものとした結果、知らぬ間に私の夜の生活の中心が動物舎となり、ネクラの烙印を押されるようになりました。そして紆余曲折二年。一陽来復して結果が出始めた時は欣喜のあまり雀躍したものです。終ってみれば三三歳。漸くお見合ももうまく行きました。以下、論文の主旨に触れたいと思います。

椎間板内酵素注入療法における効果発現機序、椎間板の機能低下とその回復に関しては一致した意見をみるに至っていない。本研究はこれらの疑問を解決するために、雑種成犬の椎間板内に酵素を注入し、生体力学的立場、及び形態学的立場から検討を加えたものである。実験は、準静的圧迫による力学実験、強制振動による動的な力学実験、病理形態学的検索を三本の柱としており、各々の注入短期群、長期群につき検討し、正常群との比較を行った。

準静的圧迫実験では、酵素注入短期群では瞬間的にも時間的経移においても正常群に比べ、椎間板は軟らかく反応し、長期群ではそれが部分的に回復した。また短期

群では内圧上昇機能も損なわれ、効果発現機序解明の重要な手がかりとなった。一方動的実験では、短期群で弾性、粘性両方が低下し、長期群では弾性は回復するが粘性は回復しないという結論が得られた。すなわち硬さは回復するが、衝撃吸収力は回復しないことが判明した。

また、動的検査で得られた粘性、弾性の定量的データは、準静的検査における stiffness, creep rate のデータ即ち瞬間弾性、遅延弾性の挙動を支持するものであり、両実験結果より導かれた生体力学的結論の本質的一致が示唆された。また病理学的には短期群における髄核の消化と、長期群における髄核の線維性再構築が確認された。すなわち酵素注入により一旦失われた髄核内のプロテオグリカン産生能は再び回復するが、正常とは異なった椎間板となることが証明され、これが力学実験における長期群の弾性回復、粘性非回復の本質であろうと考えられた。

終わりに、御指導頂いた泉田前教授、矢部教授、平林助教授を始め、挫折しかかる不肖の弟子の士気を幾度となく鼓舞してくださいました若野先生、病理の福田先生、工学部の六馬先生、そして動物舎の方々など多くの方に御指導御協力を頂いたことは決して忘れることはありません。そして酵素注入療法が斜陽化する中、今後陽の目を見そうもないこの論文を目にとめていただいた矢部教授

に衷心より感謝申し上げる次第です。

開業して思うこと

渡 辺 邦 夫 (61特)

私は平成元年十月十六日、故郷足利の地で、十九床の診療所を開業しました。現在一日外来患者数五百人前後、一ヶ月初診総数七百人前後と、まずは順調な船出となっております。これも一重に慶應の整形外科教室で学んだ実り多い研修の賜ものと、心から感謝致しております。

プロの弦楽四重奏団を迎えて開催する四季の院内コンサートシリーズも五回を数え、院内新聞(患者啓蒙用)の発行、毎月の健康セミナー開催、わたなべ整形外科友の会設立、…etcと、勤務医時代とは違った角度から、地域医療に深く根を下ろし始めていると自負しております。

今後の目指す方向としては、健康と文化情報の発信基地、エコロジー活動の拠点としての色彩を更に強め、医療はサービス業であるという原点に立ち返って、種々の質の高いサービスを提供する施設を作りあげるといふこ

とを考えております。また更に重要なことは、如何にして最高の医療水準を維持し続けるかということであり、この部分で自信が持てなくなった時、当院は閉鎖する予定です。

ともあれ私は今、開業したことに大いに満足しており、ストレスゼロの生活をしております。何しろ気に入った職員だけを採用して身辺を固め、やりたい放題のことをやっているのですから当然かも知れません。

毎朝六時から早朝テニス、七時半からの病棟廻診、一時間の昼寝、：救急車をすべてストップしている関係もあって、毎晩七時には完全なフリータイムとなり、休日の呼び出しも皆無です。

唯一の不満としては、長期休暇が取れないことであり、これは現在秘策を検討中です。やはり人間として夏休み二週間、冬休み一週間の休暇は最低限度確保すべきものであり、早死にしないコツだと確信しております。

思いつくままに好き勝手な事を書いてきましたが、今後開業を考えている若い先生方に何か参考にでもなれば幸いです。

留学便り

大谷俊郎 (59)

拝啓、こちらリーズ (Leeds) は今薔薇が満開で、やっと来た夏を楽しんでいるかのようです。

ここリーズはグレートブリテン島のほぼ中心で、ロンドンとエジンバラのどちらへもちょうど百九十マイル (約三百キロ) の位置に在ります。世界地図を東にたどるとカムチャツカ半島にぶつかる高緯度の街で、半月前より少し日が短くなつたものの、現在日の出は午前四時半、

日の入りは午後十時頃です。

今日で留学してちょうど四か月が経ちました。お陰様で、一家そろって元気に過ごしております。簡単にこれまでの経過を報告致します。

I. 留学先の紹介

リーズ大学は、一八八〇年四月二十日、ビクトリア女王の擁護の下にマンチェスターに創設されたビクトリア大学の第三番目のカレッジとして、一八八七年十一月三日に誕生した「Yorkshire College, Leeds」がその起源とされています。現在は芸術学部、経済学部、法学部、

教育学部、理学部、工学部、医学部の七学部から構成されています。

医学部には Leeds General Infirmary (LGI) と St James's Hospital の二つの付属病院が在り、この LGI に属する研究施設のひとつとして Rheumatology and Rehabilitation Research Unit (RRRU) が在ります。

RRRU は色々な分野の専門家が集まって関節と RA に関する基礎研究をする施設で、ライト教授、チェンバレン教授の二名の教授を中心に運営され、その憲章には特に臨床医と、工学、薬学、心理学の各基礎研究部門との共同研究の場を提供する事が大きな目的の一つと詠われています。私の所属して居る Biomechanics Laboratories はその中心的な研究グループの一つで、Dr. Seedhom の指導のもとで膝、

脊椎、手などの Biomechanics の研究が行われています。

II. 研究プロジェクト

日本から試案として温めて来た、「ACL 単独損傷 (非接触型) の受傷機転について」は、(1) 手に入る膝が五十歳から八十歳と高齢なことから靱帯実質部断裂の再現が困難な事、(2) 同様の大きなプロジェクトが現在進行中で、

設計中の計測器が完成するまで余り勝手なことができず、それ自身がPhDの学位論文になるため、その完成にはおそらくあと一年ぐらいかかりそうな事などの理由で、残念ながら「見送り」となりました。

代わりに、このRRRUで六年かけて開発された計測器（インデントーションマシン）で関節軟骨の物性が高い再現性で測定できることから、軟骨とその直下の軟骨下骨の物性を計測するプロジェクトを計画しました。しかし、いくつかの試行実験を行ってみたところ、関節軟骨の変性の程度と軟骨下骨の「固さ」の間には当然ながら何らかの関係がありそうなことは解りましたが、測定標本の骨密度の計測法で壁に突き当り、時間的制約からこれも没になりました。

結局、限られた時間で何かを仕上げるにはこのインデントーションマシンを利用するしかないと考え、現在異種動物間で軟骨の物性を比較する実験を計画しています。膝関節軟骨の厚さと堅さのトポグラフィーを数種類の動物について作成し、統計処理した後、関節の適合度や荷重等との関連を調べようと考えて居ます。何しろ正確に生体材料の機械的特性を計測すること自体を生業にしている人達に囲まれているので、臨床医の発想は議論の段階で打ち負かされることが多く、すでに三つの試案が

没となりました。このやり取りが良い勉強になりますが、稚拙な英語力のために自分の考えを正確に相手に伝えることが困難で、幕下が三役と相撲を取っているような感じでした。

ともあれ、三か月の準備期間で本実験に入るという最初の計画は早くも崩れ、この分では実験計画の確定にあと一か月、予備実験と実験器具の製作に（研究所の技術員によれば）少なくとも三か月、本実験には一膝一週間でやるとして（かなりきついですが）二十膝で五か月、その後の論文作製に（Dr. Seeshornによれば）六か月、全体に安全係数を見て更に三か月を加えると、あと十八か月が必要になります。何とか論文を仕上げ、Master of Philosophyの学位を取って帰りたいのですが、時間は矢のように過ぎて行きます。焦れば焦るほど時計の進みが速くなる気がして、タイムリミットまであと何か月と指折り数えながらライト教授の外來の掛け時計を見上げると、何と、象徴的に逆に回っているので我が目を疑いました。

III. 人口靭帯ワークショップ

RRRUとは独立してLeess - Keio人工靭帯を生産しているネオリガメント(株)は、人工靭帯に興味のある整

形外科医を対象に時々ワークショップを開きます。

この三か月に計四回、フランス、オランダ、ベルギー、アメリカ等から計二十人くらいの医師が訪れました。膝に関しては素人と思われる方から、リヨンの大学病院の教授までレベルはまちまちでした。たまたま慶應から来ているということで、臨床的な質問や具体的な手術手技の指導などを頼まれることがあり、自分としても色々の国の整形外科医と知り合いになる良い機会なのでよほどのことが無い限り、無報酬を条件につき合うことにしています。凍結保存してある人の膝を使って実技指導するわけですが、訪れる医師の手が不器用なものには驚かされました。この人にはどんな手術もしてもらいたくないと思う人が五人は居ました。一般論として日本の整形外科医のレベルは高いと言って良いような気がしました。リヨンのProf. Meyerからはその後丁寧な招待状をいただき、感激しました。実験が軌道に乗ったら訪ねてみようかと考えております。

五月三十一日から六月二日までは旧東ベルリンのフンボルト大学で開かれたACL再建のワークショップに参加しました。予定の演者がクリケットの試合で肋骨を強打して動けなくなり、ピンチヒッターでした。ベルリンでは、東西ドイツ統合の感情的な盛り上がりは既に過去

のものとなってしまいました。西から自由に流れ込んでくる豊富な商品を目にしながら、仕事も買う金もない旧東ベルリンの人たちは大きな経済格差に悩んでいるように見えました。色々な試算がある様ですが、GNPの東西格差が無くなるには楽観的に計算して二十年、実際には四十年以上必要と考えられているようです。

ワークショップでは、主催者のパウル教授の下で仕事をしている、私とほぼ同年代のフランケンベルグ先生と友達になりました。彼は東ベルリンで、両親と自分の家族と同居して大きな一軒家に住んでいましたが、統合後間もなく、一枚の証書と共にその家は以前自分の物だったという人が現れてついに家を取られてしまい、今はマンション住まいだと言っていました。これは珍しくない話で、今の法律では従わざるを得ないのだそうです。パウル教授からは次回のワークショップには招待状を出すので参加してほしいと言われ恐縮しました。

IV. 臨床活動

手術を含めた臨床活動に必要な、British Medical Councilの認可が取れそうです。本来アメリカのECFMGにあたる外人医師のためPLABテスト(Professional and Linguistic Assessments Board)を通らな

いといけないところを、書類審査だけでパスしました。矢部教授、富士川助教授、ライト教授などからの推薦状が威力を発揮しましたが、今年の二月から登録料が二倍の四百ポンドに値上がりしていたのはちょっと痛かったです。認可が降りれば何か相談を受けた時には、リーズ大学の関連病院に向いて膝の手術や関節鏡の手伝いなどをすることが出来ます。しかし臨床は片手間にやる性格のものではなく、リーズに来ている本来の目的を見失わないように、「あせらずに、着実に、そして（患者のためになることは）積極的に」やるつもりです。

V. その他

(1) 家の修理

風呂桶、排水管、シャワー、トイレ、絨毯、キッチン
の椅子、水道の栓、セントラルヒーティングのコントローラー、洗濯機（二回）、蛍光灯、電気掃除機、などが壊れ、修理を要しましたが完了しました。絨毯には前に入居者が置いていってくれた蚤が居て、脚だけに出た原因不明の発疹が蚤によるものと気づくまでの二週間は、何か悪い病気ではないかと心配しました。完全に蚤を駆逐するには更に四週間かかりました。故障の殆どは自分で直さねばならず、無理な所はいちいち家主と連絡を

取ってやるので大変手間がかかります。しかし、イギリス人は家の修理や庭の手入れを趣味の様にしている人が多く、古い壊れた家を安く買って数年がかりで気長に直しながら住んで居たりするので、このくらいは当然なのかもしれません。家を借りる習慣のあまり無いこの国で程度の良い貸家を見つけようとする事自体が難しい様です。

(2) 車の購入

ぼんこつのフォルクスワーゲンゴルフを、RRRUの皆の反対を押し切って購入しました。購入時既に六年で八四七〇〇マイル走っていました。三か月の保証期間中に二回小さな故障がありました。が現在のところ動いております。ここでは車が無いと生きて行くのに苦労しますが、逆に車が有ると日本よりはるかに便利で三か月で四五〇〇マイルも走りました。

(3) 幼稚園・学校

長男慧（さとし、九月で五歳）の幼稚園五月編入と九月からの小学校入学、次男慎也（五月で三歳）の九月からの幼稚園入園、妻規子の託児所付英語学校入学が終わりました。幼稚園の数そのものが少なく順番待ちの人が大勢居るうえ、七月初めで学年が終わる制度での五月編入だったので条件が悪く、慧はもう少しで九月まで待た

されるところでしたが、近所のジーンおばさんに頼んで無理やり押し込んでもらいました。そのお陰で、子供達はすっかり「自分が外国人である事」に慣れてくれました。

(4) ヨークシャー日本人会(リーズ)

現在四十名の会員(四十家族)が居りますが、移動(帰国)の時期です。医師は僕を含めて四人います。日本人が少ないお陰で医師以外の方々と親しくおつき合いさせて頂いております。父の診療所にかかりつけだった方が居たりして驚きました。

(5) 英国留学日本人医師会(オックスフォード)

やはり移動の時期のため正確な人数は不明ですが、六月二十八日にオックスフォードで開かれた会合には二十四名が出席し、約半数とのことでした。留学の目的は、基礎では分子生物関係が、臨床で臓器移植の関係が多いようです。整形外科では高取先生(東大、膝関節)、種子田先生(埼玉医大、膝関節)、小川清久先生のネーペンだったとの事で盛り上がりました、西山先生(千葉大)、橋本先生(大阪大学、脊椎、同級の米山先生と防衛医大で一緒だったそうです)、などが来られているようです。慶應からは緒方先生(小児科)、高田先生(中央臨床検査部)の二名が名簿に載っていましたが当日は会えませ

んでした。大阪大学救急部の平出先生(外科)は私の医学部の同級生、旧姓日下典子先生のご主人で、オックスフォードで初めてお会いしましたが、済生会神奈川病院に二年研修に来ていたこともあって意気投合しました。色々な出会いもイギリス留学ならではの経験だと感じています。

(6) ユニバシヤード大会

七月十五日から二十四日まで、隣街シェフィールドを中心に第十六回ユニバシヤード世界大会が開かれ、大好きなバスケットボールの試合を堪能しました。リーズ大学スポーツセンターも四か所に分かれたバスケットの会場の一つだったこと、殆どの試合が午後六時半と八時半に行われたので、幾つかの試合を見ることが出来ました。大会は男女ともアメリカの圧勝に終わりましたが、日本チームや、日本からの国際審判員の方々と大変親しくなることが出来ました。彼らから増本先生、辻先生(内科)といった同窓のバスケット部出身者がチームドクターとして活躍しつつある事を聞かされ、大変心強く感じました。また、国際審判員の布川さんは内科の池田教授(医学部バスケットボール部部长)の武蔵高校時代の後輩で、浦和で開業された福岡先生(浦和市立病院時代大変お世話になりました)にかかりつけである事も分か

り、世の中本当に狭いものだと痛感した次第です。

英語はなかなか進歩せず、研究も思う様に進まず、もう少し苦しい思いがあっても良さそうなものですが、なぜか大変楽しく毎日を過ごしております。貴重な時間を頂いて居る事に心から感謝しつつ、残された時間を無駄にしないよう頑張りたいと思います。

涼しい夏のリーズより

敬具

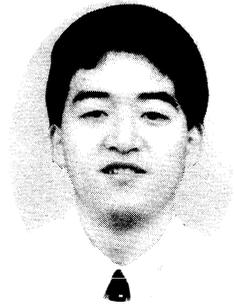


新人紹介



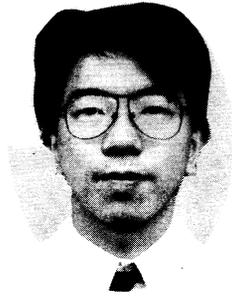
井 幡 巖

出身校 慶應義塾高等学校、大学医学部
趣味 音楽、車、料理、オーディオ
入局の動機 バイオメカ、生化学、生理学と幅の広い研究分野を持っているからです。
現 況 総合太田病院へ出張後、現在大学院生として勉強させていただいております。これからも御指導の程よろしくお願い致します。



上 田 誠 司

生年月日 昭和三十八年四月十四日
出身校 慶應義塾大学(67)
浦和市立病院・国立栃木病院と出張先及び諸先輩方に恵まれたため、失敗・見落としの多い毎日を大禍なく過ごしております。早く一人前となり、周囲より信頼されるよう頑張りたいと思います。



大和 俊彦

生年月日 昭和三十六年一月二十九日

出身校 慶應義塾大学医学部卒（68）

趣味 スキー、テニス、ゴルフ

入局の動機 以前より外科系志望であり、又スポーツ医学・リユーマチにも興味があり入局を決めました。

現況 入局後既に二年四ヶ月たち、現在は警友病院にて主に慢性疾患を勉強させていただいております。まだまだ失敗が多く、多くの先生方に御迷惑ばかりおかけしておりますが、今後も頑張ってやっていく所存ですので、宜しく御指導・御鞭撻の程宜しくお願い致します。



大平 孝之

生年月日 昭和三十六年四月十二日

出身校 札幌南高校、慶應義塾大学医学部

趣味 学生時代は野球、現在はゴルフ（超初心者）

入局の動機 外科系志望であったこと、内臓器よりも骨・関節、神経・筋に興味があったこと、整形外科はきわめて広範な領域を含む学問であり、疾病、外傷により損なわれた機能を再建するという点に魅力を感じたことなどにより決めました。

現況 清水市立病院でのフレッシュマン出張を終え、現在浦和市立病院にて研修させていただいております。

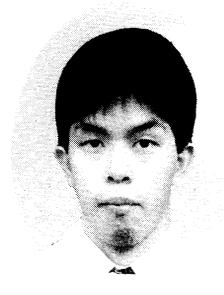
初めて術者になった時の喜びと緊張感を忘れずに今後も頑張っていきたいと思えます。御指導のほど宜しくお願い致します。



熊久保 貴美

出身校 栃木県立大田原高校、慶應義塾大学医学部(68)
趣味 マラソン、テニス、日本酒、剣道
入局の動機 スポーツ医学・機能再建に興味をもつていた為。

入局後の感想 入局以来、整形外科の守備範囲の広さに驚いています。基本より着実に学んでいきたいと思えます。御迷惑をおかけすることもあります。御指導の程よろしくお願い致します。



佐藤 和毅

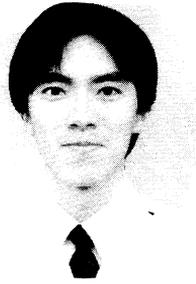
生年月日 昭和三十八年十二月二日

出身校 慶應義塾大学医学部(68)

趣味 車、スキー。学生時代はラグビー、柔道。

入局の動機 筋骨に興味があるから。

入局後の感想 昨年は済生会神奈川病院で、現在は東埼玉病院で勉強させていただいております。三年目の現在も毎日を無我夢中で過ごしているという状態です。慶應大学整形外科の名に恥じぬよう一生懸命精進してゆくつもりです。諸先輩方、今後も御指導、御鞭撻の程よろしくお願い致します。



笹崎 義弘

生年月日 昭和四十年三月二十七日

出身校 慶應義塾大学

クラブ 六年間、競走部で中・長距離を走っていました。

趣味 スキー、テニス、料理を少し。

フレッシュマンとして一年間、大病院で研修させていただきました。初の出張では、大田原赤十字病院にて外傷を中心に勉強させていただきました。

今年の七月からは、日野市立総合病院で研修させていただきます。良き先輩方に恵まれ、整形外科に入局してよかったです。出張先で御迷惑

をかける事もあるかと思いますが、今後とも御指導の程よろしくお願い申し上げます。



南雲 剛史

生年月日 昭和三十九年五月四日

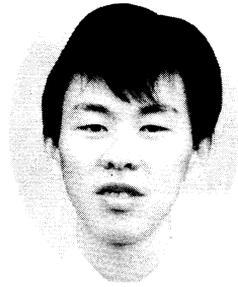
出身校 開成高校、慶應大(68)

趣味 スキューバダイビング、車関係、ゴルフ

入局の動機 外科系のもつ良い意味での上下関係が好きであったこともありますが、整形外科は生命に係わることと比較的少ない分、逆に患者の要求度が高く、やりがいを感じたからです。

現在の心境 学ぶべき医学や医療技術の多さに目の眩む思いですが、最近特に、現場医療にたずさわる医師とし

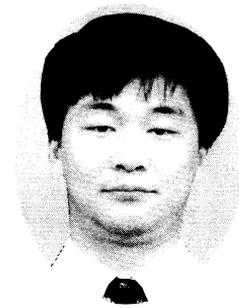
ての責任の重さを痛感しております。慶應整形外科の名に恥じぬよう努力する所存でありますので、御指導の程宜しくお願い申し上げます。



西脇 祐司

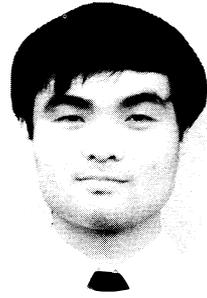
出身校 慶應義塾大学医学部
趣味 ゴルフ、テニス、映画。ちなみに最近みた
ジュームズ・スチュアート主演の、*The wonderful*
*Year*は、なかなか感動できる映画でした。
入局の動機 整形外科の手術の多様さに魅かれたのだと
思います。
現況 フレッシュマン出張の一年を伊勢原協同病院で過
ごし、現在は芳賀赤十字病院で頑張っています。もっと
勉強しなくてはと思いつつ、日々の診療に忙殺される毎

日です。早く一人前の整形外科医となるよう努力を重
ねていきたいと思えます。



谷 戸 祥 之

生年月日 昭和三十八年四月二十一日
出身校 慶應義塾大学医学部(68)
趣味 アメリカン・フットボール
入局の動機 外科系志望だった事。学四の事、ブラジル
で富士川先生の講演を聞き、感動した事。
現在の心境 毎日、毎日が新しい疾患、新しい事との出
会いばかりで目まぐるしく過ぎていきます。これまでに
は経験しなかった時の流れの中で、必死になって働いて
います。今後も、奮闘努力していきますので、御指導、
御鞭撻の程よろしくお願い致します。



山下 裕

生年月日 昭和三十九年八月二十四日

出身校 慶應義塾普通部、高校、慶應大学

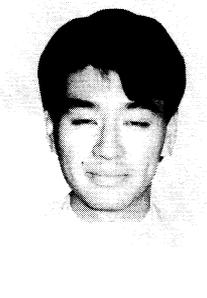
スポーツ 高校、大学時代 陸上競技

趣味 クラリネット演奏

入局の動機 スポーツ医学、運動器疾患に興味があり入局いたしました。

現状 入局後早くも三年目となり、伊勢慶應病院にて勉強させていただいております。

失敗の連続で、諸先生方に御迷惑をかけておりますが、一刻も早く一人前の整形外科医となるべく努力いたします。今後とも御指導の程宜しくお願い致します。



吉田 英彰

生年月日 昭和四十年一月十八日

出身校 慶應義塾志木高等学校より大学医学部

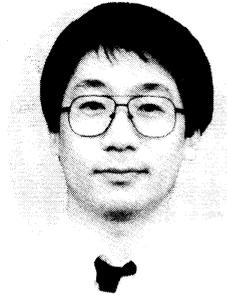
趣味 テニス、ラゲビー。

これからは、ゴルフ、スキーもがんばるつもりです。楽しく飲みあかすこと。

入局の動機 手術のできる外科、整形外科を考えましたが、外科の将来に不安を感じ、また対象とする領域の広いこともあり整形外科を選びました。

現況 慶應での一年間のフレッシュマン生活の後、済生会宇都宮病院を経て、現在は静岡赤十字病院に勤務しております。毎日が新しいことはかりで、月日のたつのが

早く、あっという間に二年半が過ぎ去りました。よき諸先輩に恵まれ、勉強になるとともに楽しい日々でした。これからも一生懸命がんばりますので、御指導御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



宇井通雅

生年月日 昭和三十六年九月十七日
出身校 成田高等学校、東京慈恵会医科大学
趣味 バイにも凝っておりましたが、現在は一年前に始めたゴルフあたりが趣味といえる程度になってきたのでしょうか。

入局の動機 比較的機械を扱う事が好きであったこと、

スポーツ整形に興味があったことだとおもいます。入局後の感想 現在三年目を迎えましたが、まだまだ全く余裕のない気持ちで一杯です。「初心を忘れずに」をモットーに日々過ごしていきたいと思っております。



牛久尚彦

出身校 筑波大付属高校、藤田保健衛生大学
入局の動機 当時メスを持たなければ医者ではないと思っていました。それに学生時代クラブなどで怪我をすると、最もお世話になっていたのが整形外科だったこともあり入局を決意しました。

現況 現在平塚市民病院にて毎日忙しいながら充実した日々を過ごしています。また素晴らしいスタッフのも

とで御迷惑をおかけしながらもいろいろ御指導いただけることをうれしく思っています。

これからもたくさんの先輩方とお会いでき、御指導いただけるよう頑張っていきたいと思えます。宜しくお願ひ致します。



田 辺 巖

出身校 栄光学園、東邦大学

趣味 テニス、合唱

入局の動機 外科系の中で、患者が死ぬことなく（？）元気で退院させられること、特に機能再建外科であることが魅力で。

入局後の感想 慶應整形に入局し、本当に良かったと思えます。同期の仲間にも恵まれ、諸先輩方には公私に渡り

良くしていただいています。“一人前”の整形外科医となるべく今後とも努力していきたいと思えます。



富 上 雅 好

生年月日 昭和三十二年十一月十二日

出身校 高知医科大学

趣味 麻雀、柔道

現況 経済学部卒業後六年間高知で医学を学び、再び大
学に戻ってこれました。すばらしい同期、諸先輩と知り
合えとても幸せに思っております。周りの温かいハート
に甘えず頑張りたいと思っております。現在太田病院で細
谷先生の御指導のもと元気に（相変わらずこれだけがと
りえ）やっております。



井上元保

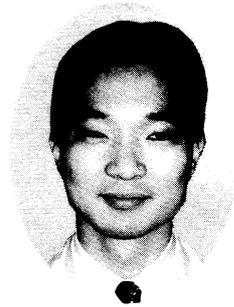
生年月日 昭和三十八年十二月四日

出身校 慶應義塾大学(67)

スポーツ ラグビー、ジョギング

入局の動機 はじめリハビリに入局し、整形をローテーションして、自分にはこの科しかないと思い、転科してしまいました。

現況 荻窪病院から本年七月より大田原赤十字病院へと移り、やっと生活にも慣れてきました。諸先輩方の教えに従い、整形外科の基本を学ぼうと励んでおります。今後とも宜しくお願い申し上げます。



稲見州治 (69)

卒業して早一年、駆け出しの日々は矢の如く奮闘努力の甲斐もなく今日も涙の日は落ちる。私が医者になろうと考えたのは、ある意味で勉強が好きだからである。もともと学生するときにはあの半強制的にやらされる知識の習得(≪勉強?≫)が苦手で、ついには留年まで経験することとなった。今も気持ちは変わらないが、当時の私は、仕事≪勉強は読書であると考えていた。読書といっても医学書ではなく、小説や文学である。私には文学の師匠がいて浪人の時分からあれこれ教えを賜ってきた。今日こうして私があるのはその師匠によるところが大である。但し先方は俺は弟子は取らんといっているのです、こちら

が勝手に師匠と仰いでいるのだが、いずれにせよ師匠は師匠である。これを読みなさいといって渡された小林秀雄全集に、通りを向こうから来た人間に突然殴られたような感銘を受け、爾来猛然と読書した。この一、二年は文学よりは医学の勉強に比重があるが後々はバランスをとっていきたいと考えている。

私は三つの財産を持っている。無駄飯・失恋・寮生活である。師匠は私に、人生に無駄な努力はないと説いたが、初めの二つはいずれも努力が実らなかった結果であり逆説的ではあるがやはり師匠の説は正しい。慶應義塾大学の寮（日吉寄宿舎）の存在はあまり知られていないようだが、一言でいうと見渡す限り遙かに続く葡萄畑の中に立っているようなところで一房、一房の葡萄はみな法律用語でいうところの果実なのである。

そういったわけで今回入局時に提出した履歴書の続きを書くことができたことは誠に慶ばしい。



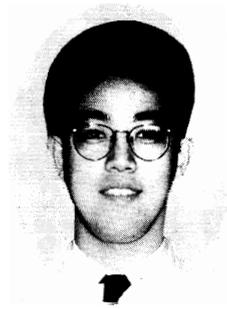
岩本 潤 (69)

整形外科に入局し約一年半、魚沼病院に勤務し約八ヶ月が経ちました。カンファレンス、外来、検査、手術、抄読会と日常診療では非常に充実した生活を送っている反面、学問的探究に少しくとくなっています。しかしながら、日常診察では、わからないことがたくさんあるなか、医学は科学であるため、治療には根拠があるべきだと信じ、独立自尊の精神に従いながらできるだけの理由をつけるよう努めています。また、「何か新しい治療法または手術法はないか」と静かに燃えています。すばらしい先輩方のもとで、いっそう努力したいと思っています。

大山 泰生



菊地 淑人



学生時代はラグビー部と剣道部を兼部し、毎日クラブの連続で頬がこけ、人に会うたび「やせた、やせた」と言われていました。何か悪い病気にでもかかったのかと心配し、誰でもいいから一言「太った？」と言ってくれないかと思う毎日でした。ところが時の流れは速いもので、医者になり総合太田病院に勤務する今や、人に会うたび「太った、太った」といわれ、お世辞でもいいから「やせた？」と言ってくれる人を虚しく探し求めています。

仕事では、新しいことの連続でたいへん勉強になり、またそれが楽しい毎日ですが、それに見合う知識を身に

つけるよう努力しています。良き先輩達からいろいろなことを吸収して身体ばかりでなく、頭の方も太るように、自覚をもって勉強していきたいと思っています。今後とも御指導の程、宜しくお願い致します。



河野 仁

生年月日 昭和四十年九月八日

出身校 慶應義塾大学

スポーツ 籠球部

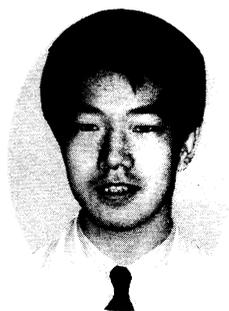
平成二年四月慶應義塾大学整形外科学教室に入局してから一年以上経過した現在、私は足利赤十字病院整形外科に勤務させていただいています。慶應では一年間は、整形外科という学問のおぼろげな輪郭を自分なりに描いた時期だったように思います。

外来でコンピューターを操作しながらカルテを書き始めた頃は、キーボードの打ち方もままならないように聞こえたこともないドイツ語の書き取りと、正直にいつてかかなりのストレスでした。少し慣れてきた頃にようやく先生の診察に目がむくようになり、みようと見真似で診察法を覚えて当直に備える、といった具合でした。また、手術に関しては自分なりに勉強し、睡魔と闘いながら一生懸命見ていたつもりでしたが、いざ出張して抜釘など執刀させていただいてみて、殆ど身についていないと痛感しました。各器具の選択、使い方、縫合といった段階から手とり足とり教わりながらという状態です。外来もまた然り、隣の診察室にX-IPを運んでいます。足利市民の皆さんには申し訳ありませんが、医師の育成ということで許していただこうと考えています。

足利というところは、交通事故や工場の機械による外傷患者が大変多いところです。指の切断などはよく来院し断端形成をしますが、慶應当直で約二名ほどのその筋の人の指を処置したことが思い出されます。また、私の最初のモーニングレクチャーは外骨腫でしたが、くしくも初めてのオペレーターをさせていただいたのが大腿骨の外骨腫でした。軟骨帽をとり残してはいけない”と必死にリユールで削りながら、”役に立ったな”とつぶ

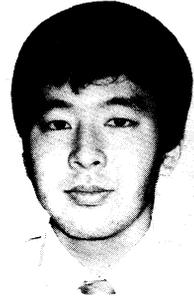
やきました。

毎日の仕事に追われ慶應での日々を振り返ることなどあまりないような状態ですが、この原稿を書くにあたってわずか数カ月前のことがとてもなつかしく思い出され、良い機会だったと思います。私事ながら平成三年一月二十日に長男「暉」（ひかる）が無事誕生し、病気もせずすくすくと育っています。キャッキヤといいながら私の帰宅を喜んでくれるその笑顔を見ると、もっと頑張らなければとやる気が湧いてきます。諸先生方にはいろいろご迷惑をお掛けするとは思いますが、ご指導よろしくお願いたします。



鈴木 楨 寿

初めて出張して二ヶ月、一生懸命をモットーに悪戦苦闘する毎日です。見る事、聞く事全てが新鮮で、今迄の不勉強を思い知らされています。一人前の医師として患者さんに接するようになるには、まだ時間がかかりそうです。



関口 治 (69)

平成二年に慶應義塾大学を卒業し整形外科学教室にお世話になっています。一年間慶應大学病院で研修し、平成三年七月より稲田登戸病院に転勤して諸先生のご指導のもと元気に働いています。やる気は十分あるつもりなのですが、知識不足、経験不足はいかんともし難く、戦力となるより足手まといになることも多いように思いますが。入局した際に『ちゃんとしたお医者さんになるのが目標です。』と挨拶しましたが、道のりの険しさをしみて感じると感じる今日この頃です。何事にも積極的に取り組み、経験を積み重ねてゆきたいと考えていますので何卒よろしくお願い致します。



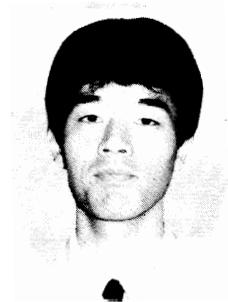
高石 官成

生年月日 昭和四十年十一月三十日

出身校 慶應大学

クラブ ヨット部

一医局に入局して以来はや一年が過ぎ、現在、北里研究所病院においてスポーツ外傷、慢性疾患を中心に勉強をしています。外来、手術に追われ、発見をするたびに恥ずかしい思いの連続で、自分の無力さを感じながら毎日を過ごしています。一日も早く、臨床面でも研究面でも一人前になれるように頑張りたいと思っています。



高田直樹

昨年四月に入局しはや一年半が過ぎました。毎日見聞することが全て新鮮に感じられ、失敗と反省を繰り返しております。まだまだ半人前ではありますが今後とも宜しくお願い致します。



中山新太郎

出身校 慶應義塾大学
クラブ バスケットボール部
平成三年七月より、立川共済病院に出張しております。
自分の無力さを痛感、新しい発見に驚く毎日をおくっています。

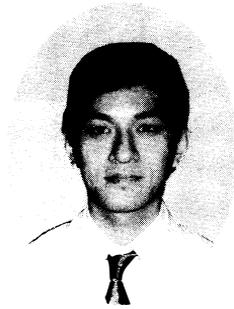
諸先輩方の御指導により、ここまでやってこれました。これからも、一人前の医師になるため努力する所存です。ですのでよろしくお願いいたします。



平林 尚

平成二年四月に入局し、大学病院でのヌクヌクとした研修を終え、平成三年七月より済生会神奈川県病院にて研修中であります。

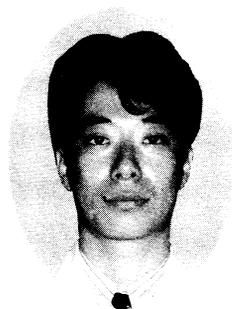
部長の厳しい御指導を頂き、一睡もできない当直を繰り返し、実社会とは大変なものだと実感しております。これから尚一層努力してゆく所存です。御指導御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



楊 玄 壮

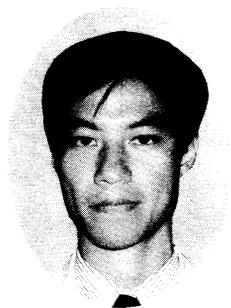
横浜に生まれて二十一年、大学受験では浪人と、医者になってからも放射線科に一年おじゃまし、整形外科で今年初めての出張に出た。自分なりに気を払ってやっているつもりなのだけれど、回りから見るといろいろと抜けている様で、何となくしっくり来ない。思うに今まで結構道草をくってきってしまったためのくせなのかしら、はたまた早くもぼけが来たのか？全く完璧にやるということがいかに大変かを身にしみている今日このごろである。こんなときに、ふと気が付くと、気ばかりがあせっている自分がある。大河のように、ゆったりと大きく動く様になりたいものだ。そして最後に大海原に注ぐ。自

分の仕事もこんな風にやり遂げたい。さあ、今日も元気にがんばるぞ!!



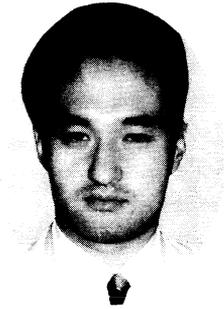
穴澤 卯 圭

生年月日 昭和四十年十一月十四日
出身校 山形大学
趣味 知らない街で酒を飲む事
スポーツ サッカー、スキー
入局の動機 幅広いスタッフの下で研修したかった。
現況 入局後、早くも一年が過ぎ、各班の充実した先生方の下で学べた事に感謝しております。未熟者ですが今後とも厳しい御指導、宜しくお願い致します。



太田 圭 一

出身校 福島県立医科大学
クラブ ゴルフ部
平成二年四月、慶應大学整形外科に入局以来、約一年二カ月慶應病院で研修させていただき、本年七月より川崎市立川崎病院に勤務しております。外来、病棟、手術と新しい発見があり充実した日々を送っています。
一日も速く諸先輩に近づけるよう努力したいと思います。今後とも御指導よろしくお願いします。



小武海 成 朗

出身校 東京医科大学

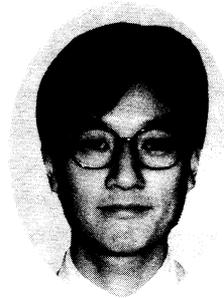
クラブ ラグビー部

趣味 マリンスポーツ

スポーツ医学に興味があったので、整形外科学を希望し、入室させていただきました。整形外科は、命の危険が少ないのではなからうかと、勝手に考えておりましたがそれは、とんだ誤りとわかり、入室以来、厳しい戦いの毎日で、自分の無力さを痛感しております。

平成三年七月から、済生会宇都宮病院に出張となり、浜野先生を始め、諸先生方にご迷惑をかけながらも、ご指導をいただき有意義な経験をさせていただいております。

す。これからは一步でも諸先生方に近づけるように、努力して参りたいと思います。
今後ともよろしくお願いいたします



直長 圭植

生年月日 昭和四十年九月一日

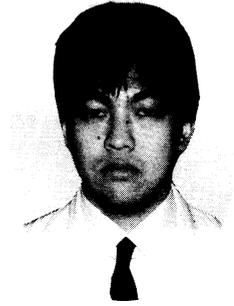
出身校 北里大学

趣味 ドライブ

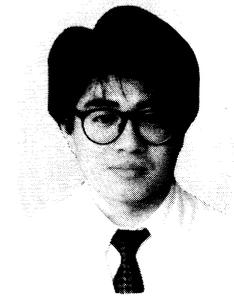
クラブ スキー部

現在、清水市立病院に勤務しております。高橋先生をはじめ諸先生方に御迷惑をお掛けしながら日々、外来・手術にと忙しい毎日を送っています。

若松次郎



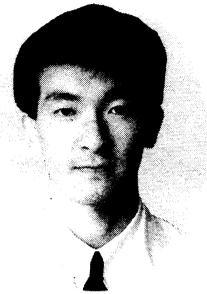
安藤祐之



出身校 東京学芸大学付属高等学校、慶應義塾大学
趣味 音楽鑑賞

入局の動機 高齢化社会を迎えるにあたって、整形外科的疾患の治療に対する需要が今後一層増えると考え、また、運動機能の再建の手助けをすることによって患者さんと喜びを分かち合いたいと思ったからです。

今後の抱負 一日も速く、諸先輩方のような立派な整形外科医になりたいと思います。



榎 本 宏 之

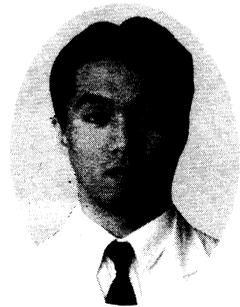
出身校 桐蔭学園高校、慶應義塾大学

趣味 ドライブ、スポーツ

入局の動機 高校時代に陸上競技で、大学時代にラグビーで何回か怪我をしたため、整形外科学に以前より興味を持っていた。

今後の抱負 研修期間中に整形外科学の基礎を身につけるのはもちろん、整形外科以外の医学や医学以外の学問の知識も幅広く身につけたい。また人間的にも成長し慶應の名に恥じぬ医師になりたい。

諸先輩の先生方へ これからいろいろと御世話になります。すがどうぞよろしくお願い申し上げます。



小 粥 博 樹

生年月日 昭和四十年二月二十六日

出身校 都立戸山高校、慶應大学(70)

趣味 ラグビー、バレーボール

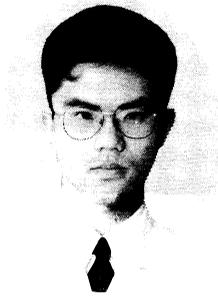
整形志望理由 外科系の科に行くことは早くから決めていましたが、整形か外科にするかは、二者択一となり迷いました。最終的に見えない敵よりも、目に見える敵を相手にしたいと思い、整形外科を選ばせてもらいました。自分の性格 基本的にマイペース(悪い意味で)で、気くばりに欠けるところがあり、やるが遅いタイプです。根は明るい方だと思いますので、気にいらぬ点、お気付きの点等ございましたら遠慮なく、ビシビシと指

摘して下さい。

抱負・挨拶 今年には各班のエキスパートの先生方について回れるので、まず基本から、しっかりと勉強していきたいと思いません。

何分、仕事がのろいもんですから雑用に手一杯で、成書を読む時間がなくならないよう、気をつけたいと思いません。

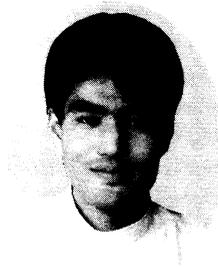
どうぞ宜しく願います。



大津寄 雄志

私が医者になろうと思ったのはほとんど物心ついた時と同時である。祖父母が開業しており、その姿を見ていて自然に「僕はお医者さんになるんだ」と言っていたそ

うである。だから自分の理想の医師像を考えた時、自然に祖父母の姿とだぶってしまふ。―誰からも信頼される町のお医者さん―将来どんな病院に勤務しても、そういう患者さんとの心のふれ合いを大切にしたい。



日下 部 浩

生まれ 浅草

出身校 慶應義塾

部 ニスアソシエーション、水泳部、美術部、軽音部、メジャーコードテ

ニスアソシエーション

水泳の種目 背泳

趣味 写真、冒険、パーティの主催

音楽の趣味 レッドツェッペリン、ボブマリーリアンド

ザウェイラーズ、セックスピストルズ、たま、キャン
デイズ、ローリングストーンズ、エリッククラプトン、
ガンズアンドローゼズ、ピンクフロイド

大学時代は部を多数兼部していたためか、勉学の方は
つついとうとんじてしまっておりました。(と、部のせ
いにしておこう) 毎日大学に来るには来るのですが、学
生ホールより奥地にはあまり踏み入れることはありません
でした。

しかしながらその生活は実に充実していて、多くの出
逢いがあり、そして楽しい日々でありました。卒業式の
あと、慶應では園遊会と大宴会(本当に五〇〇〇人集ま
る!!)が毎年新高輪プリンスホテルの飛天の間で催かれ
るのですが、この園遊会や最後の慶早戦で泣けたことは
私の取柄でもあります。

さて、その様な学生時代を過ごしてしまった現在、当
然の事ながら知識がまるでプレインスパゲッティの様に
ございません。晴れて、当科入局とさせて頂いたのは良
いのですが、まだまだたまたまて箱を開けたばかりの漁師の
ような私です。今後は今までの充電も結構ある事ですし、
力の限りちゃんとやろうと思っております。



浪花豊寿

生年月日 昭和四十一年七月三十一日

出身校 慶應志木高校、慶應義塾大学

クラブ 水泳部

趣味 カラオケ、パチンコ

志望動機 頭が弱くても、体力で勝負できそうな気がし
たからです。

抱負 医師という職業は、一に真心、二に体力、三、四
がなくて五に知力だと信じております。真剣に患者と接
し、一所懸命勉強し、そして、ちょっとカラオケをしつ
つ頑張りたいと思います。今後共、この未熟者を見捨て
ず、御指導宜しくお願い致します。



私. こういう者です。



古
谷
晋

よろしくお願ひします。



堀
田
拓

生年月日 昭和三十七年十月六日

出身校 慶應義塾大学

クラブ 競走部

趣味 スポーツ (野球はみるだけ)

自分の無知無学さを棚に上げて、私にもできるはずだと強気で入局してしまいました。今のところ何もできない私ですが、日々力をつけていきたい、一生懸命頑張りますのでよろしくお願ひします。



牧田 聡 夫

出身校 慶應義塾大学

趣味 食へ歩き、野球観戦

入局の動機 動かない指が動くとか歩けない人が歩けるようになると言った機能の再建に興味があり入局しました。

これからの目標 スポーツ関係の仕事にかかわればすばらしいと思っています。



森 井 健 司

出身校 大阪府立北野高校、慶應義塾大学

学生時代 慶應義塾大学医学部管弦楽団と、全塾のワグネルソサエティーオーケストラにて、バイオリンを奏しておりました。

ひとこと アカデミックな雰囲気の医局で、勉強させていただき幸甚に存じます。諸先輩方の足をひっぱらぬよう、努力してゆきたいと思えます。



石井聖佳

難関(?)の入局試験を通り、慶應の整形外科に入局しました。スポーツが好きなので体力には自信がありました。ですが、医師という職業に必要なのはまず体力：睡眠と戦う体力だということがわかってきました。しかし厳しくも優しい先輩諸氏、個性豊かな同僚に恵まれたこの環境で多くのことを学びたいと思っています。



河野克己

河野克己といえます。筑波大学の出身です。大学生の頃は、バスケットボールとアイスホッケーをやっていました。いつも運動ばかりやっていたせいか、机にむかってじっくり勉強するよりは、汗をかきながら病棟を走りまわっている方が性に合っているような気がします。まだ、わからない事ばかりですが、何事も身体で覚えていきたいとおもいます。御教授、御鞭撻の程、よろしくお願い致します。



杉本 義久

出身校は福島県立医大です。大学に入るまえに箱根の理学療法士の学校にいていました。

実家は伊豆の大仁というところで月ヶ瀬リハセンターの近くです。

大学のゴルフ部の先輩が先にこちらの医局に入っていてそのすすめもあって入局しました。

やっと病院での生活にもなれました。へこたれそうになることもあります。明るく楽しくやっていきたいと思えます。

みなさんよろしくお願い致します。



竹島 昌栄

生年月日 昭和三十九年四月八日

出身校 東京医科大学

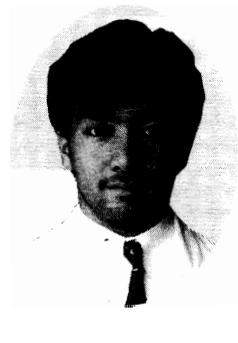
クラブ 体育会スキー部

趣味 スポーツ全般、音楽

慶大整形外科に入局して早や五ヶ月、夏休みシフトの忙しさも過ぎ、ようやく周囲にも目が向けられるようになった今日此頃。初めのころは（今でもそうですが）、失敗の連続でObenの先生をあきれさせることたびたびでしたが、今は、その失敗をいかにフォローするかという姑息な手段を覚え、何くわぬ顔をしている毎日です。私の目標といたしましては、この失敗（失態？）の数

を減らし、早く、いちにまへのドクターになるということであり、仕事に、勉強に、遊びに夜に（？）励みたいと思います。

今後行く先々で御一緒するであろう諸先生方、どうぞ宜しくお願いいたします。



照屋 徹

出身校 琉球大学
クラブ ボードセーリング、ボート

初めまして、沖縄は琉球大学出身、照屋徹です。今年から慶大卒七十回生の先生方と共に勉強させていただくことになりました。“七十回”と聴いたときは驚きました。母校の琉球大学はできてまだ十年余り、私自身は五回生で、入学当時学回先輩がいない状況でした。その

ような事から伝統のある学校への憧れも大学卒業が近づくにつれて強くなってきていたあるとき、たまたま琉球大に来ていた慶應出身の先生方の話を伺った直後から、駄目で元々の気持で東京に来たのが国試前の三月。面接ではスタッフの諸先生方の質問にたじろぎながらも現在こうして筆をとる事ができることに感謝しています。これからどうぞ御指導の程宜しくお願いします。



森山 一郎

僕は旅行だとか引越したとか、そういう移動するところが好きだ。最近旅行する事は暇にも金銭的にも恵まれない為、めっきり減ってしまった。ところが引越した方はかなり激しい。

ここ数年、数百キロ単位の引越しをしている。距離

的にもかなり離れているせいか、環境はかなり違いそれぞれ外国のような感じさえある。かなりのエネルギーを使ったが、行った先々で、いろいろな人と逢うことができ知り合いになれた事は大きな財産になっているような気がする。

これからもいろいろな所へ行くと思うが、それぞれの場所です。



早稲田 明 生

出身校 暁星高校、産業医科大学

趣味 波乗り、ラグビー、旅行

特徴 気は長く、明るい。

几帳面だが、ポカ多々あり、ナルコレプシーの発作時々あり。

整形外科に惚れ込んで、一所懸命になりたいと思っております。

教室だより

●教室人事

(1) 医長

平成二年1月 三谷哲史君

田無病院

1月 鈴木信正君

済生会中央病院

1月 市原真仁君

日野市立病院

1月 田村興太郎君

静岡赤十字病院

1月 森 謙一君

佐野厚生病院

1月 藤井英治君

伊勢慶應病院

8月 大熊哲夫君

大田原赤十字病院

9月 倉林博敏君

平塚市民病院

(2) 副院長

平成2年7月 三谷哲史君

田無病院

(3) 教室幹事

昭和64年1月～平成3年3月

藤村洋一君

(4) 大学関係

平成2年4月 内西兼一郎君

慶大助教

4月 高橋正憲君

東京歯科大教授

4月 井口 傑君

慶大講師

4月 浜田一寿君

東海大講師

(5) 慶應義塾大学病院

8月 関 恒夫君 藤田学園保健衛生大教授

11月 里見和彦君 慶大講師

平成元年10月 矢部 裕君 副院長

●留 学

平成元年11月 高山真一郎君 ニュージーランド

●慶弔のおしらせ

○御結婚

平成元年10月 中澤秀夫君

10月 井上邦夫君

10月 伊崎寿之君

10月 月村泰規君

12月 西澤隆君

12月 仁平高太郎君

2年4月 松本隆志君

6月 森岡秀夫君

6月 有野浩司君

10月 今本雅彦君

10月 小林一君

3年3月 岩部昌平君

○御逝去

平成元年 9月 小林保範君 御尊父
 10月 文 博史君 御母堂
 11月 土肥信之君 御母堂
 2年 1月 釵持政男君 御尊父
 2月 鷺谷澄夫君 御令室
 2月 崎谷文男君 (24回生)
 3月 早川武憲君 御尊父
 4月 道振義治君 御尊父
 4月 本田哲三君 御尊父
 5月 辻 啓一君 (34回生)
 5月 椿原彰夫君 御尊父
 5月 菅沼 淳君 御尊父
 7月 瀬尾喜郎君 (26回特)
 7月 久保宗人君 (18回生)
 8月 岡田衛生君 御母堂
 3年 1月 猪飼俊隆君 御尊父
 3月 永山悦朗君 御尊父
 3月 吉田 宏君 御尊父
 3月 佐藤昭一君 (専3)
 3月 高畑武司君 御尊父
 3月 藤田亨介君 御令室

○御開業および退室

平成元年 10月 木村記行君
 2年 1月 文 博史君
 1月 西山和男君
 1月 斉藤秀夫君
 2月 岩上哲郎君
 4月 吹本武憲君
 4月 米山芳夫君
 5月 早川武憲君
 7月 赤坂嘉久君
 8月 足立 秀君
 9月 石黒 隆君
 10月 吉井新一君
 3年 1月 松本 昇君
 1月 木佐木啓史君

(平成元年 4月～平成 3年 3月)
 藤 村 祥 一 記

”ふるさと” 正誤表

| ページ | 箇所 | 誤 | → | 正 |
|-------|-----------|---------|---|---------|
| P 8 | 下段 1 5 行目 | 内外漢 | | 門外漢 |
| P 9 | 上段 1 8 行目 | 教室幹部 | | 教室幹事 |
| P 1 1 | 上段 2 1 行目 | 外保健 | | 外保連 |
| P 1 5 | 中央 | ②教室幹事長 | | ②教室幹事室 |
| | 下段 | 泉田 重夫 | | 泉田 重雄 |
| P 2 5 | 下段 1 3 行目 | 複写器 | | 複写機 |
| P 2 6 | 下段 1 行目 | また基礎的な | | まだ基礎的な |
| P 3 3 | 上段 1 行目 | レリーフ | | レフリー |
| P 3 5 | 上段 3 行目 | はしばしばで | | しばしばで |
| P 3 6 | 上段 1 3 行目 | 肩しようか | | 肩にしようか |
| P 3 9 | 上段 1 2 行目 | schmorl | | Schmorl |
| | 1 4 行目 | schmorl | | Schmorl |
| P 4 0 | 下段 5 行目 | 侵襲 | | 侵襲 |
| P 5 4 | 上段 1 8 行目 | 教室院 | | 教室員 |
| P 4 0 | 下段 7 行目 | 作成 | | 作製 |
| P 6 1 | 上段 | 佐奈田 幸夫 | | 左奈田 幸夫 |
| P 7 1 | 上段 1 4 行目 | こうゆうこと | | こういうこと |
| P 7 6 | 上段 1 5 行目 | 名古屋に | | 名古屋を |

